

人権弁護士・海野晋吉の母——海野はる小伝——

砂川事件のことをご存じだろうか。

砂川事件の判決では、海野晋吉はことに憲法第九条の擁護をしていた弁護士であった。

「海野先生は真面目で人間的で……。僕らの弁護団の団長として、先頭になって頑張ってくれたのです」

当時、砂川事件の元被告であった土屋源太郎氏は二〇一三年一月七日こう語った。

今、国会で「特別秘密保護法案」が審議されている。安倍政権の下で憲法第九条もあやうい。

静岡市に生まれた海野晋吉は、人権弁護士として一生を全うした人であった。権力欲や名誉欲がなく法務大臣も引き受けず、常に弱い者、非権力者の側に身を



後列、長男平太郎、次男晋吉。
前列、はる、夫寿作

尾崎 朝子

置くという生き方をしてきた弁護士であった。

童謡「せいくらべ」の作詞者海野厚の祖父は、海野晋吉の父親寿作と兄弟である。

また寿作は、森鷗外の『渋江抽斎』に登場する素封家海野寿作その人であった。なぜ唐突に、鷗外の小説に海野寿作が出てくるのかずつと解らなかつたがそれが解けた（後述）。そして、弁護士海野晋吉の父親であることも知つたのである。

庶民の味方であつた海野晋吉を育てた両親、海野寿作と海野はる。明治の時代、晋吉は四人兄弟の末っ子として両親の慈愛を受けて豊田村曲金で幼年期を過している。

晋吉や寿作のことについて資料を読み解いていくと、とりわけ寿作の妻であり晋吉の母親である「海野はる」の存在が浮かび上がってきた。明治期、家父長制度の中に埋もれて、妻として家を守り従順に夫に傳きひっそりと生きていたステレオタイプの女性かと思いきや、意外なはるの一面がみえてきたのであつた。

はるは、頭が切れ気性のしつかりした女性で、特に弁舌が優れていたもので、当時曲金村一帯で、あだ名は女弁護士と呼ばれ「地主の海野家は、はるでもつていゝ」とも言われるような女性であつた。また、元曲金村の村長は、晋吉から母のことについて「私の今日あるのは優しい母の賜ですよ」と述懐を承つたと、言及しているように、優しい母親でもあつた。またその反面、息子晋吉の結婚については、花柳界に身を置いた女性（後述）との結婚を強硬に反対をしていたという事実もある。晋吉の母親「海野はる」は、本当はどのような女であつたのだろうか。

彼女の記述は少なく、語る人もない。ここでは海野家の人間模様を追いつつ、夫や息子を通し「はる」を前景化して、明治時代の女性の生き方や人物像、その魅力などについて迫ってみたい。

弁護士・海野晋吉のこと

最初に、海野寿作とはるの二男、晋吉のことについて

て触れてみよう。

海野晋吉は、一八八五（明治一八）年八月二九日、曲金の大檀那・北原海野家の新家である地主海野家で誕生した。新家は静岡県有度郡曲金村字真北^{マキツク}で、この辺りは豊かな水田地帯であった（現静岡市駿河区曲金、西豊田小学校正門前、南幹線道路の南側辺り）。

父寿作三八歳、母はる三二歳の時の子で兄平太郎一三歳、長姉さや八歳、次姉ふく五歳に次ぐ末っ子であった。

晋吉は、旧制静岡中学校（現静岡高校）卒業まで借金で過ごす。そして岡山の旧制第六高等学校を経て、一九一四（大正三）年七月、東京帝国大学法学部を卒業し弁護士となる。以後終始、「弁護士は赤十字と同じく、傷ついた人を救うのが天職」と言い、その信念を貫きとおした弁護士界の巨星であった。

一九四四（昭和一九）年、大政翼賛会が勢を増す戦時体制強化の中で、法曹界も時局に無関係であることは許されず大日本弁護士報国会を結成し、戦争協力

の姿勢を鮮明にしているとき、晋吉はこのような動きには一切加担せず、消極的な抵抗ではあるが戦争反対の立場を堅持していた。国家主義的方向に揺れる暗黒の時代に、体制におもねることなく、自由と人権の旗を守り続けた晋吉は後世まで高く評価され、人権の灯台、護憲の守護神という称号もあたえられている。人権とは何か、それを護るためにどう生きるか、を生涯問い続けた海野晋吉であった。

昭和の時代には言論弾圧と戦い、憲法を擁護し続けた在野の弁護士海野晋吉。彼が受任した裁判は数多いが、「砂川事件」の判決では、ことに憲法第九条の擁護に心を尽くしていることが、あまりにも有名である。

晋吉の前半生は「個人」の上に「国家」が重くのしかかっていた時代であった。晋吉は正面切つて国家と戦ったわけではなく、「国家」に押しつぶされそうなる人たちを「法律」を武器に懸命に支援したのであった。

一九六八（昭和四三）年七月六日、晋吉は八二歳で東京で逝去する。墓地は生まれ育つた曲金の西豊田小

学校の隣の法蔵寺にある。

はるの嫁ぎ先海野家はどんな家？

はるは、曲金の隣村八幡の八木家、八木助右衛門の娘として生まれた。八木家は、小地主だが諸国大名が参勤交代の際、人夫や駄馬を徴発する役目をおおせつかり、苗字帯刀を許された家柄で代々「八木助右衛門」を称していた。はるは、いわば地方の名家で生まれ育ったのである。当時八幡では井上家は豪農で、西野家、八木家も有名であった。駿河区八幡の八幡神社拝殿裏側にある灯籠にも寄付者名として八木助右衛門の名がはつきりと刻まれている。氏子として大金を寄付したのであろうか。また、八木本家のはるが生まれ育った家の跡地は、現在「カトリック八幡教会・八幡聖母幼稚園」になっている。

はるは有度郡曲金村の海野寿作に嫁いだ。(長男平太郎を明治五年に出産しているので、明治四年に一八歳で嫁いだのではないだろうか)

海野家の祖先は信州真田家と深い関係のある海野小太郎の一族で、初代は海野久右衛門源忠宗であったという。信州上田の真田幸村が、関ヶ原の戦いで豊臣方につき敗戦し、高野山の麓に世俗を逃れて閑居してしまつたため、その一族である海野小太郎は信州から南アルプスを越え駿河国に逃げ延び、この曲金の地に住みついたのは天正一四年から一六年頃であったという。

夫寿作の生家、北原・海野と呼ばれるその家はおよそ一〇〇〇町歩の農地、年貢米にして八〇〇〇俵といわれる曲金近辺一帯の旧家であった。寿作の父九代目がその全盛期に当たると。

寿作は新家と呼ばれる分家の一代目である。分家した寿作の家は中農で、本家に対して新家と呼ばれ、農地二〇町余(約二〇畝)と、村内に宅地二千五百六十坪(約八五〇〇平方尺)とを持つ中地主であった。海野家は、晴れた日には縁側から座つたままで東に富士山が見え、東南に有渡山(日本平・久能山につながる

丘陵)、北には八つ山(谷津山)とよぶ丘陵、やや遠くに龍爪山を望むことができるという恵まれた風景の中にあつた。

隣の八幡村の名家で育つた「はる」は、この海野家という名家に嫁に來たのであつた。

夫・海野寿作はどのような男性

海野家の九代目の次男海野寿作は、一八六〇(万延元)年ころに曲金村真北マキキタに分家し、新家の初代となつている。

夫の寿作は、温厚な人柄で農村地主のひとつのタイプといつてもいい趣味人として一生を過ごし、とくに書道にはかなり打ち込んだようである。また、俳句が好きで「南山」と号し、農村青年の句を添削したりしていた。寿作の文人的才能は祖父の遺伝といわれている。

だが、明治中期の経済変動の中で、小作料と地代だけで四人の子どもを育て、教育するために全く金銭上

の苦勞がなかつたわけではない。屋敷周囲の楠木や松の巨木を切り倒して売つたり、楠木の根株から樟腦を採つたりして収入増を図つていた。

もめごとが嫌いであつた寿作にこんなエピソードがある。

明治三〇年頃、大きな台風が襲い、静岡地方は塩分を含んだ風のために稲の大半がやられた。このため、あちこちの地主のところでは、小作料問題で暴動に近い騒ぎが起こつた。この時、寿作は当時としては最も緩やかな「刈り分け」にするとということ、藁は小作人のものとし、わずかに取れたコメは地主と小作人で半々に分けた。それを当時頻発した小作騒動の煩わしさから逃げようという寿作の消極性の表われとみる向きもある。が、『思想は裁けるか』によると、寿作は「本来人間は平等であり、社会的に恵まれた立場の者は弱者に対する配慮をおこたつてはならない、という人間的な思いに根差していたようだ」とあるように寛大な心の持ち主であつた。

寿作は「一日中何をして時間を過ごしていたのかと判断に苦しむほど、全く何も決まった仕事もせずに一生を終えた人物だ」とか「面倒なことに関与したり、他人ともめごとを起こしたりするのを嫌った」人であるといわれるが、寿作の心底にはこのような思いが流れていたのだ。その寿作の妻はるは、キリスト者でもある寿作の信仰に共感を持っていた。

寿作の洗礼・晋吉とともに

一八七三（明治六）年二月二四日、太政官布告六八号のキリスト教解禁で、御禁制の高札が取り払われると、諸外国から伝道者たちが次々とやって来るようになった。パリミッシヨン会は、パリ大神学校の同級生で二四歳のテストヴィド神父とドルアル・ド・レゼエ神父を日本に派遣した。テストヴィド神父は、最初は横須賀の軍艦建造のために来日したフランス人四〇人のための小教会を司牧したが、その後は主として東海道筋を……八王子を出発し、秦野、小田原を経て足柄

峠を越え、小山、御殿場、そして沼津を通り越し、静岡、名古屋まで徒歩で伝道していた。

海野家は、代々熱心な仏教信仰の家であったが、長男平太郎が東京で受洗したことによりフランス系の神父がよく海野家を訪問していた。

パリミッシヨンのテストヴィド神父が、僻村といえども彼の足跡のない土地はない、と言われる東海道巡回伝道を行ったのは明治一六年に入ってからである。

静岡教会が鷹匠町に駿府の教会を受け継いで再建されたのはその翌年の六月である。夫の寿作は静岡市内の教会に説教を聞きに通っている。

海野一族に伝わる次のような昔語りもある。

「カトリックの神父が一夜の宿を求めて曲金の海野の家を訪れたことがある。彼は静岡に土地を求め教会を建てることを希望していた。寿作夫妻はその伝道姿勢にうたれ、彼もまたその家の居心地が良かったと見え、一カ月ばかり滞在した」

この神父はテストヴィド神父とも言われている。

明治十九年、御殿場に癩病院を建設する際、敷地入手も建設費も、そして経常費も、すべて喜捨に頼っていたテストヴィド神父。大きなトランクを引きずって異国の田舎道を歩く神父に、寿作夫妻は心を打たれていたのであった。

一八九一（明治二四）年二月二四日、寿作は二人の子ども（ふくと晋吉）とともに洗礼を受けた。それはテストヴィド神父が死去した年のクリスマス前日であった。静岡カトリック教会の、黄ばんで触れればほろりと崩れそうな「洗礼台帳」第一冊の終わりに近いページに、達者なラテン文字で記された三人の名が残されている。

ステファヌス ジュサク ウノン

ブリギッタ フク ウノン

イノセント シンキチ ウノン

フクは寿作の次女一二歳、晋吉は七歳とある。

晋吉の代父となったヨハネ荒木福明は、『静岡県宣教史』や『聖アンナ教会百年史』によると、明治二一

年から二三年まで存続した天主教付属学校の教師として藤枝教会から静岡に招かれた伝道師である。

寿作とはる夫婦には、ほかに結婚した長女さやと、上京して明治法律学校に通っている長男平太郎がいる。前述したが平太郎は東京で受洗している。

夫婦や家族で受洗する例があるが、この時はるの名は「受洗台帳」にない。はるは、自分の意志を持った女性であるので、意志を通したのか。それともたまたま、はるは、何か用があつて教会に行くことができなかったのか。数日後受洗したのかもしれないが「受洗台帳」を詳しく見ないと解らない。

寿作が次男の晋吉を、キリスト教に入信させたということは、少年期の人格形成期に倫理観を育てる必要を感じたからかもしれない。

海野寿作と渋江家との接点

森鷗外の史伝『渋江抽斎』（その百九）に、海野寿作が次のように登場している。

脩は渋江塾の設けられた時妻さを娶った。静岡の人福島竹次郎の長女で、県下駿河国安倍郡豊田村曲金の素封家海野寿作の娘分である。脩は三五歳、さだは明治二年八月九日生まれであるから二〇歳であった。

「脩」とは渋江脩で、作品の中心人物渋江抽齋の八男^(注1)である。妻の「福島さだは四八歳まで静岡に住んだ」というところでこの史伝は終わっている。

なぜ、突然『渋江抽齋』に海野家の寿作が出てくるのであろうか。

渋江脩の兄渋江保は、森鷗外が『渋江抽齋』を執筆するときに、資料を提供し渋江家に残る文献や父母の残した書物や自分の日記など、すべて森鷗外に託した本人である。渋江家は代々弘前藩医であり「渋江抽齋」は保と脩の父親である。

海野家が脩に嫁を世話したことの関わりで寿作の名が出てくるのである。脩が結婚したのは、明治二十一年、その二年前は「静岡事件」が起きた年である。

静岡には明治政府に対する潜在的な批判があり、自由民権運動の拠点でもあった。板垣退助の呼び掛けに応えて、富士山の南を意味する「岳南自由党」を結成し、その主義主張を訴える『東海暁鐘新報』を発行するなど活発な動きを見せていた。これらの運動の中心となつたのが、土地の進歩的な中小地主層である。だが、この運動が力を得るにしたがつて政府の弾圧も露骨になってくる。そこで、追い詰められた運動家たちはテロに走った。資金稼ぎと称して、近隣の資産家たちに白刃をかざして押し入り、ついには箱根離宮の落成式に出席する政府高官の爆殺を凶つた廉で捕えられるのである。この事件に『東海暁鐘新報』の発売元である「攪眠社」社主である前島豊太郎と海野寿作の義弟小林喜作が連座している。小林喜作は、寿作の妹登も子の夫であり海野家と「暁鐘新報」は関係がある。

一八八七（明治二〇）年、「攪眠社」は社主の前島豊太郎ら首脳部が収監された後も続いていた。明治

二〇年一月二月には『東海暁鐘新報』は『暁鐘新報』と名を改め、日刊新聞として発展を期すことになる。

そこで主筆として迎えたのは、今まで『東海暁鐘新報』編輯人であった渋江保である。この時、静岡安西一丁目南裏町一五番地に住んでいた渋江保は、藤浪甚助の経営する「私立静岡英学校」の教頭のまま主筆になった。

この時期、『暁鐘新報』の運営面に関わった一人が海野寿作である。海野寿作と渋江家との結びつきには『暁鐘新報』という接点があった。

地方の小新聞社の主筆だけでは経済的に立ちいかないという事情がもちろんあったであろう。渋江保は、一八八六（明治一九）年八月一六日、静岡高等英華学校の開校式に藤浪甚助とともに来賓として出席し、その後二〇年七月一日から依嘱され英語を教えることになった。また二〇年九月一五日には静岡文武館でも英語を教えるはじめている。保は三つの学校を兼任しながら『暁鐘新報』で主筆をしていた。

渋江保は明治一九年一〇月一五日に、旧幕臣静岡県士族佐野常三郎の娘「松」を娶っている。

弟の脩は、山田家に養子に行っていたがその頃渋江家に復籍していた。明治二二年七月に東京から静岡の保の家に来ていて、静岡警察署内巡査講習所で嘱託としてやはり英語教師をしていた。そして明治二二年一月には渋江塾を保と脩は創設した。『静岡市の百年』によると、渋江塾は科目が英学、漢学、数学で、教授者は四名、生徒は九一名であった。

脩の結婚は、渋江塾の設けられた時と、鷗外は書いているので、明治二二年である。

法律上は廃止されたとはいえ、土農工商の身分が人々の意識を縛っているこの時代の縁組である。同じ静岡出身でも、士族の出である保の妻とは違い、平民の家に生まれた脩の妻と、津軽藩江戸屋敷の医師を務めた渋江家との身分上の不釣り合いを整えるために「寿作の娘分」という方便を用いたのであろう。

だとすると、渋江脩に嫁いだ福島竹次郎の長女「福

島さだ」は、村の娘たちに裁縫や行儀作法を教え、その縁談を纏めたりする世話好きなのはの教え子だったのかもしれない。『暁鐘新報』の事務所では、はるは渋江保と世間話をしていて「弟の嫁を……」と依頼されたのかもしれない。

(注1) 『渋江抽斎』の中で脩は兄として登場しているが、渋江保は嘉永四年七月二六日生まれと判明した(『『渋江抽斎』の嗣子〈保〉成善、道陸の生年と名について』松木明知、『鷗外』90号、平成二四年)。兄が保(七男)で、弟は脩(八男)で、ともに渋江抽斎の四番目の妻五百の子である。

はると晋吉と静岡事件

末っ子の幼い晋吉は、幼少のころは手も付けられないような腕白者であったが、はるは晋吉をことのほか可愛がり、何かと話しかけたり彼の小さな手を引いては良く出かけたりしていた。

静岡市両替町の新聞社「暁鐘新報」に行った際、「新

聞社の社員に払う月給のお金が足りないので、うちで工面してとどけるのさ。このお金を届けないと新聞が出せないのだよ」と、理解できるはずのない晋吉に、はるは話しかけた。

お金を工面して届けるのは、確かにはその役目であったが、当主である寿作の意志がなくてはできないことではない。

また、はるは自宅の押し入れの奥深くにしまつてある古い箱を指さして「あの中に小林の喜作さんが持っていた刀が隠してある」と晋吉に話した。

はるの義弟の小林喜作は、静岡事件で仲間が強盗をする際の道案内をしたり、表で見張り役をしたり、襲う家の情報を提供したりしたようである。しかし実際の喜作の容疑は、「自由民権派の連中が強盗をして奪ってきた脇差二本を、その状を知りながら、ひそかにこれを預かり、その後、彼らが次の強盗をなす際に貸し与え、その所為を助した」というもので、室田半二とともに重禁錮一年六カ月・罰金一〇円・監視一〇カ

月の判決を受けている。

はると寿作は晋吉に、親戚の前島豊太郎が「天子を賊徒と称した」という罪で禁獄三年、罰金九〇〇円の刑を受けたということをしばしば話して聞かせていた。前島が「演説会で不敬の言辞を弄した」ことの罰金だ。前島豊太郎は静岡の免許代言人（弁護士）第一号で、前述したが自由民権運動に奔走し『東海暁鐘新報』を発刊し反政府活動をしていた。

幼少の晋吉は、静岡事件の真相は解るはずはなかったが、親族の大人たちの行動をみて自由や正義というものかどういものかを、幼心に体得していたのではないだろうか――。

当時、静岡事件の被告とその家族に対する世間の目は冷たく、被告の多くは出獄後も家郷を捨てていずかか去って行った者も多かった。ある被告の家では、家にある諸資料を消却してしまったという。強盗犯の子や孫ということで、周囲から白い目で見られることに耐えられなかったからである。寿作の家の押入れの

奥には、義弟小林喜作から預かった静岡事件の証拠品とみられる「刀」を捨てもせず、隠しておいたことから推しても、夫寿作には義弟に対する義理だけではなく、自由民権思想への共感があったことも考えられる。

四人の子ども

長男平太郎は新しいものが好きである。明治法律学校（明治大学の前身）を卒業しているが、東京の学生生活中に東京大学を出たある工学士と懇意になり、これからは電機の時代だということを吹き込まれた。その説に共鳴した平太郎は、電気学を勉強したのち明治三八年に静岡市紺屋町に「岳南電気商会」という名の電灯工事請負業を始め手広く拡げた。

無口な父寿作に代わって平太郎は、一三歳年の離れた弟晋吉の親代わりをするという面もあった。兄弟は互いに助け合っていた。名古屋時代に兄が親しくなった女性を亡くなるまで経済的に面倒をみていたのは弟晋吉であった。



後列、東大時代の二男晋吉。前列、左から長男平太郎の妻わか、孫海野稔、二女ふく

平太郎は、東京の明治法律学校在学中にキリスト教に興味を持ち洗礼を受けた。彼が静岡の曲金の自宅に帰った時にも、フランス系の神父がよく海野家を訪問していた。

寿作とはるには二人の娘もいた。長女の「さや」と次女の「ふく」。この時代、名家の娘二人に、寿作とはるはどのような教育をしたのか記述はない。

長女のさやは静岡市の川村家に嫁がせた。富裕な商家の川村家は静岡の特産である下駄の間屋をしていた。次女のふくは島田市の桜井巖に嫁がせた。桜井家は島田の御三家といわれた旧家の一つであった。

末っ子の晋吉については前述したが、反戦思想で平和主義の晋吉は、在野の社会主義を自認し、政府から与えられる名誉めいたものは一切拒否する人であった。戦後、検事総長への就任を要請されたが断っている。「自分はこれまで人を助ける勉強はしてきたが、人を縛る勉強はしてこなかった」と。素朴な自由主義者であった晋吉は、国家が人を縛ることを何より嫌った。根底にあったのは、生まれながらの反骨精神と温かなヒューマニズムだった。

「はる」はどんな女性？

はるは才気煥発ともいうべき女性であった。頭が切れ気性のしっかりした女性で、とくに弁舌がすぐれていたもので、当時曲金村一帯では「女弁護士・女代言人」

のあだ名でとおっていた。さらに、ものにこだわらぬ闊達な気性であった。当時は地主・小作人の階級差が厳しく、日ごろは用があつて小作人が地主の家に来て、座敷にあげず縁側に腰掛けさせて対応したという時代であつたにもかかわらず、はるは小作人の娘を家に呼んで、裁縫や行儀作法を教え、嫁ぎ先の世話をしたりして喜ぶところがあつた。

また夫の寿作が面倒ごとに関与するのが嫌いで、小作人が何か相談をかけても、横をむいて口をきかないというようなことがよくあつたが、こんな場合、相手になつてやるのははるで、海野家は「はる」でもつていたという面もあつた。

小作とのトラブルが起こつた時や親戚の債務の保証人となつたために土地や書画骨董の類を手放さなければならなくなつた時、はるは横浜から来た骨董屋がその軸を抱えて門から出てゆく後姿を寿作とともに見送つた。それを見ていた晋吉は、奥の座敷に駆け込んで泣いたというエピソードがある。この時「これから

は法律を知らなければダメだ」と嘆きながらも、その事後処理に立ち向かうのは女弁護士・女代言人と異名をとつた勝ち気で世話好きなはるの役目であつた。はるの言葉と嘆きは晋吉の心に深く残つていて、いつまでも忘れられないと彼は後年家族に語っている。

暴れん坊であつた晋吉は中学に通う頃から変わつてきた。彼は剣道を習うようになり、一里位離れた道場に通つた。はるは、身を切るような極寒の朝、女中も家人も眠っている頃、温かいご飯を炊き弁当を作つて毎朝／＼寒稽古に行く晋吉を励まし送り出していた。はるは、どこにもいる優しい母でもあつた。

晋吉の結婚

一九一〇（明治四三）年頃、晋吉は大学での孤独や健康上の不安を癒してくれる一人の女性（後述するが晋吉にとつての『火の柱』の芸者花吉）と巡り合う。

夜会巻きの髪型が似合う面長の女性、早坂アサノとめぐり合った。彼女は生家の事情から花柳界のひと隅に

仲居として身を置く女性であった。アサノの存在が故郷静岡の人々に知れたのは、ある時期から突然晋吉の送金依頼が目立って増えたことであった。不審に思った兄の平太郎が上京のついでに弟の下宿を訪ねた時、晋吉の洗濯物のかげに遠慮がちに干されている女もの手ぬぐいに気づいたのであった。明治のこの頃は、男女の關係がおおらかであった。美男子で、自身粹なところのある平太郎の感覚ではよくあることであった。

大学生とはいえ晋吉は二六、七歳になつていた。美男子で粹な平太郎は、何よりも目のあたりに見たアサノの献身振りとその人柄のよさに見てみぬふりをした。その後も、頻繁な弟からの依頼に平太郎は送金を続けた。晋吉の健康状態はこの頃から快方に向かつていった。

はるの思い

—— 県下のしかるべき家柄の嫁を！

晋吉がアサノとの關係を、正式な結婚に發展させようとしていたことを知ると、母はるは、強硬に反対をした。はるのみが反対をしたというよりも、海野の家が反対したのである。もちろん、夫の寿作も。

晋吉は、なぜか病気がちであった。東京帝国大学法科大学独法科に一九〇八（明治四一）年九月に入学したものの入学と同時に休学届を提出した。それは、明治三九年にバセドー氏病を発病し、以後、終始バセドー氏病に苦しみ、たびたび静岡の実家に戻って治療や静養をしていたからである。結局、卒業まで六年かかった。晋吉は卒業間近な頃からアサノと知り合い、健康に明るい兆しが見えてきた。そこで徴兵検査を真っ先に受けた。明治二三年施行の明治憲法によって、国民皆兵の原則が確立され、満二〇歳に達した青年はその

検査を受ける義務が生じた。二七歳の晋吉がこれまで検査を逃れられたのは、就学中の学生に対する徴兵延期の特典のお蔭であった。まだ身体が全快していない時の徴兵検査であったので結果は、晋吉にとっては何れも「T種不合格」となった。T種とは軽度の心身障害者に対するランクである。甲種合格が日本男児に国家が与える（一級品）のお墨付きであった当時、T種は落伍者の烙印を押されたに等しい屈辱とされた。

しかし、兵役免除で晋吉が生きることに希望を持ったことに、母親としてはるも胸をなでおろした。

一九一四（大正三）年七月、晋吉はやつと卒業できることになった。はるは、晋吉の卒業をひかえて県下のしかるべき家柄の中から晋吉の配偶者を！と期待していた。長男平太郎は、興津町山梨家より才媛と評判だった「わか」を迎えている。夫寿作の本家の甥は英和女学校を一期生として卒業した「遊佐」を嫁にした。

東京帝国大学を卒業して弁護士としてこれから活躍

する晋吉には、望むままの良縁が得られるはずである。だが、はるの目から見れば、早坂アサノは、どこかの馬の骨とも知れない、しかも花柳界に身を置いた女性であった。二人の仲を裂くのに海野家は一計を案じた。アサノに対して子供を産んではいけない、もし産んでも子供は海野家に入籍させないというものであった。

晋吉の女性観

晋吉は母や海野家の人々の意見を聞いたのであろうか。

晋吉の女性観は思春期に出会った本や職場の上司などによつて固められていた。晋吉は帝大法科を出たので無試験で弁護士になれた。こういう時代であった。

大審院判事や刑事訴訟法学者として有名な大場茂馬が、一九一四（大正三）年八月、東京有楽町に「大場茂馬法律事務所」を開設した。晋吉は、在学中、アサノとの交際が始まっていたころから大場判事を知って

おり、また尊敬していたこともあり、願ってそこに勤めることになった。何といつても大場茂馬は、名古屋裁判所の判事であったとき、「娼婦の契約は、民法第九〇条の、善良の風俗に反する契約であるから無効」という判決をして法曹界に大センセーションを巻き起こし、普通の裁判官とは違った見識をもっていた裁判官であった。

晋吉は、読売新聞に連載されていた川上肇の「社会主義評論」を耽読し、かつ『肉弾』を読んで戦争否定論者としての自己を確立していた。なおこの頃、木下尚江の『火の柱』にも大きな影響を受けていた。『火の柱』を読んで弁護士という職業につくことを決めた。当時木下尚江の『火の柱』や『良人の自白』は世評の高い文学作品だと言われ世間を賑わしていた。木下尚江は『火の柱』を執筆する前には、『足尾鉍毒問題』や『娼婦之急務』を次々と発表した作家である。

生涯を決めた本

作者木下尚江は、キリスト教の宣教師でもあり、弁護士でもあり、新聞の主筆もしていた。キリスト者の立場として表現する作家であった。木下は二五歳で信州松本大名町に法律事務所を開設し、二八歳で上諏訪にも出張所を開設する。その上諏訪で諏訪湖畔の藝妓で、後に尼になった「時子」を知る。その後、名古屋の士族の出という「浅野くわ」と知り合い上諏訪出張所に住ませたが、くわとのことは、母親が反対し、結局結婚は許されず彼女は身を引く。

『火の柱』は、木下が日露戦争に向かってなだれ込んでいく世論の歯止めとなることを願って、一九〇四(明治三七)年一月から毎日新聞に連載した小説で、キリスト教の牧師が、平和と自由のために権力や世俗とたたかい、危険人物視されながらも恋と民衆の支持を得る。最後には入獄するが、少数の民衆は彼を火の柱としてその精神と運動を守り続けるという内容である。

主人公は、反戦論者でキリスト教主義者である牧師の篠田長二と彼を慕う二人の女性、政商の父が無理強いる結婚に抵抗する娘山本梅子と、篠田長二に支えられて自由廃業に踏み切る芸者花吉。時の首相伊藤博文まで実名で登場させ、彼を取り巻く政商や軍閥の腐敗墮落ぶりから娼妓の自由廃業まで、当時の社会問題を歯切れよく織り込んでいる。連載中から評判を呼んだ作品である。尚江はこの小説を書くにあたり、「日本民族をリードするモーゼのような人物を書きたい」との願いをもって書き始めた。タイトルの『火の柱』は、旧約聖書の一節「昼は雲の柱、夜は火の柱」となつてエジプトの圧政下から脱出し、民衆を率いて荒野を行くモーゼを導く神の証である。この連載半ばの二月一〇日、日本はロシアと開戦する。

晋吉は、主人公と重ねた木下尚江の思想と、彼の女性観にかなり刺激された。

晋吉は、木下が恋愛を諸関係の中でいかに位置づ

け、いかに重要視していたかを知り共鳴したのである。

木下は、恋愛と無関係に宗教・道徳・社会の変革・世界の平和などを論ずるのは、「竜を描きてその睛を点せざるの類」に等しいものとして位置づけ、「恋愛の自由」「恋愛の神聖」こそが社会変革への原点だということをきっちり書いている。しかし木下自身は、社会の変革とは矛盾するが、母親に反対されたため、簡単に「浅野くわ」と別れている。

この時代、アサノのような立場にあつた女性を日陰の女として囲い、何食わぬ顔で然るべき家から妻を迎える例は、珍しいことではない。むしろ、スマートな身の処し方というものであつた。同棲していた女性を、身分違いを理由に捨てたところで、スキヤンダルになるわけでもなく、出世の妨げになるわけでもなかった。

晋吉の一〇代後半の頃は、民法典論争の渦中であつた。少壮司法官僚の草案の理念や、民権思想家の理想、たとえば、日本の民間の慣習そのままでも、フランス

の男尊女卑の法典のままでもよくない、これからの民法は新思想のものを制定すべきだ……と、徹底した民主的な民法を志向した植木枝盛の思想（『国民の友』一八八九年九月）なども晋吉に影響を与えたのではないだろうか。

はるや海野家に何と言われようと、晋吉はアサノと添い遂げたのであった。

早坂アサノのこと

アサノは、花柳界の一隅に仲居として身を置いた女性であった。

しかしアサノは、晋吉の職場の上司、大場茂馬夫妻の眼鏡には叶っていた。芸者の自由廃業を援護した大場は、身分上の偏見にとらわれることなく、彼女の美質を見抜いていた。晋吉への思いの深さも知り愛弟子の伴侶と知って認めていた。

晋吉は籍こそ入っていないがアサノと所帯を持った。彼は入籍にこだわるよりも日々弁護士としての実

務を学ぶことが第一であり面白かった。アサノもそんな晋吉と生活を共にし、尽くせることを幸せと感じていた。その暮らしを大切にしていた。はた目には命を懸けていると見えた。

一九一五（大正四）年四月には、大場夫人が晋吉とアサノの結婚の許しを得るために、東京からわざわざ曲金村まで足を運んでいる。その裏には末期の胃癌で死期を悟ったはるが、晋吉とアサノの結婚を認める条件の証人として夫人の来静を願ったのかもしれない。

はるは安堵し、辞去した大場夫人の乗った人力車が静岡駅に着くかつかない頃息を引き取った。

二人の結婚は、はるの喪のため一年延期された。はるの喪が明けた翌大正五年には、寿作が世を去った。入籍はその年も行われずに過ぎ、結局、晋吉がアサノとの結婚届けを出したのは、大正八年、晋吉三十四歳、アサノ三〇歳の時であった。そしてアサノは実子はなく、恩義あるゆかりの人の子ども「雅也」を養子にした。しかし「雅也」は三歳で亡くなった。その後

晋吉は兄平太郎の次男秋津を養子にしている。

晋吉は明治期に育つた人間で、ことに行儀作法を若い娘に教えていたのはるの息子であつた。行儀作法や言葉使いに極度にやかましく、家族の者にはそれこそ「箸の上げ下ろしにまで」小言を言いづくめであつた。外では人権尊重を説きながら自分の事務所の弁護士や事務員には人使いの荒さを見せる。そしてぜいたく屋であり浪費家であり、家族の者を質屋に通わせるのに、自分の出身校やその出身者には、無茶苦茶なお金の使い方をしていた。

しかし、アサノの内助の功は見逃せない。

晋吉は美食家なので、酒を飲まないだけに食事にはやかましかった。アサノの作る料理は別格で、晋吉の好みを知り尽くした専属の料理人だつた。基本はおふくろの味であるがそれに工夫を凝らして素人ばなれのした見栄えのする料理を作つた。日本料理と違つて量がたっぷりある。晋吉の法律事務所働いている若い人達はお腹がすくからというやさしさでもあり、どん

なに家計が逼迫したときでも食材を惜しむことはしない。また、住み込みで晋吉の事務所働いている少年たちの悩みの聞き手でもあつた。

アサノは趣味一つ持たず、生活のすべてを晋吉の第二事務所である家庭の経営に注いでいた。

一九六七（昭和四二）年、晋吉と同じ病院に入院しているアサノのもとに、姪のシスター常世が見舞いに来た。世間話をいろいろするうちにキリスト教のことになつた。アサノは言つた。

「私は何も分らないけれど、おじいちゃん（晋吉）

が行くところに私も行きたいよ」その一言でシスターは、すぐにアサノに洗礼を授けるための手配をとつた。麹町教会にアサノが信者になつた旨の届けは出された。しかし、アサノは、カトリックの信者になつたことも、「マリア」の洗礼名を授けられたことも自覚しないまま、睡眠中に脳内出血を起こし、ひっそりと世を去つた。七七歳であつた。その時、晋吉の病状も悪化していて糟糠の妻の通夜にも列席できなかった。

アサノの一年後に晋吉も亡くなっている。妻を見送つてから一年後に自分も逝くというところは、はると寿作と同じである。

葬儀の後、晋吉とアサノの嫁は嘆いている。

「姑のアサノには形見分けをするようなものはない」と。

唯一アサノが大切にしていたアメジストの指輪を、銀座の寶石店で鑑定してもらうとガラス玉であった。

嫁いで以来胸底に沈めていた姑の出自に由来する抜きがたい思いがあつたという嫁の滋子。

「アメジストとガラス玉の区別もつかないような人にな、長年使えてきたかと思うと悔しい」

だが、ガラス玉であろうが何であろうが大切なものは大切にするというアサノの眞価。それは嫁の価値観には通じなかつたのであろう。

はるとアサノの墓

海野寿作の本家は二〇一二（平成二五）年現在も一五代続いている。その本家、海野厚の家の墓が西豊田小学校の隣にある。周りの墓地よりひときわ広く大きな墓地である。富士山の形をした石に海野厚の歌が彫られた石碑もある。そこを少し離れた法蔵寺の本堂前の通り沿いには五角形の立て看板も設置されている海野家の新家の墓がある。

「私はカトリックとして届けられているが、どうも信者にはなれなかつた。無宗教でいい」との晋吉の言葉もある。現在葵区鷹匠町にお住いの伴野薫さんは語る。「私も長男と行つたのですが青山斎場での無宗教の告別式は大変な行列でした」

昭和四三年七月一四日、告別式が行われた東京の青山斎場の外には三〇を超える組合旗が林立し、その間を縫って、式場からあふれた三〇〇〇人を超える人々の長い列が続いた。思想の改革を問わず、地位の

高低を問わず、それぞれが一本の白いカーネーションを手に献花台に向かう静肅な列であった。

無宗教で大きな葬式であった晋吉の墓は、洋風ではなく、静岡の法蔵寺に相応しい古風な墓石が設置され、墓地は正方形に造られている。

新家一家の初代寿作・二代平太郎および海野晋吉の眠る墓地。墓石には海野寿作とはる(春)の名もある。はるの横には、平太郎とわかの名も刻まれている。寿作、平太郎、晋吉、アサノ等はキリスト教の信者であったが戒名がつけられていた。

元総理の片山哲の題字で彫られた小さな顕彰碑は、左手にある。その顕彰碑の後ろにある碑に晋吉の戒名があった。晋吉の戒名の横には女性の戒名が彫られていて、カタカナで「アサノ」とあった。

あれだけ「はる」は、アサノを嫌っていたのに、寿作と晋吉とはるとアサノは同じ墓所で眠っていた。しかし、墓を建立したのは後世の人、はるの意志はない。

はると寿作、息子夫婦、孫、そして一応は外孫にな

る、血は繋がっていないが晋吉とアサノの実子ではない子、雅也も同所で眠っている。雅也は寿作とはる達の墓石に名があった。雅也が晋吉とアサノの墓石に刻まれていないというところも微妙である。

はるの「モノセンス

夫の寿作は一八四七(弘化三)年生まれである。『北原・海野家の歴史』によると「寿作は一八六〇(万延元)年ころに曲金村真北に分家し、新家の初代」になったということなので、逆算すると一三歳の時に分家したということになる。明治時代の一三歳。元服して分家したのかもしれない。寿作は一三歳で新家を持ち農地二〇町歩、村内に宅地二千五、六百坪を持たされた? 否頂いた! のだ。本家から託された番頭さんか使用人が手伝い取り仕切っていたのではないだろうか。『思想は裁けるか』に、晋吉が「爺や」のことを書いた一文がある。寿作が教会に説教を聞きに行くとき、晋吉も連れて行ったのであろう。晋吉は「遠い記憶の中に、

爺やに背負われていった教会は蝋燭の灯がたくさん揺れていた光景が残っている」との記載がある。爺や、というからには、寿作より少し年上で明らかに寿作を手助けしてきた人物なのではと推測できる。

寿作の家には、晋吉が「爺や」と呼ぶような人がいたからこそ、寿作は自分が先頭に立って動かなくとも良かったので「温厚」な「趣味人」で生きてこられたのだ。

そんな寿作に、はるが嫁ぎ、子育てをしながら新家の海野家を切り盛りしていった。キリストの精神で生きていて、本来人間は平等であるという思想を底流に持つ夫寿作は、社会にも目を向け自由民権思想への共感もある男性だ。そんな心の広い夫を信じて、はるは、本来自分の持っている力を出し切り生きることができたのではないだろうか。

ものに拘らぬ闊達な気性であったので、寿作をバックボーンにして、小作人の娘たちを家によび、裁縫や行儀作法を教え、嫁に世話したりして喜んでいた。小

作人の娘たちの幸せを願い、自立を助けることをした。そのなかで殊に器量も氣立てもよかつたであろう小作人、福島竹次郎の二〇歳の娘さだを、寿作と相談の上「寿作の娘分」として、渋江脩に嫁がせたのではないだろうか。花嫁道具もたっぷり持たせて……。

しかし息子の結婚に関しては、自分のエゴがでた。帝国大学を卒業した息子には、県下のしかるべき家柄の中から配偶者を、というはるの夢もあった。この時代、結婚は家と家の取決であった。封建的家族制度がまかりとおっていた頃である。はるにとっては、世間の通念どおり釣り合った結婚、家と家が同格の縁組で結婚させることが最大の課題であったのだ。しかし、素朴な自由主義者であった晋吉は、近代社会における自由な個人として自らの結婚を選んだ男性であった。

はるは、明治期に時代の先取りをするように若い女性の自立を助ける女性であったが、息子の縁談になるとエゴになった。これは現代にも通じることで、普遍的な、子を持つ母親の感覚である。立派な息子を育て

たはるの、そんな少し矛盾したコモンセンスが人間らしい。

はるの息子海野晋吉は、今を生きる私たちにこんなメッセージを送っている。

「半世紀もたてば、おそらく憲法改正問題が起こるだろう。しかし、それはあくまでも戦争放棄、永久平和の原則は世界に誇るに足るものだという自覚のもとに、現在の歪みを含む部分、或いは曲解を導くような文言をより正確なものに訂正し、より完璧な平和の憲法にするための改正でなくてはならない。そしてこのことを実現しうる社会をつくりあげて行くという方向に向かつて日々努力していくこと、それを一人一人に期待している」と。

《協力者》（敬称略）

* 伴野薫 * 砂川事件の元被告であり、現在は「伊達判決を生かす会」の代表で、特定秘密保護法案に警鐘をならす土屋源太郎

《参考資料》

『静岡新聞』二〇〇八年七月五日

二〇一三年一月六日

『新婦人新聞』第三〇一二号 二〇一三年一月二日

《参考文献》

『北原・海野家の歴史』編集者・海野春樹 海野厚作

品刊行会 昭和六三

『弁護士海野晋吉の足跡』法・平和・人権 海野晋吉

没後四〇年記念集会実行委員会 二〇〇八

『弁護士海野晋吉』刊行委員会 昭和四七

『静岡県近代史研究 第三三三号』静岡県近代史研究会

二〇〇八

『人権擁護六十年』松岡英夫 弁護士海野晋吉

中公新書 昭和五〇

『思想は裁けるか 弁護士・海野晋吉伝』入江曜子

筑摩選書 二〇一一

『森鷗外全集 第二六卷』岩波書店 一九七三

『渋江抽斎』森鷗外 岩波文庫 二〇一二

『家族法』大村敦志 有斐閣法律学叢書 一九九九

『自由民権運動と静岡事件』原口清著作集五 原口清

岩田書院 二〇〇九

『本邦に於ケル刈分け小作』農林省農務局

『静岡県の百年』原口清・海野福寿 山川出版社

一九八二

『静岡市の百年』明治編 山内政三 静岡市百周年記

念出版会 昭和六一

『火の柱』木下尚江 岩波文庫 一九五四

『明治期における木下尚江と日本基督教婦人矯風会』

『総合女性史研究』第29号 鄭玟汀 二〇一二

『木下尚江集』日本近代文学大系 角川書店 昭和

四八

『木下尚江研究』青木信雄 双分社出版 一九九一

『静岡県宣教史』ボーデュ神父・後藤平訳 創造社

一九六五

『聖アンナ教会百年史』聖アンナ・カトリック藤枝教

会 一九七八

『静岡県現代人物史』村本喜代作 山雨楼叢書刊行会

昭和三一

『肉弾』桜井忠温 現代文国書刊行会 平成二二

『徳川慶喜 静岡の三〇年』前林孝一郎 静岡新聞社

一九八二

『曲金の郷』加藤三男 静岡新聞社 平成二五

『道遠くとも 弁護士相磯まつ江』川口和正編著

コモンズ 二〇〇八

『見る読む静岡歴史年表』宮本勉 栗山重司 竹花弘

夫編 羽衣出版 平成八

海野厚とその母遊佐——「背くらべ」の歌によせて

大塚 佐枝美

はじめに

五月になると「粽食べ食べ兄さんが測つてくれた背のたけ」の童謡を思わず口ずさみたくなる。小学校の音楽教科書に採用され、全国に知られた「背くらべ」

の歌の作者海野厚が静岡生まれであることは、昭和三〇年代の終わり頃までは一般的には知られていなかった。

そこで海野厚の経歴や人となりを知る手がかりとして、厚の母「遊佐」について考えてみたい。遊佐は当時の欧化政策の元で、キリスト教主義の学校に学んだため、早くから実践的な英語力を身につけ進取の気性

を持つ女性であった。それがその後の人生にどのような生かされ、厚やその他の子どもたちにとどんな影響を与えたのだろうか。また、遊佐に対して、その父天野廉の果たした役割についても考えてみたい。

遊佐の父天野廉

遊佐は、一八七六（明治九）年一月、島田市本通七丁目の豪農天野廉、えみの二男二女の長女として生まれた¹（系図では由佐とあるが晩年には遊佐と書いている）。維新前の島田宿は「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と謡われたように、東海道の難所と言われた。雨が降ると「川留め」になり、旅人

で賑わったという土地柄である、芭蕉が五日間川留めにあつて俳句を読んでいるなど、人と物流、情報の行き交う場所であつた。遊佐の生家は旧東海道の二三番めの一里塚に近いところにある。

父親の天野廉は、駿河国志太郡島田宿四丁目の地主森家に一八五六（安政三）年に生まれ、幼名を廉次郎といい、天野家えみの婿養子である。山本拝石、曾我大権の門で漢籍を、向山黄村の静岡藩学で経書を学び、一八七四（明治七）年八月第一六番中学区第三四番小学校林幽舎幹事試補となり、一八七六（明治九）年三月聖川舎訓導、一八七七年三月島田学校三等訓導になる。⁽³⁾（徳川慶喜の筆になる校名「島田学校」は碑面に刻されて現存する⁽³⁾）

一八八三（明治一六）年静岡県会議員、翌年島田宿町会議員、一八八六（明治一九）年再び県会議員、同年一〇月には島田宿戸長に任ぜられ、年俸二一六円を給与される。一八八八（明治二一）年三月には島田町長となり、一八九〇（明治二三）年から始まつた第一

回衆議院議員総選挙、第二回、第四回にも立候補するが、いずれも次点となつている。また、島田軌道⁽⁴⁾、堰東製材を経営し、島田木材組合初代組合会長となり、西駿銀行頭取も務める。「詩文を愉しみ緑天と称する。温良大にして長者の風あり、嚴霜烈日の如く実に侵すべからざるの風采あり」と『嶽陽名士伝』⁽²⁾にある。

天野廉の学んだ静岡藩学は⁽⁶⁾⁽⁷⁾

静岡の地は、維新に際し、徳川慶喜の移り住んだ土地であるため、幕末まで幕府の官学であつた藩書調所の後身の開成所や昌平坂学問所、横浜にあつたフランズ伝習所の、教授や習業者が大挙して静岡に移住している。政府に対して恭順の意を表し、慶喜につき従つて無縁移住した旧士族たちにとつて、子弟の教育は最優先の課題であつた。明治初年に府中学問所が駿府城四つ足御門内の元御定番屋内に開設された。一八六九年六月に向山黄村の意見により「静岡学問所」と改称。小学校も付設。一般庶民も受け入れて総生徒数は二千

名を超えていたとされる。教授陣も当時の最高学府の学者たちや海外留学経験者で構成されていたために、非常に先進的な、注目に値する教育が行われていた。静岡にはその影響を受けた人材、その子孫が今も大勢生存している。

当時の女子教育

明治五年の学制では、「自今以後、一般ノ人民、華土族農工商及ビ婦女子、必ズ邑ニ不學ノ戸ナク家ニ不學ノ人ナカラシメン事ヲ期ス」^⑧。幼童の子弟は男女の別なく、「……」とされたが、明治一〇年代になっても、小学校に就学する女子は男子に比べて非常に少なかった。女子は家庭にあつて温和、従順で、料理や裁縫ができればいいとされ、学校教育はおろそかにされたため女子の就学率は低く、一五割程度から二〇割で推移していた。^⑧一八八六（明治一九）年四月「小学校令」が公布され、小学校は尋常科四カ年を義務制とし、その上に高等科四カ年が設置された。

静岡県内では女子高等教育機関としては一八八七年七月 静岡師範学校に女子部が併設されていたが、一八九三年に廃止された。^⑨

静岡女学校開校

明治新政府の開国政策に伴って、カナダ・メソジストが日本伝道を始めたのは一八七一（明治四）年である。^⑩一八七三（明治六）年、カナダ・メソジスト教会伝道会社は、二人の宣教師ジョージ・カックランとデビッドソン・マグドナルドを日本に派遣した。幕臣の家に生まれた平岩愼保は、カックランから洗礼を受け、当時の欧化主義の波の中で、英学の必要と重なって、平岩愼保はキリスト教の宣教を始めた。^⑪

平岩の妻銀子は一八八六（明治一九）に亡くなったが、「妻はこの地に女学校を設立したいと希望して居った。然るに……不幸にして妻はこの希望を懐いたのみで空しく永眠したのであった」^⑫

女学校設立は、「妻の志を成しとげて之が記念とも



ミス・カニングハム、日本人教師と寄宿生たち

なるように」という平岩の夢の実現でもあった。

一八八四（明治一七）年にカナダ・メソジストの手によって設立された東京麻布の東洋英和女学院が成功していることに力を得て、平岩はその創立に参画し、持ち前の熱意と弁舌で女子教育の必要を訴えた。⁽¹⁾

特に県知事

関口隆吉とい

う有力者の後

援があつたこ

とが学校の格

式を示すもの

として受け取

られ、県内の

上層階級をひ

きつけること

になった。

一八八七

（明治二〇）

年十一月、静岡女学校が創立された。英語をはじめ様々

な洋風教育の必要からカナダ・ハリファックスからミ

ス・カニングハムを初代校長として迎え、「県知事は

じめ市の有力者が大勢集まつてこの地に女学校を建て

……県下から知名人の御嬢さんたちが入学し……」（英

和五〇年史）とある。創立期の学資は一カ月一円寄宿

生は二円七五銭であり、当時の一般の生活水準からみ

るとかなり高額である。

遊佐の父親天野廉は一八七七（明治一〇）年に創立

したばかりの島田小学校の訓三等、今でいう校長をし

た後、一八八三（明治一六）年から県会議員をしてい

た関係で、いち早く情報を得て、新しい女学校に娘を

と考えたのであろう。ただ遊佐がどこの小学校に学ん

だかは不明である。

静岡女学校入学

遊佐の女学校入学のきっかけは、一八八七（明治

二〇）年の暮れのこと、父親から「静岡へ西洋人の学

校ができた。ひとつ行ってみる気はないか、これからの女性はもう少し、勉強しなくてはいいかん。お前が行きたかったら、お父さんが送って行ってやろう」と言われた。⁽¹⁰⁾

遊佐は、一八八七（明治二〇）年一月に開校したばかりの「私立静岡女学校」に、翌年一月末、同じ島田の親類でもある秋野種と共に入学した。⁽¹²⁾この時遊佐は一二歳、種（後に馬場惣左衛門に嫁す）は三つ上であった。入学資格は年齢一〇歳以上で尋常小学校卒業以上の学力のあるものとされた。

「私の小さい胸は、ただもう嬉しきで一杯でした。島田宿からたつた七里の東海道を一日がかりで人力車にゆられて静岡までまいりました。初めて見る西洋の婦人カニンガム校長はどんなに恐ろしいお方かと思いきや二つ、三つの小児さえ懐くという、先生というよりは慈母として慕いつつ学ぶことができた」⁽¹⁰⁾
 「学校とは言え誠に古びた日本造りの、しかも薄暗い陰気な家」で、一、二、三学年を通して三三名の生徒が

学んだ。級は三つに分かれ、授業は三時間の日本学、二時間の英語、水曜日の午後は編み物または、外出、運動等があった。西洋人から英語を学べるという驚異に次いで大きな特色は音楽の教育であった。開校数ヵ月後には知事の関口隆吉氏から送られた小型オルガンに驚喜した。当時音楽は課外授業で学習に教授料三〇銭が徴せられ、カニングハムはそれをピアノ購入資金に積み立てることとした。⁽¹⁰⁾

遊佐は英語が得意だった。新しく迎えた二代目の校長ミス・モルガンは、発音に厳しく、遊佐は一層発音に注意するようになった。⁽¹⁰⁾

「先生のお好きだったテニスやワーズワースの詩を繰り返して教えていただいた」

二一年、新校舎の落成式には英語暗唱を行っていた。一八八八（明治二一）年に完成した校舎には二階に寄宿舎が置かれていた。落成式の後、祖父にせがんで寄宿舎にはいった。寄宿舎では二、三人の生徒が

外人教師とともに寝起きをした。それだけ、外人教師と接する機会が多く、ネイティブの英語を学ぶことに繋がった。

寄宿舎においては、西洋的な発想による規則や習慣が行われ、お揃いの洋装を着る寄宿生も出てきて、健康のために毎週一度の散歩が行われた。

「ミス・カニングハムとご一緒に、ある時はお堀の一周、またある時は浅間山、臨濟寺辺の田舎道へ散策に出かけました。行き交う人々が先生を珍しそうに眺めたり『ヤア、西洋人が来た』と後からぞろぞろついてくる村の子どもたちもありました」⁽¹⁰⁾

「一室に四、五人ずつ分けられた生徒たちは自然に同室の者同士親しくなり、真の姉妹も及ばぬほど親身に思いやり、慰め助け合って円満に楽しく勉強も遊びも共にしました」。「室長の野口さんは全く三人のいいお母様でした。着物は縫って下さる、髪も結って下さる、何から何まで親切な方でした。でも時々は怖いお母様でした。ビシビシ叱られては謝りました」⁽¹¹⁾

寄宿生にとつて、何よりの楽しみは帰郷であった。

「いよいよお休みになりますと、三々五々、先ず七間町、呉服町へ出かけ、勸工場、扇屋、桃林堂で思い思いに故郷へのお土産を買い求め、帰郷の朝は星明りに起きて支度を整え、一四、五台の人力車を連ねて東海道を走らせました。橋を渡り、山を越え、峠の茶屋で休み、合の宿で車を交換したり、人家の無いところでは車の上で合唱したりした昔のことが懐かしく思い出されます」⁽¹²⁾と記している。また、三代校長ミス・ロバートソンは、人格教育に心を砕き、遊佐に大きな影響を与えた。

「ミス・ロバートソンは実に厳格な熱心な先生でした。先生は厳しいお顔をして居られ、よく生徒をお叱りになられましたので、皆から怖い先生と呼ばれていらつしやいました。『ミス・ロバートソンのお話があるから教室に集まってください』と言われますと、『ああ、何を叱られるでしょう』と、お互いに顔を見合わせたものでした。しかし先生はその反面に涙ぐましい

愛と、深い同情をお持ちで、つまらぬ事に失望したり、罪を犯したり、いろいろ過失の多い私どもを親身に慰めてくださいました。澄み渡った青空のように何時も明るい、正しいお心の先生は少しの不正もお許しく、真心から鞭ってくださいました。『Be brave, be honest, and be kind』(勇敢であれ、正直であれ、親切であれ)先生が始終繰り返し教えてくださったこのお言葉は昨日のように私の耳元に響きます^⑩」

一八八八(明治二一)年に入学した者五一名とあるが、二、三カ月で中退する者も多く、その業を終えた者は少ない^⑪。二、三、年ごろより欧化主義への反動として国家主義思想が台頭し、キリスト教主義の学校は苦難の時代となった。静岡女学校も入学者の減少に苦しむことになり、そのため入学者二〇人前後で推移した。江原素六の娘なつは途中で三井財閥の福井菊三郎との結婚のために学校を引いたが、遊佐とは卒業後も交流は続いた。一八九三(明治二六)年の第一回の卒業生は四名だった。同期の卒業生に、安達みつ、丸尾



第1回4人の卒業生
前列右が遊佐(1893年3月)

いね、葉山ひさ、が記されている^⑫。その式において遊佐はスピーチをし、オルガン独奏を行っている。安達は遠州周智郡安達氏の出であり、清水トンネルの設計者佐分利一嗣に嫁いだ。丸尾いねは県会議長もしたところのある丸尾文六の孫娘で、浜名湖在の水野家に嫁入り、その子の水野茂夫はサンケイ新聞社社長に就任した。

ミス・ロバートソンからは卒業後カナダへの遊学を勧められた^⑬。遊佐にはその気があったが、父親が「女



ミス・ロバートソンと遊佐
(1894年7月)

にはそれ以上の教育は必要ない」と断ったという。既にその頃海野伊三郎との間に縁談が進んでいたと思われる。

遊佐の結婚

遊佐が嫁いだ海野伊三郎は安倍郡豊田村の北原海野家の一代当主で、一八七二(明治五)年生まれ。この家は土地を千町歩所有する豊田村一番の大地主であった。年貢米が年に八千俵(今の貨幣価値に換算すると一億七千九百万円となる)、屋敷三千坪、米蔵七

棟、文倉庫一棟あり、江戸末期、駿府城の城代家老がたびたび借金を申し込みに来たという。また、農工銀行(明治二九年設立。後に第一勧業銀行《現みずほ銀行》の前身)の株をかなり持っていたらしい(静岡市史)。伊三郎は品のある風貌であったが筋骨柔弱、村人からお地蔵様とあだ名されるほどのお人よしであった。「豊田村の地主たちは刈り分け制度を取っていたため、この地ではかつて小作争議が起きた記録がない。伊三郎はこの制度の中心人物で、いつも円満な生活を望む風であった」とも記されている。書画を愛し多少の鑑識眼もあり、晩年の一時期にはその売買によって生計を立てたりしている。住まいは静岡市曲金にあつて、どの部屋からも富士山がよく見えた。徳川末期の文人山梨稻川がこの部屋で一幅の詩を書いている。「晴窓二倚リテ嶽雲ヲ眺メ古高ノ情ヲ尚ブ」と。また、京都と江戸を往復する文人たちが度々立ち寄つて一〇日から二〇日、長い時には半年も滞在したという。(海野晋吉談)



海野家。後列右から厚、三千代、欣也、亮之助、前列右から千々代、伊三郎、春樹、遊佐、初代

一八九三（明治二六）年、父の忠厚が六〇歳で死去、伊三郎二歳の時、遊佐との婚礼が行われた。伊三郎と遊佐の間には、長男厚をはじめ、次男亮之

助、三男欣也、長女三千代、次女初代、千々代、四男春樹と、四男三女が生まれた。

財産を失う

伊三郎の二番目の姉安子は生後小児麻痺のために手足が不自由であった。そこで遠州の名家出身の山崎友三郎を婿養子とした。一八九九（明治二二）年に豊田村村長をしていたという記録もあるが、友三郎は大麥を一発屋で関東銀行を起こしたり、製紐工場や醤油屋を始めたたり、果ては山師の口車に乗って銅山や硫黄山に手を出すに及んで、家産はみるみる減っていった。

「伊三郎はこの危機を見て友三郎を分家し、農工銀行の重役であった位置によつて株の売買を手掛けたが、挽回は及びもつかず失敗への拍車をかけることになった。また、一説では、伊三郎がそのお地蔵性を發揮して村人の連帯保証人などを頼まれて、その連帯債務のために家産を傾けるにいたつた」^{〔1〕}

日本が重工業を軸に経済の体質をかえてゆく時期

で、農業は景気の変動にもあそばされ、海野家の衰退をも招いたといえようか？

母の思いと子どもの思い——海野厚——

遊佐はハイカラな教育を受けながら、嫁ぎ先が農村の旧家であつたので、子どもたちの学問に夢を託した。

長男の厚（本名厚一、童謡、詩作品は厚、俳句関係は長頸子を使う）は一八九六（明治二九）年八月二二日に生まれた。一九〇三（明治三六）年四月、豊田村立西豊田小学校尋常科に入学、小学校の成績はすべて甲（最優秀に相当する）であつた。

母の命令で、放課後は、遊佐の母校静岡英和女学校（明治三六年静岡女学校を改名）へ「英語」の勉強に通つた。彼にかける母の期待だったのであろう。そのことを厚は「風の中の唄」——美しい思い出——の中に書き記している。

「……母の指図で、学校が退けると、英語を習いに、いやいや、村から町へ、毎日通っていました。……路

が遠いし、餓鬼大将の洩たれに知れたら、すぐそれ生意気だの虐められる……怖し辛しで……袴の姿を匿れるように運ぶんですが……先方はお堀端にあつた耶穌教の古い女学校で……それも放課後を、一里の路を通つてから、ぼつぼつ始まる稽古なので教室にいるうちに日が暮れかかる。そんなことも始終なんで、ほんとに……嬉しくはあつたが、嫌だつた。……中略……総勢五、六人……人気の無い広い校舎の、やにひっそりしちまう中で……俯いて、鉛筆を舐めなめア・ブツク・イン・マイ・ハンド……教えるのは、顔色のさえないどこかに何か病気のありそうな、老嬢で……この老嬢は再度訪れたミス・カニングハムで、彼女の開く英語教室へ通つた。⁽¹⁾

そして中学時代は外人宅に下宿させられた。遊佐は自分が受けた女学校での英語教育を長男にも受けさせようとしたのだらう。一九一〇（明治四三）年四月、長男厚が静岡中学に入学し、五月に義母の米子が亡くなるに曲金の家を取り壊している。四棟の家屋と米

蔵、文庫蔵、一〇〇年を超える大楠木を処分し、鷹匠に一〇〇坪の土地を求めて引越した。¹⁶⁾

厚は中学校では新聞部に属し、文芸倶楽部級の俳句を作っていた。中学で同級生であった医師の福地省吾さんは「決して軟派ではないのだが、文学趣味のおとなしい少年だった。当時の校内は尚武の雰囲気が強¹⁷⁾く、海野のようなのはあまり喜ばれず、本人は寂しかったのではないか。五年の時ランニング部の応援歌をつくってくれたことがあった」といつている。¹⁸⁾

一九一五（大正四）年、中学を卒業後、高校進学のために上京。親戚の学生三人に女中一人をつけ、麻布我善坊町から、予備校に通った。七月に京都三高を受験するが失敗。我善坊町から同麻布区市兵衛町の下宿に移った。その家が、後に結城史耕の家と判る。史耕氏の書齋にかけてあった「秋風や机の上の小人形——水巴」の短冊がどうしてもほしくてたまらなかつたと記している。¹⁶⁾ その影響もあって、俳句に凝りだし、「ホトトギス」の例会で、小田島樹人と知り合った。小田

島とは生涯の友となり、「おもちゃのマーチ」等¹⁹⁾に曲をつけている。一九一六（大正五）年、七月初旬、はじめ赤坂丹後町の渡辺水巴主宰の句会、「曲水吟社」の例会に出席。その時のことは「あの頃のこと」に詳しい。¹⁶⁾ 三高受験を控えて東京を離れるのが寂しくなり、「高等学校受験のために京都へ立たねばならないことを先生に話した。……先生は『京都はいいですね……然し、それはなるべく落第なさるように……』と続いて先生は笑われたが、この諧謔は、ぴしりと私には嬉しかった」と記す。

翌年七月中旬、再び京都三高を受験するが、「英語の日のつもりで行ったら、数学の問題で面食らつたよ²⁰⁾うな自分だったから、勿論不合格」九月、再び受験生活に入るべく上京。赤坂区新坂町八二北村方に移り、早稲田の文科に入った。

遊佐はいろんなことをもつとやりたかつたの²¹⁾に出来なかつたので、それを子どもたちに託し、期待をかけた。特に厚は長男だから、東大を出して偉くし

たいと思つた。当時は法科万能時代で、法科に入つて官吏になつてもらいたかつた。ところが、早稲田に入つたから、憤懣やる方なかつた。

厚は国元へは法科に入つたということにして實際は早稲田の文科に入つた。しかし、講義は面白くなく、樂しめない日々で、結局は浜町の流觴居の水巴氏の所に足しげく通ひ、「曲水」の編集を手伝つた。首が長かつたところから長頸子と号し「曲水」に作品を発表してゐる。⁽¹⁷⁾

兄弟に月夜の馬車となりにつけり 長頸子

鈴木三重吉の『赤い鳥』に投稿⁽¹⁸⁾

漱石の「木曜会」メンバーであつた鈴木三重吉は子どもの読み物を出版することを計画し、一九一八（大正七）年七月、春陽堂から『赤い鳥』を出版する。

『赤い鳥』のモットーは「世俗的な下卑た子どもの読み物を排除して、子どもの純性を開發するために、現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め、兼ねて、若

き子どものための創作家の出現を迎える、一大区画的運動の先駆である」⁽¹⁹⁾

「賛同せる作家は泉鏡花、小山内薫、徳田秋声、高浜虚子、野上豊一郎、野上弥生子、小宮豊隆、有島生馬、芥川龍之介、北原白秋、島崎藤村、森林太郎、森田草平、鈴木三重吉他一〇数名、現代の名作家の全部を網羅してゐる」⁽²⁰⁾

この『赤い鳥』の八月号に厚は「青鳩」を投稿し、北原白秋が推称し「いかにも夕方のお寺の森らしくて、蚊のうなりや青鳩の鳴き声が聞こえるようです」⁽²¹⁾

との評をうける。また一〇月号に「廻り燈籠」、一二月号には「天の川」を投稿し、北原白秋より「伝習を



紙表号刊創『赤い鳥』

離れた新鮮さがあり、調子もよく童謡としてもすぐれたものです」と評される。⁽²²⁾

一九一九（大正八）年のころ東京日日新聞（毎日新聞）に「背くらべ」を投稿して当選する。¹⁴

植田滋の『愛唱歌ものがたり』の中で末弟の春樹は後に次のように語っている。¹⁵

「この歌は日本の風景を一般的に描いたものではありません。兄が弟の私の気持ちに成り代わって作つてくれた具体的な歌なのです」一九歳で上京した厚にとつて、一七歳下の春樹は特別な弟だつた。共に暮らす期間が短く、弟の成長は時折の帰郷で確認していた。それだけに二年も帰れなかつたことが『弟も叙しがつてゐるだろう』という気持ちをのらせ、『背くらべ』創作へとつながつた」（と記載されているが、『背くらべ』静岡市教育委員会（一九八四）によると、毎年帰つている）。「この歌は真実を背景にしているだけに、実は一番だけで完結していた。二番はレコードに吹き込む際、中山晋平の要望で付け加えられた。このため、『背くらべ』掲載の『子供達の歌第三集』が出版された時、厚自身が『場合によつては一節の歌だけで十分

と思ひます』と注釈をつけている。¹⁶

しかし、追加された二番も、単なる空想ではない。静岡市曲金の厚の生家からは、実際に富士山が望めた。そして左に見える龍爪山と右にそびえる富士山は、現実に背くらべをしていたのだ。

今でも厚の生家に近く、彼も通つた静岡市の西豊田小学校の校舎からは、富士山と龍爪山の背くらべを望むことができる。

他に『子どもたちの歌第一集』におさめられた「赤い櫛」や「サンタクロース」など、クリスマスに因んだ詩もつづつてゐる。母親遊佐は静岡女学校時代、毎年行われたクリスマスノ景を記してお



厚肖像画（諏訪かげよし画）
1922年頃

り、子どもたちと楽しんでたと思像できる。

「おもちゃのマーチ」、のリズム感といい、今なお新しい感覚には驚くばかりである。また自身の七人兄弟を擬して作詞された童謡「七色の鉛筆」など、長男として生まれ、厚の弟妹たちへの情愛を感じさせるものである。

また弟の亮之助は「兄は芸術に勤しむ人間としては思い及ばないほど、親思い、弟妹思いであった。今は一女の母となつて神戸に住む妹の結婚の時……中略……私が、病父と兄の代わりに帰郷したことがあつた。その折、私の手にしつかと託して嫁ぐ妹に寄せた一篇の詩があつた。ふとした折にそれを読んで、妹に対する愛情の一篇に思う様泣かされたことがある」と記す。⁽¹⁶⁾

三男欣也の松山高校受験には厚が付き添い、その時の様子が「温泉雜記」の随筆に記されている。⁽¹⁷⁾

厚は早稲田大学在学中に『海國少年』に投稿していたが、社長から経営してみないかと誘われて、『海國

少年』を経営するようになる。⁽¹⁸⁾

「天野廉が海野家の残り財産を預かつていたのですが、ある時、伊三郎がやつてきて『雑誌を経営するのだからお金を出してくれ』と真顔で頼んだと言います。天野廉も『厚が来たのだったら断るつもりだったが、伊三郎の真剣な顔をみては断れなかつたよ』と語っていました」(欣也氏談)⁽¹⁹⁾。

一九二〇(大正九)年六月に社主を伊三郎とし、厚を「社長兼編集長」とし『海國少年』を経営する。当時の金で一万円を注ぎ込むほどの熱の入れようだったが、二年あまりで挫折する。完全に手を引いたのは一九二一年の夏ごろと思われる。⁽²⁰⁾

一九二三年九月の関東大震災の時には、伊三郎、厚、中央大学に入った亮之助と共に、目黒の雅叙園の近くの下目黒に家を借りて、自炊生活を始めている。⁽²¹⁾

月夜よし弟木の芽つんでこよ
長頸子

一九二三（大正一二）年三千代結婚、翌年伊三郎は結核を患い五二歳で亡くなる。長男厚二八歳、末子春樹は一〇歳であった。父と子の通い合う思いが「一椀の茶」に書き残されている。

「父と二人静かに居て、大晦日の夜の茶を啜る——。かういふ聊かなこと事を私は四、五年來空想してきた。……大晦日の夜には福茶とかいうものを淹れる習慣があるそうであるけれども。それは私の国許には一般に行われぬらしく……けれども来る年も来る年も父にも私にも幸福でなかつた。不幸であつたと言つた方が適切なほどみじめなものであつた。……或る時、病床の父がふとかう言うのだった。『まあ、こんな貧乏もしようとは思はなかつたし、貧乏にしたところでこの位が極度だろうが、そんな中にいて、わしにしるそうそう慌てもせず、まあかうして笑い合つていられるのは、それで何かしら前途に希望が持てるからだ……』……父親に対して青年期までは大抵のものがさうであるように、私も父も二人ぎりになることは窮屈

至極なものであつた。処が、先年スペイン風邪といった恐ろしい流行性感冒が猖獗した年、折悪しく上京中であつた父が神田の宿でこれに罹つて、私が看護することになつた。……朝起きるから寝るまで一日中父と顔を突き合わせて過すというような日もあつて、……父は退屈になると、私相手に古い記憶を辿つて私には珍しい昔話をするのだった。この罪もない昔話のうち、何時かしたら父に対するはにかみもこそばゆさも跡形なく消えていて、つまりこの妙な宿屋住居の一〇日間に父と私の親しみはあらたに増して……。私の仕事は間もなく失敗に終わった。そして、私は疲れ果てた心身を郷里の家に運んで行つて、一言も叱つてくれない父の前に、謝りの言葉も出さず面伏な一夏を送つた。……三〇に近くまだ家すらなし得ない私を長子として持つ事が、時に親戚等の手前どんなに身の狭い思いをなされたらう。然しこの間とて、なお一言の叱責もして下さらなかつた父は、総領児であるが故に盲目的に私が可愛かつたのかもしれないが、然

し、誰よりも私を理解してくれて、私に對するあらゆる不満をじつと耐えて私の行くままにしてやろうという、もつと大きな可愛がりようであつたことを生前も今亡き後にも私は覚えながら、無言の感謝を捧げ無言の寛怒を乞う事を今後とて何日までも続けるであらう。……私は一間にただ一人いて、静かに一椀の茶を啜ろう。その時こそ、亡き父を懐かしみ、偲び、悲しむ、滂沱たる涙が、快く私の眼がしらから溢れ落ちよう」(一九二四年一〇月三一日)⁽¹⁰⁾

厚は自分の童謡が歌われるのを一度も聞かなかつた。蓄音機を買えよと言われても「ブラウスウィックの蓄音機でなければ」と、(当時ブラウスウィックの蓄音機は高価なもので、なかなか手に入れることのできないものだった)自分の童謡を聴くこともなかつた。⁽¹¹⁾

亮之助は「兄は名利に極めて恬憚であつた。自分の作品の発表の好機会も容易に逃がして平氣であつ

た。決して求めようとしなかつた。『良いものさえ書いとけば』兄の言うことはいつも同じだった」と記している。⁽¹²⁾

弟の亮之助もまた厚の影響を受け、文学を志し、法政大学中退、宝文館に勤めながら『令女界』『若草』に少女小説を書いた。俳句を『曲水』で修業し、鳥啄子と号した。一九二四(大正一三年)『夢の明暮』を發刊。妻を得たのち、一九三〇(昭和五)年三一歳で他界した。⁽¹³⁾

中山晋平によつて曲の付けられた「背くらべ」は一九二六(大正一五)年に文部省唱歌に採用されている。⁽¹⁴⁾

戦後、一九五一(昭和二六)年になって、「おもちゃのマーチ」は小学校一年生、「背くらべ」の歌は三・四年生の音楽教科書に採用され、戦前・戦後を通してなじみの深い曲となつたが、作詞者について語られるよ

うになったのは一九五八年の毎日新聞の記事によってである。⁽²⁴⁾そして、母校の西豊田小学校に「背くらべ」の歌碑が建てられたのは一九六一（昭和三六）年である。⁽²⁵⁾生誕一一〇年の二〇〇六年以降、西豊田小学校では毎年五月五日に「背くらべ」音楽会が催されている。⁽²⁷⁾一九七四年の子どもの日、NHK静岡放送局から全国ネットで「せいくらべ・海野厚」という三〇分番組が放送された。⁽¹⁶⁾その中で山田洋次は次のように語っている。

「満州で過ごした少年のころ、学校で習ったと思う。この歌を通じて内地のことをいろいろ想像したのを覚えていて。この歌はあんまりすばらしい歌なんで、作者のことは考えもしなかったし今初めて名前を知った。これはすばらしいことで、俗人はいい作品を作るより名前を出すことにかけてがる。日本人で知らぬ人はない歌だと思うが、作者の名前は出なかった——それが芸術の一番正しいあり方であって、厚という詩人はそういう美しい魂をもった人に違いないと思う」⁽¹⁶⁾

静岡英和同窓会のために

遊佐は、静岡女学校の第一回卒業生であるという点でもあり、卒業後も母校への思いはなみなみならぬものがあつた。初期の同窓会長は不明であるが、海野遊佐、山家やま、鹿野喜代子などが代わる代わる就任とある。一九一一（明治四四）年、会長であつた遊佐は金二二円を同窓会に寄付している。⁽¹⁰⁾丁度曲金の家を整理した年である。⁽¹⁶⁾

創立三〇年にあたる一九一七（大正六）年以降、毎年のように同窓会誌に思い出の記を寄せている。

一九二四（大正一三）年の同窓会誌には「懐かしい物」と題して「あの丘を越えて Over the Hill」という活動写真を見ての感想が記されており、母性愛について縷々記されている。母の里に在るばあやのことに及んで母校を懐かしむのはこのばあやをなつかしむのとよく似ていると記す。⁽²⁸⁾また、矯風事業に心を砕く矢島楫子の話を聞き、畳み込まれた顔の皺に矯風会員と

しての思いを重ねる。

静岡の地を離れて

遊佐は、一九二五年、鷹匠町の家を整理し、静岡の小学校卒業と同時に高千穂中学校に入学する末子春樹を伴って上京し目黒に住む。⁽¹⁶⁾

そして三女の千々代は当時至難とされた津田塾大学科試験をパスした。ところが喜んだのもつかの間、入学後半年足らずで、胸部疾患のために茅ヶ崎海岸へ転地、一年の療養後、一九二六年七月一五日に没する。⁽¹⁷⁾一九二四年には夫の伊三郎、一九二五年には長男厚を失い、一九二六年に千々代を亡くし、遊佐にとつては実に悲しみの絶えない数年間だった。

大学に入った三男の欣也を大久保の海野晋吉宅に住まわせたことなど考えあわせると、当時死の病と言われた結核から他の子どもたちを守りたい一心で上京したのではなからうか。

一九二六（大正一五）年、東京に移って後に同窓会

宛てに「昨年の四月初め最愛の静岡を後に、馴れぬ東京の住まいに変わりました。私のこの一年間は、あたかもお母様の膝に甘えておりました子どもが家を離れて小学校の一年にはいり、やつと二年になりましたと同じように……」⁽²⁸⁾と書いている。夫を亡くし、長男を失った後の遊佐の不安な思いがうかがわれる。父親の天野廉の助力があつたとは言え、ここへ来て遊佐は一家の責任を自覚したであろう。

この時長女の三千代はすでに結婚していた。

厚が可愛がついていたという三千代は、ラジオで「背くらべの歌」が流れてくるたび、その作詞者について語られないことを悲しんだ。ここで三千代について少し詳しく述べてみたい。次女である薫さんからお話を伺ったところによると、三千代もまた洋裁を学ぶなど進取の気性に富んだ女性だった。

長女三千代のこと

長女の三千代は静岡県立高等女学校の一八回の卒業

生である。遊佐は、あらゆるおけいこ事、三味線、ピアノから、日本画や英語などをやらせていた。一九一九（大正八）年には島田市の蘭契会主催の洋楽演奏会で三千代、初代、千々代の三姉妹で独奏、ピアノ連弾をした。⁽²⁴⁾（『島田市史下』一九七三）

遊佐は三千代を誰よりも早く、誰よりもすばらしいところに嫁がせたかった。「ホームジャーナルを原語で読めるぐらいの人」というのが結婚の相手に望む条件だった。卒業と同時に一八歳で榛原郡萩間村黒子の鈴木宇太郎と婚約させた。⁽²⁵⁾宇太郎は、地主で山持ちの長男とし

て生まれ
たが農家
を継ぐ気
はなく、
東大工学
部の卒業
で甲種合



長女、三千代

格であり、申し分ないと遊佐は思ったらしい。有能なエンジニアで船を作りたいという宇太郎に対して、兄の厚は「機械屋なんか俗物だから駄目だ」と反対した。八つ違いの厚は三千代のことを誰よりも可愛がって、手紙のやり取りをしていた。自分の妹は理想の所に結婚させたいと思っていたらしい。

宇太郎は、一時兵役にとられたが除隊後、大阪商船に入社。造船技師として神戸に住んでいた時、三千代と結婚した。三千代は山のような衣裳を持って嫁いだ。

遊佐が鷹匠の家の整理をしていた一九二五年五月二〇日に厚が亡くなり、その一〇日後の六月一日には三千代の長女縁が生まれた。遊佐は神戸に産の手伝いに行つたが、ショックを与えてはいけなさと三千代には厚の亡くなったことを知らせなかつた。結核で亡くなったということもあつて、遊佐は厚の書いたものなどすべて焼き捨ててしまった。弟妹の中で、厚と最も親しくしていた三千代は後々までそのことを悔しがっていた。⁽²⁶⁾時は海運業界が華やかな時代で、宇太郎

は長崎の三菱造船所に出向して、リオデジャネイロ丸、ブエノスアイレス丸、サントス丸のエンジン部門を設計した。これらの客船が処女航海で南米へ向けて就航するたびに、三千代は埠頭で夫を見送った¹。その地で次女薫が生まれる。ところが宇太郎は造船技師として功を焦ったのか、急性の肺疾患に罹ったのに肺結核ではないという医師の言葉を信じてそのまま仕事に励んだ。その無理のために三六歳で他界したのは一九三二（昭和六）年一月、長女の縁が六つ、次女の薫が二つの時である。

宇太郎は長男だったので三千代は娘二人を連れて榛原郡萩間村（現牧之原市相良町）の宇太郎の実家に戻った。

実家は山持ちで、宇太郎を大学に入れるために山を全部売り払って学資にした、にも拘らず宇太郎は死んでしまった。宇太郎の弟たちの学資は自分で働いて送るからと、幼児二人を連れて、布団からピアノから、

すべての嫁入り道具を蔵に納めて上京した。

二八歳の三千代は上京すると母遊佐の住む下目黒の家の隣に住んで雅叙園の上にある当時開校間もない杉野ドレスメーカー女学院に学んだ。日本画を学んでいたことが効を奏し、ノートを見るとデザインの線など、とても美しい。本科と師範科を卒業すると洋裁の教師として働いた。

遊佐に言わせると「よくできた娘、困ったことがあるとすぐにこうしたらと助言してくれる。もう一度世に出したい」¹が口癖であった。長女でもあり、期待の星でもあったということがうかがえる。

宇太郎の死亡したときに、当時一万円の生命保険がおりたのを銀行に預けその利子を婚家の京都大学と医科歯科大に行く弟たちの学資にあてた。

三千代は一生懸命働いて娘たちを育てた。学校では洋裁を教え、家では内弟子をとり、ノルウェー公使、東京市会の大神田軍治、頼母木真六等の名流家庭に家庭教師として出入りした。三千代がドレスメーカーで

教師として働いていた間、薫は今でいうかぎつ子になり、隣に住む祖母遊佐のところで過ごしたという。

後に、戦争で目黒の家を焼け出された。シンガミンの機械部分をやつとの思いで運びだし、再度相良町の実家に疎開した。三千代は近隣の家から持ち込む布地を洋服にして生計を立てた。新円切り替えの際には、神戸で手に入れたドイツ製のピアノを五〇〇〇円で売り払って生活費にあてた。戦後、上京を果たし、親戚筋の「伊伝」の分家に望まれて再婚したのは四五歳の時である。

成功や幸福は努力次第

三男欣也は松山高校から東大に進んだ。法科万能の時代は去り、これからは経済の時代と割り切り、経済学部を出て、福井菊三郎（江原夏の夫）の口添えもあり、三井銀行に就職し、検事の家系である渡邊家の娘と結婚した。^①

三女初代は海軍兵学校を出た佐藤佐と結婚した。佐

藤佐は海軍の軍人だったから、一九四三年八月、小スンド列島のフロレスの軍政の責任者として出征していった。フロレスは一九四二年五月から日本軍に占領されていた。戦争が終わって引き揚げ船に乘ろうとしたとき戦犯の疑いがかけられた。ところが神父さんたちの、「司令官に罪はない」との証言があつて、戦犯を免れ、三年後にマラリアに罹って衰弱して帰ってきた。後に佐藤佐はペンネーム佐藤隆の名で「花の孤島」^②というフロレス島での交わりを、神父さんへの感謝の意味で英文の作品として残しており、NHKで取り上げられたことがある。

遊佐の末の息子である春樹は東大を出た訳だから、官吏か銀行に入りたいというのが遊佐の気持ちであった。しかし、春樹は前畑ガンバレに感激し、館野さんという先輩もいてNHKに入ることになった。その後、転勤になって大阪に行ってしまったので、遊佐は一人になっていた。小学校二年生の薫は、每晚枕を持つて遊佐のところ泊まりに行った。^③

遊佐の夢であった三女の千々代を結核で亡くし、かわりに緑と薫に夢を託した。薫は言う。

「いろんなことを教わった。遊佐は試験があると『どうだった』と言う。姉も私も一番でない叱り飛ばされる。母は『一生懸命やった』と言うと『一生懸命やったのだから、仕方がない』と言うに對し、遊佐は一番でなければ承知しなかった。大学は東京大学でなければ大學ではないと言う。厚が早稲田に行ったことにはいつまでも悔しがっていた」⁽¹⁾

厚と亮之助以外はみんな東大。欣也、春樹、三千代の夫宇太郎、みんな東大で当然だと思っていた。遊佐は高学歴で、こうしようと思ったことはとことんできたから、孫や娘は何をやってもトップでなければ承知しなかった。⁽²⁾

遊佐は、一九二六（昭和元）年、五一歳の時、高田敏子の高田女塾で若い生徒にまじって学んだ。その喜びの聲が、同窓会に英文で送られてきている。⁽³⁾そこで「Every success and every happiness depend on

one's exertion. work harder harder till we are able to accomplish our desire. (成功や幸福は努力次第。……勉強すればするほど希望がかなえられる)。」

昭和五年の便りには「近頃私が暇ひまに読んでおります早稲田大学の伊地知博士の「ロンドン滞在記 My London Year」(伊地知純正・一九一四初版)の中によくレディーファーストという言葉が出てまいります」と書く。⁽⁴⁾今でこそ衆知のことになった英欧の習慣を当時の遊佐は印象深く書きとめたのであろう。

一九三一（昭和六）年の便りには「ある夕方の帰り道ラジオ屋の前で六時三〇分の英語講座を聴きました。何時も聞きなれた岡倉先生のジュニア・クラスのプロバークの講座でありました。その中に

“The darkest time before dawn”

とかく変化の多い人の生涯に精神上又物質上どうにもならない困惑のどん底に陥るダーケスタイムの来る時こそ本当に人間を真面目に考えさせる貴重なものではないかと思えます。

『暗黒の後には光明の世界が輝いているぞよ』

中略……私はダーケスタタイムによつて却つて自分の救われましたことをとうとい経験として常に感謝しているでございます⁽²⁸⁾」

これは、夫と三人の子どもと娘の夫を次々に亡くし、家屋敷を失い、故郷を出、悲嘆にくれた一時期への回想の言葉であろう。そのことによつて、上京を果たし、再度、英語を学ぶ機会が与えられ、また人に教えるなどして、新たに自らの充実感を体験したのである。

昭和の初期までは欧米への旅行を洋行といい、洋行して帰ってくると格が上がる。洋行するためには英会話が必要というわけで多くの人が遊佐の所に習いに来た。

遊佐は自分が海外に行くという夢は実現できなかつたが、英会話を教えた若い人たちは洋行して、昇進していった。厚もまた洋行したいという夢を持っていたのにと無念の思いを反芻していたことであろう。

一九三二（昭和七）年には定連会と称して、佐分利

光子、高山芳、阿部ゆひ子、野口しまと共に福井夏宅にての談笑の様子が記録されている⁽²⁹⁾。開学間もない静岡女学校に学んだことが、一生の友人を得る場となつた。機会を作つては交友を温め、人生の節目にはそれを利用して利用している。つまり今というネットワークとして活用したのである。

遊佐の晩年

そばに三男の欣也、長女三千代一家がおり、次女の初代は湘南に住み、何度となくおとずれて孫娘を抱いた。没する一年前に、末子の春樹に親戚筋から嫁を迎え、最晩年に訪れた安堵の一年を過ごし、一九四四年六月一四日に遊佐は六九歳で波乱の一生を閉じた。

まとめ

明治維新後、我が国は西洋列強に対抗するために、国力の増強が最重要課題であつた。西洋に学ぶために

留学生を派遣し、御雇い外国人を招き子弟の教育に当たらせ、西洋の文物を輸入し、キリスト教を解禁した。西洋に追いつけ追い越せの意識はかなりの庶民層まで浸透したと思われる。駿府の藩校として出発した静岡学園所は、人材を得て、静岡の教化に一方ならぬ貢献をしている。そういう雰囲気の中、「静岡バンド」と言われる一連のキリスト者が生まれ、「静岡女学校」が開校された。そこに当時の名士の娘である遊佐たちが入学したのが明治二〇年である。翌々年には大日本帝国憲法が公布され、国民道徳の統一が図られ教育勅語が公布され、東海道線の新橋―神戸間が全線開通した年でもあり、日本は近代国家としての体裁を整えつつあった。

そういう時代に幸運にも彼女たちはカナダミッションから派遣された外国人教師に直接教育を受けたのである。そこで学ぶ者にとって、地方であっても時代の先駆けであるという自信と誇りが生涯にわたって支え続けたことは想像に難くない。遊佐は地域の豪農の主

婦となつても、子どもの教育に精魂を傾けた。財産を失うことは遊佐にとつてはあまり重要課題ではなかったのではないか。それよりも、教育こそが、人生成功への近道だと考えていたと思われる。子どもたちの幼い頃、母親が身に付けていた文化的素養が有形無形の影響力を与えることを考えると、殊に長男厚の情緒豊かな感性を生み出すことに遊佐のそれが大きな貢献をしたものと考えられる。特に「厚の歌詞に異国情緒が感じられる」のは遊佐の影響であろう。

夫を失つて後、子どもの将来を見据えて、法学から経済学へと進路を転換するなど、時代の先達となるべく配慮を怠らなかつた等、当時としては珍しい知的母親像である。

夫を失つてから、家屋敷を整理し、子どもたちと上京した。このこと自体は悲しむべきことであつたが、上京することにより、兼ねての念願であつた英語を学ぶ機会が再び与えられ、それを生かして有意義な人生を全う出来たのである。また、静岡女学校時代の友人

を中心に生涯を通じて多くの友達との交流を大切に、支え支えられたことも大きな力になった。それらを重ね合わせると、いわゆる良妻賢母では終わらなかった一生が見えてくるのである。遊佐自身の自己実現はこの時、果たされたといえよう。

静岡に集まるのは悲しいことばかりという海野家の人たちは、「背くらべ」が歌われる五月が来ると、天折の「厚」を思つて集う。今、法蔵寺の境内には「天の川」の句碑が立つ。「姉と私が母・三千代の供養のために建てました。岡崎の山奥まで石屋さんで行き、見つけました」⁽³¹⁾（薫談）

五十回忌に渡辺水巴の未亡人桂子の句

五〇ネンチマキノウタノアタラシキ 渡辺桂子

海野遊佐の孫である伴野薫さんには親しくお話を伺いご助言をいただきました。ありがとうございます。

《参考文献》

- (1) 『北原・海野家の歴史』海野春樹、海野厚作品刊行会（一九八八）
- (2) 『嶽陽名士伝——明治初期の静岡県人物誌』山田満作（一九八五）
- (3) 『島田第四小学校開校一〇〇年史』島田第四小P（一九八三）
- (4) 『静岡県鉄道興亡史』森信勝、静岡新聞社（一九九七）
- (5) 『株』静岡銀行静岡銀行史』（株）静岡銀行（一九六〇）
- (6) 『静岡学問所』樋口雄彦、静岡新聞社（二〇一〇）
- (7) 『静岡学問所から近代国家へ溶けこんだ大いなる遺産』芹名幹生（二〇一〇）
- (8) 『初等義務教育制度の確立と女子の就学奨励——日本の経験』斉藤泰雄『国際教育協力論集』第三巻第一号（二〇一〇）
- (9) 『静岡県の一〇〇年』静岡県（一九六八）
- (10) 『静岡英和女学校五〇年史』静岡英和女学校（一九三七）
- (11) 『静岡英和女学院八〇年史』静岡英和女学院

(一九六七)

(12) 『静岡英和女学院百年史』 静岡英和女学院編集委

員会 (一九九〇)

(13) 『静岡市史』 静岡市 (一九七六)

(14) 『五月になるとわが歌が』 『芸術と生活』 草柳大

蔵 (一九七二)

(15) 『静岡県安倍郡史』 静岡県安倍郡教育会

(一九二八)

(16) 『背くらべ』 静岡市教育委員会社会教育課

(一九八三)

(17) 『倭文』 松縄善三郎、静岡英和女学院同窓会

(二〇〇四)

(18) 『明治百年』 『毎日新聞』 (一九六七・一一・七)

(19) 『赤い鳥』 一一号、鈴木三重吉 (一九一八)

(20) 『赤い鳥』 一一二、六号、鈴木三重吉 (一九一八)

(21) 『愛唱歌ものがたり』 植田滋、読売新聞文化部

岩波書店 (二〇〇三)

(22) 『歌い継がれる名曲案内—音楽教科書掲載作品』

日外アソシエーツ株 (二〇一一)

(23) 『子供の歌 第一集—第三集』 海野厚、清風堂

(二〇〇六)

(24) 『童謡詩人—海野厚をしのぶ』 毎日新聞

(一九五八・二・二四)

(25) 『童謡碑の除幕式』 毎日新聞 (一九六一・一一・五)

(26) 童謡『背くらべ』 詩人海野厚さん、静岡新聞

(二〇〇六・四・二〇)

(27) 『詩人・海野厚を偲び「せいくらべ」合唱—母校

西豊田小』 静岡新聞 (二〇一一・五・六)

(28) 『英和女学院同窓会報』 (一九二三・五)

(一九二七・六・二〇) (一九三〇・一〇・二五)

(一九三一・八・一) (一九三二・一〇・一五)

(一九三四・八・三)

(29) 『島田市史(下)』 島田市島田市役所 (一九七三)

(30) 『花の孤島』 佐藤隆、東京信友社 (一九六一)

(31) 伴野薫談

《協力者》

長藤和子 静岡英和女学院

中国・内モンゴルに暮らして

一 中国旅行が転機となる

静岡県日中友好協会の旅行に参加

一九八五年夏、上海・浙江省・北京を訪問する機会に恵まれました。私が四四歳のときです。

静岡県日中友好協会が日中青少年の交流を目的に、県内の小学五年生以上の児童・生徒・大学生・勤労青年らに呼び掛けて派遣した「静岡県青少年友好使節団」で、前年の八四年に次ぐ第二次の訪中団でした。参加した団員は八〇名。第一次の団にわが家の夫が生徒指導係で参加した縁で、翌年私に行ってみませんかと声がかかりました。家庭の主婦であった私にとって三〇万円の旅行費用はかなり高額でしたが、夫に背中

川井 陽子

を押されて思い切って参加することにしました。

当時一回限り有効というパスポートがありました。二度三度続けて海外へ行くなどは夢にも思いませんでしたので、当然このパスポートを取得し、出かけました。

初めて行ってみた中国で、文化遺産はさることながら、私たちがすでに失ってしまった素朴な生き方を垣間見、懐かしく、すっかり中国にはまってしまいました。たとえば、家の前にたらいを出し洗濯板でごしごし洗濯をしていたり、市場で鶏を買って来て自宅できばいていたり、女性も男性用の自転車に乗っていたり、などなど。ぜひまた中国に行ってみたいという思いがふつつつと沸いて来て、そうだ家の車をやめれば

旅行費用が捻出できる！と思ひ立ち、以来わが家は車がありません。

静岡県日中友好協会で働くことに

この旅行団に参加したのを機に県日中友好協会の役員の方たちと知り合い、友好協会事務局へ就職することになりました。

その頃、日本と中国との往来が徐々に頻繁になり、当時の中曽根首相の中国人留学生一〇万人受け入れ表明もあつて、各地に日本語学校が設立され、中国人留学生が多く来るようになりました。静岡市にも三校が開設されました。県日中友好協会と縁の深い「静岡日本語教育センター」は一九八七年、黒竜江大学の関係者の子弟を受け入れ、スタートしました。

当時、大学へ来る学生は「留学生」、また日本語学校の学生は「就学生」と区別して呼ばれ、就学生はいろいろな制約を受けていました。日本と中国は経済格差が大きかったので、就学生には日本人の経済保証人

が必要で、アルバイトも入国当初半年間は禁止、その後も週二八時間以内という厳しい制限がありました。

経済保証人が学生の授業料、生活費など、すべて金銭の援助をするというのが建前ですが、実際はこのような法律は守られていませんでした。入管は就学ビザで入国し、お金を稼ぎに来る外国人を厳しく取り締まろうとしたのでしよう。

日本に来たばかりでまだ日本語もおぼつかない就学生たちのアルバイト探し、電化製品や生活用品の調達、アルバイトの面接への同伴、また、身内を日本語学校へ呼びたい人のために保証人を探すこと、などが私の仕事の一部でした。時には日本人男性と結婚して静岡に住んでいる中国人女性の諸々の相談ごと、中国へ出向している夫の言動に不信を抱いている妻からの相談など多方面にわたり、問題は山積で、常に私の周りには支援を必要としている人々がいました。私の年齢が学生たちの母親と同じくらいということ、私の性格がこの仕事に合っていたということが相俟って、数年

間、全力投球で仕事をしました。また、協会派遣の訪中団の添乗員の役目も仕事のうちでしたから、夜間、静岡中国語講座に通い基礎から中国語の勉強をしました。

私は一九八五年から二〇〇〇年までの一五年間友好協会で仕事をしましたが、大手旅行業者の格安中国旅行が世の中に浸透し始め、協会を利用した訪中団が減り、財政が苦しくなってきました。

一方、この一五年の間に中国の経済が著しく発展し、お金持ちが増えました。日本の入管では就学生の両親が一定以上の納税をしていれば、入国を認めるようになりました。保証人は両親で良いことになったのです。すなわち、日本に来て次の日から生活に困るような学生はいなくなりました。日本語学校も自前の宿舍を持つようになりました。

二 内モンゴル自治区の包頭市へ

バオトウ

包頭師範学院へ留学が決まる

私は六〇歳の定年を待たず一五年勤めた職場を五九歳で退職し、中国の内モンゴル自治区の包頭師範学院へ日本語教師を兼ねて、中国語の勉強に行きました。二〇〇〇年九月のことです。

それまで仕事で中国への往来は日常的でしたし、身の回りには高齢者で中国へ語学留学をする人は何人もいたので、私もちよつと行ってみようというごく軽い気持ちでした。静岡市の会社で働いていた包頭出身の彭炳琬という青年が紹介してくれて留学先が決まったのですが、包頭と聞いて知人の中国人たちは一様に「あんな厳しい気候の地に日本人は住めっこない」と心配してくれました。

しかし、実は私は、こんな辺境の地にはおそらく日本人はいないだろうから、中国語の勉強にはちょうどいいだろうと考えていました。静岡県と友好都市であ

る浙江省には知り合いが大勢いましたが、みんな日本語が堪能ですから語学の勉強には環境がよくないと思いましたが。

包頭市の外国人留学生第一号ということでした。

このころ中国へ長期滞在する人にはエイズ検査が義務づけられていて、静岡市立病院で検査を受け、ビザの申請書へ添付して提出しました。中国政府はエイズの蔓延に神経をとがらせていました。

内モンゴル自治区の概要

内モンゴル自治区はロシア共和国・モンゴル国と国境を接する中国北方の地で、広大な草原や原生林を擁し、面積は日本の約三倍、人口は二三〇〇万人です。モンゴル族の自治区ですが、住民は圧倒的に漢族が多くて七割を占め、モンゴル族は一割でほかに回族・満族・ダフル族・オロチョン族など四九の少数民族で構成されています。

区都はフフホト市で北京から西へ七〇〇キロ位に位

置します。

少数民族保

護の政策を

とつている中

国では、政府

の機関の看板

は必ず漢字と

並んでモンゴ

ル文字も併記

してありま

す。包頭の空

港でこのモン

ゴル文字を始

めてみたときには、辺境の地に来たことを実感しました。

内モンゴルとはモンゴル語で「ゴビ砂漠を境に内側にあるモンゴル」という意味で、大相撲の朝青竜とか白鵬の故郷は、「モンゴル国」という別個の独立国で



放牧のラクダに会う (2004年10月7日)

す。一般的には、外モンゴルと呼んでいます。

包頭バオトウとはモンゴル語で鹿の居る所の意

私が暮らしていた包頭市は人口は二三〇万人・面積は静岡県の四倍弱の広さで青海省を発した黄河が最も北上したあたりに位置します。五〇年前は一面の砂漠だったところですが、周辺の豊富な鉱産資源を利用して中央政府は一大工業都市を計画的に建設しました。

豊富な鉱産資源とは、一昨年、中国が日本への輸出を渋り、一躍高値になり騒動となった「レアメタル」などの希土類のことです。埋蔵量は中国国内の九〇％を占めていると言われます。包頭に日本の旭硝子(株)駐在事務所があり、森下俣男さんという方がいて、一〇年も前からレアメタルの調達のために、包頭に滞在していたのだそうです。彼は偶然にも静岡市の出身で、高校まで静岡に住んでいたそうです。

また、ご記憶の方もいるかもしれませんが、山崎豊子の小説『大地の子』の主人公「陸一心」が下放(知

識青年を農村へ移住させること)されたと設定された鋼鉄会社は国営「包頭鋼鉄公司」がモデルだと言われています。

この公司は中国建国後の第一次五カ年計画(一九五三年〜五七年)に沿って建設され、当時は鞍山、武漢と並ぶ中国三大鉄鋼コンビナートと称された企業です。また包頭には北方重工という兵器工場がありました。現在兵器を作っているかどうかわかりませんが、以前製造していた戦闘機や戦車、大砲などが工場前の広場に年代順に展示しており、市民の憩いの場になっています。

建国当初、アメリカとの戦争が勃発することを想定して、敵を内陸部深く誘い入れて、遊撃戦でせん滅する作戦が考えられていた、という話を聞いたことがあります。所謂、林彪の「人民戦争理論」だそうです。

包頭の四季

乾燥地帯に属する包頭市は春先、「沙塵暴サチエンバオ」という

砂嵐が吹きます。日中、急に空が暗くなり、夕立でも来るのかなと思っていると、雨ならぬ砂嵐がごうごうと音を立てて吹いてきます。顔も髪の毛も、部屋の中も砂だらけになってしまいます。こんなことが年五、六回あるでしょうか。日本でいう「黄砂」の発生源ですね。沙塵暴ほどでなくても、ちよつと強い風が吹くとあたりの砂が舞い上がって、一年中じやりじやりしている感じですよ。

四月半ばから木が芽吹き、れんぎょう・桃など春の花が一斉に咲きそろいます。三カ月も雨が降らないのはざらですから、この時期は農民ばかりではなく全住人が雨を待ち焦がれます。たまに雨が降るとみんな大喜びで、若い人など雨の中を濡れて歩いていきます。とても気持ちがいいのだそうです。

短い夏と秋を過ぎると厳しい冬がやってきます。私が体験した最低気温は氷点下二八度。一〇月一五日から三月一五日まで部屋にスチーム暖房がくるので寒くはありませんが、道端で売っている野菜は綿入れの布

団にくるまれてるし、冷凍食品はケースから取り出して並べてあります。寒いわりには雪は殆んど降りません。

寮の学生が野外に干した洗濯物に氷柱つららが付いて、日に当たるとほとほとしずくが落ちてきます。洗濯機はありませんからすべて手洗いです。

郊外を流れる黄河は一面凍りつき、川をトラックが走っているのを見たときには驚きました。二月ごろになると解放軍の飛行機が黄河へ爆弾を落として氷を爆破し下流へ流します。

郊外の農家は部屋に坑か（オンドルのこと。竈かまどに使う石炭の余熱が坑をとおって床暖房になる）がとおっていてとても暖かいです。

遠山正瑛先生

郊外の恩格貝というところには元鳥取大学教授の遠山正瑛先生が一生をかけて取り組んだ砂漠緑化基地「遠山林」があります。中国政府は遠山先生の偉大な

功績をたたえて一九九九年八月、恩格貝に遠山先生の銅像を建立しました。中国では生きてゐる人の銅像は作らないのが習わしだそうです、毛沢東と遠山先生のお二人だけ生前に作ったそうです。

私も何度か見学に行つたことがありますが、日本から植林のボランティアが来ているのを見ました。夏休みには小学生を含む若い人たちが、大勢で来ていました。

包頭の天外天というホテルで、小柄な老人が作業服を着てロビーの椅子に座つてゐるのを見ましたが、あれは遠山先生だったと勝手に信じています。遠山先生は、包頭市の名誉市民になつています。二〇〇四年二月に九六歳で逝去されたそうです。

おいしいもの

春になると黄河の鯉がおいしいと言うので、川沿いの専門店に食べに行つてみました。客は大きな水槽の中で泳いでゐる鯉を物色し注文します。すると料理人

は、たも網ですくつて、やにわに鯉の頭を板きれて叩き気絶させ、秤にのせて目方を計り金額を決めます。

何ともダイナミックな光景でした。日本の煮魚のような料理でした。

美味しいものといえば、羊肉のしゃぶしゃぶ（シユワンヤンロウ）。草原でおいしい草を食べてゆつたり育つた羊は、他の地方産より高級とされています。スーブは激辛ですがだんだん慣れて、結構辛くても大丈夫になりました。たれはいろいろあつてあれこれ混ぜ合わせていただきますが、私はごまだれが好きです。

一五〇円でおなかいっぱい食べられます。物価は概ね日本の一〇分の一くらいでしょうか。

包頭シヤオフェイヤンに「小肥羊」という有名なしゃぶしゃぶのレストランがありますが、東京へも店を出したというところで。

また、羊の串焼き（シシカバブー）に混じつて焼いている、蟬のさなぎの串焼き。食糧危機の救い神のような食材ですが、これがまたすごくおいしい。調べた



モンゴル族の衣装を着て記念撮影（2001年5月2日）

ら、中国全土で食べられているのではなく、黄河流域の人たちが食べているそうです。日本にも蟬がたくさいますから、勇気のある方はぜひお試しください。

草原の青きオオカミ「成吉思汗」

ジンギスカン

一三世紀に世界に君臨した、成吉思汗ジンギスカンにまつわる故事が何箇所かにあります。彼の墓はまだ所在がわかっていませんが、現在の研究では、おそらく外モンゴルだろうというのが有力な説となっています。包頭から遠くない場所にも墓ではないかといわれているところがあります。蒙古式建築物の「成吉思汗陵」と言う記念館があります。ジンギスカンとその妻の棺、遠征に

使った軍刀、馬のムチ、かぶとなどが陳列してあります。ジンギスカンの末裔のモンゴル族は毎年ここで盛大な祭りを開催しています。四人の息子の領地だったと言われる場所「四子王旗」も包頭から一〇〇キロ位の草原にあります。今、それらは観光地になっていて、私も日本から遊びに来た友達たちを案内して、何回か行きました。モンゴル式移動住宅（パオ）に泊まって乗馬や、ラクダに乗り、モンゴル相撲を見学し、モンゴル料理の羊の丸焼き（手扒肉）を食べ、モンゴル族の歌舞団の表演を鑑賞し、馬頭琴の音色を楽しみ、満天の星空を見ます。天の川など誰に説明を受けなくてもすぐわかります。日本からのお客さんもよく見かけました。

近頃第一〇号が帰還した中国の有人宇宙船「神舟」はすべてこの地の草原へ着陸しています。

カシミア製品

また、内モンゴルはカシミア製品の産地です。包頭

にも世界的に有名な「鹿羊」というカシミア工場があります。日本の和歌山県田辺市の会社が包頭に工場を持っていて、日本人の柳瀬さんという夫婦が滞在していました。

日本で売られているカシミアのセーターは殆んど内モンゴルで製造されたものと思います。私は、カシミアのセーター、マフラーを大量に製造工場から直接購入し、日本に送り友人たちにプレゼントし喜ばれました。男性用のズボン下はぜいたく品の部類に入りますが、これがとても温かいということを知り、娘の婿に送りましたが、日本では温か過ぎてはくチャンスが無かったそうです。

自分に合ったサイズのセーターを何着か作ったこともありました。

ひとつ問題は、山羊は草原の草を根こそぎ食べてしまうので、土地の砂漠化につながっているそうです。

(羊は根っこは食べないとか。)

また、草原に寒波が来ると草が凍ってしまつて「凍

害」が発生し、羊が大量に死ぬという家畜災害に苦しめられることも多々あるようです。

ラマ教寺院

包頭から七〇キロ・陰山脈の奥深くに純チベット式ラマ教寺院「五当召」があります。今でもラマ僧が仏事をとり行い、信徒が参詣します。運がよければお勤めが見学できます。赤い衣を身にまとつた僧たちが、手に持った数珠を指で送りながら、お経をあげています。小学生くらいの小坊主さんもいます。ご承知のようにチベットにいた活仏（いぎぼとけ）ダライラマはインドに亡命していますので、パンチェンラマの写真が掲げられています。

ラマ教寺院へ行く道の途中に、趙代（中国戦国時代の王朝名。BC二二八年に秦に滅ぼされた）の長城を見ることができます。土を盛り上げたところに、レンガが積まれているだけで簡単なものです。

三 屈連壁教授と河村太美雄先生

包頭師範学院の屈連壁教授と会う

二〇〇〇年九月七日夕、大きなトラランク三個を持って北京国際空港に降り立つた私は、国内線に乗り継ぎ、「さー、もう日本語は使わないゾ！」と固く心に決め、包頭へ向かいました。北京から飛行機で一時間のところですよ。包頭空港へ到着するや否や、なんと日本語で「川井先生！」と大きな声が聞こえるではありませんか。

エッ！エッ！聞けば、内蒙古大学の日本語学科を卒業したばかりの若い女性の高禱先生でした。包頭師範学院には以前は日本語学科があつたそうですが、ここ数年はなく、今年度新しく採用された日本語の先生とのこと。何だ、いたんだ、日本語の先生が。早くも日本語で会話が始まり、私の決心はわずか一時間余りであつけなく消えました。

宿舎へ案内され、疲れた身体をベッドに横たえ深い

眠りについて……。次の日の朝。ダブルの背広に帽子をかぶった立派な身なりの老紳士が、私を訪ねてきました。「ようこそ包頭へいらつしやいました。私は屈連壁と申します」と、昨日の日本語の先生よりもつと流暢かつ丁寧な日本語で自己紹介をし、名刺をくださいました。見ればこの大学の歴史の教授で、日本研究所長と書いてありました。

教授は、旧満州の生まれで、父親が日本の蓄音機会社に勤めていた関係で、大連の「南満学堂」という満鉄経営の日本の学校に入学し、小学・中学と日本人の先生に日本の教科書で教育を受けたそうです。南満学堂は日本の敗戦と同時に消滅したそうです。屈教授は日本の教育の長所は長所として肯定しながらも、日本軍国主義には断固反発し、東北地区で抗日運動に積極的に参加したそうです。

新中国成立後、革命運動に参加した人が手厚く優遇されたのかと思いきや、その後、屈先生が日本語が話せたことや、日本の本を持っていたことなどから日本



屈連壁教授ご夫妻（2005年7月13日）

のスパイと疑われ、六十年代初め、内モンゴルへ下放させられたのだそうです。

私と出会った日までの半世紀間、全く日本語を使つたことはなかったと言っておられました。

屈教授夫婦はよく私を家に食事に誘ってくれました

が、終わりはいつも「仰げば尊し」の歌をいっしょに歌いました。

先生は歌詞を三番までしっかり覚えていて、涙を流しながら歌いました。

屈教授は「勝田悟朗」

先生を探しておいでです。当時五〇代で米国留学帰りの英語の上手な先生だったそうで、生徒に対する慈愛に満ちた言葉を今でもはつきり覚えていらつしやるそうです。

先生の名刺に記されていた「日本研究所」という団体は、包頭市の大学教師たちで作るグループで、日本の動向をメディアなどで集め分析し、研究しているようでした。私もオブザーバーとして参加してほしいと言われ、何回か会に出席しましたが、日本を厳しい目で観察している人たちの集まりでした。

『一個日本老兵対侵華戦争的反思』出版へ

一方、私には河村太美雄先生という牧之原市在住の知人がいます。先の日中戦争に東京目黒区の小学校勤務中に召集され、静岡第三四連隊へ入隊し、華中・華南で過酷な戦争体験をした方です。二〇〇〇年夏に、その戦争体験と中国に対するお詫びを込めて静岡教育出版社から一冊の本を出版されました。包頭の私のと

ころへも送っていただきましたので、読んでから、屈教授に差し上げました。本の題名は『ふるさとへの道——ある皇軍兵士の歴史認識』です。屈教授はこの本を読んでたいへん感動され「ぜひ中国語に翻訳して出版したい」とおっしゃいました。

このことを河村先生に連絡しましたら八〇歳のご高齢にもかかわらず、さっそくお一人で包頭へやつてこられました。

屈連璧・河村太美雄の両先生は初対面でたちまち意気投合し、河村先生の著書『ふるさとへの道——ある皇軍兵士の歴史認識』は屈教授に翻訳と出版をゆだねることになりました。出版にこぎつけるまでには数々の困難との闘いがありました。三年の歳月を経て『一個日本老兵对侵華战争的反思』が北京の東方出版社から出版されました。

二〇〇三年九月一八日、柳条湖事件（関東軍の謀略によって起こった満州事変の発端となる鉄道爆破事件）七十二周年の日、包頭師範学院で盛大な出版記念会

が催されました。河村先生も日本から参列され、屈連璧教授の労をねぎらいました。包頭に滞在した五年の間で、私が最も嬉しかった事はこの本の出版に関われたことです。

両先生の共通の認識は「歴史を鑑として未来に向かい、世々代々の中日友好とアジアの繁栄を共に築こう」という一点です。

私の中国人の友だちは、最近北京の新華書店でこの本を見たとのこと。です。

四 授業始まる

外国人宿舎と英語の先生たち

私の宿舎は学院内の外国人教師用の棟でダイニングキッチン・トイレ・シャワーのついたひとつの部屋と別にベットのがある寝室用の部屋がありました。実はこれは元教室で、自転車や洗濯機・冷蔵庫を入れてもまだ広々としたガラシとしたものでした。ガラスの二重窓の外にはものしく鉄格子がはめられています。

棟の玄関は一箇所だけでここにも鉄格子がはめてあるので、安全・安心というよりもいざの時どこから逃げればいいのか逆に怖さを感じます。

中国では全般にアパートや政府機関・工場などに鉄格子が嚴重にはめられているのが目につきます。銀行の支払窓口はガラスの壁越しに手と手で受け渡しするようになつていて、日本のようにオープンではありません。

話がそれましたが、外国人教師はイギリス・カナダ・アメリカ・フランスなどからの英語の先生で、常時五〜六人いました。キリスト教の宣教師たちです。

布教は禁止されていると聞きました。中にはこの地の気候や習慣に馴染めずホームシックになつて、一〇日ほどで帰つてしまつた青年教師もいました。

外国人教師と学校の外事弁公室（外国との連絡をとる事務室）の職員とよくパーティーをやりました。私は日本からたくさんの食材をもつていったので、カレーや海苔巻・稲荷寿しなどを作りました。彼らは美

味しいと言つて食べてくれました。

いろんな言葉が飛び交いますが、会話にはさほど困りません。楽しいと何とか通じるものです。ナイジェリアからのフィリップ先生は中国語が上手で私と街などで行き合つと、お互いに手を上げて中国語であいさつし合つているので街の人がおどろいて見ていました。

私の中国語の授業

二〇〇〇年九月七日に包頭に到着し、一日から中国語の授業が始まりました。中文科（日本でいう国文科）の張金梅という二〇代後半の女性教師が担当してくれることになりました。教科書は北京語言文科大学出版の「初級漢語課文」。本文は中国語で、説明は英語で書いてあります。張先生は日本語がわからないので、中国語と英語を使って授業をします。広い教室で一對一での授業です。いつも英和辞典・和英辞典・中日辞典・日中辞典の四冊を抱えて行きました。「いろ

は」の「い」からの授業でしたので困ることはありませんでした。

ある日、張先生が自宅に食事に誘ってくれました。

ご主人の両親と同居していましたが、食事中に突然この両親が「きりつ」「れい」「せんせい きようなら」

「みなさん きようなら」と日本語で言ったのです。

子どものころに日本人の先生から習ったことがあつたようですが、今はすっかり忘れてしまつたと言いました。

私は内モンゴルと日本の関係を知らなかつたのでびっくりしました。満州のことはまあわかつているつもりでしたが、包頭にまで日本人が入植し、支配していたとは！ そういえば「満蒙開拓団」という言葉がありますね。

その後調べてわかつてきたことは、「日本政府は満州事変以後、満州・華北・内モンゴルで地元農民の土地を接収し、集団部落へ強制移住させ、反日武装組織との接触を断つために地元農民を囲い込む形で支配し

た」ようです。ある年代以上の日本人が言う「モンゴル」とは内モンゴルを指していることが読み取れます。

日本人の先生が農民の子弟を日本語で教育したんですね。ご両親は五〇年以上たつてまた日本人の私を目の前にして、日本語をしゃべる機会がごようとは思つてもみなかつたことだつたでしょう。私は恐縮の至りでした。その後も張先生のご一家は私を何度か家に招待してくれ、もてなしてくれました。

包頭師範学院のある老教授は「歴史を正しく認識している日本人には過去の罪はない、ただし歴史を否定する人は侵略者と同じ罪があります」と私に言いました。私はこの言葉を肝に銘じました。

張先生は私を教えたことから外国人に中国語を教えることに関心を持ち、その後正式に海外派遣中国語教師の資格をとつて、日本に行つてみたいという願望を抱いて試験を受けましたが、残念ながら日本はダメで、外モンゴルのウランバートル大学に赴任しました。そのうち張先生を日本へお迎えできたら、どんな

にいいことでしょうか。

張先生の中国語の授業は、二〇〇四年六月まで四年間続きました。

中国語の学習をはじめてから半年がたつてから、詩歌すなわち「漢詩」も加わりました。先生は三〇代の女性の李春莉先生です。彼女も日本語がわからないので中国語のみの授業でした。唐詩が主でしたが、詩経から孔子、老子、孟子、曹操また宋、元、明、清の小説に至るまで、その代表的なものを選んで教えてくれました。日本を出発する前に授業のカリキュラムをもらつてあつたので、中国漢詩名句辞典のようなものを数冊持つて行つたので、これにとでも助けられました。李先生の授業は二年ほど続きました。先生と一対一の授業でした。

中文系のクラスに所属

その後、包頭市に来てから三年目となるので、学校側から大学三年生の中文系（日本でいえば国文科）の

クラスに所属しませんかという話があつて、学生たちに混じつて「中国古代文学史」「現代文学史」などの授業を受けました。先生が今、教科書のどの辺りについて話をしているらしいとかは、なんとかわかりましたが、黒板の板書をノートに写す程度で、まあクラスのお客さんのようなものでした。日本に持ち帰つたノートが漢語、漢詩の分も合わせると一七冊ありますが、まあ我ながらよく学んだものだと感じします。

クラスメイトのなかに私の面倒を見てくれる男子学生が何人かいて、先生の書く黒板の字が読めなくて困っているときなど、教えてくれました。

日頃お世話になつている彼らを招待して桜ならぬ桃の木の下でお花見の会などをして、カレーライス・唐揚げ・炊き込みご飯・ハンバーグ・大学芋などを振る舞つて、とても喜ばれました。その中の一人、蘭建軍君は父親が胃がんになり手術を受けなければなりませんでしたが、お金がなく困り果てて、地元の新聞社に「誰かぼくにお金を貸してくれないか」と言う記事を

書いてもらいに行きました。が断られてしまいました。私を見るに見かねて、七万円の手術代を出してあげました。

中国の健康保険制度がどうなっているのか知りませんが、農民や自営業者の大半は、保険に加入していません。大学病院の玄関で、布団にくるまれりやカーに乗せられてやってくる病人を何度か見たことがあります。民間療法とか、祈祷師にお祈りしてもらったりして、いよいよになつてから、病院に来る人も少なくなっています。

蘭君のお父さんは無事退院の日、謝々(ありがたう)と言ってレストランで食事をご馳走してくれました。私が学校へ払った授業料は多分年間一五万円くらいだったと思います。これは一般学生とは違うドル建ての「外国人価格」でした。

日本語の授業

自分の勉強はこんな風に進んでいましたが、私には

日本語を教えるという仕事もありました。学院では「日本人の先生が来ています」ということで学校の内外から生徒を集めて日本語教室を始めました。日曜日の午前と夜間の各一回の週二回。使用した教科書は当時全国的に出回っていた『日中交流・標準日本語』です。

これは日本の光村図書と中国の人民教育出版社が共同で作ったもので、北京の中央テレビ局から放映されていた「テレビ日本語」で使われていたものです。一般人の中にはすでにかなり日本語を勉強している人もいました。スタートしたときには教室いっぱい五〇人くらいでしたが、挫折する人が多く、二年目には半減しました。

個人で日本語を習いたいという人がかなりいて、その人たちの勉強もみました。目的はいろいろで、学院の職員で日本語の初級能力テストに合格して自分をワンランクアップしたいという人、日本語の発音が好きだからという若い子、日本へ留学準備中の人、日本と取引のあるカシミア工場の事務員さんたちが会社の指

示で日本語を学習するというケース。中には日本へお嫁に行くという娘さん。「日本のどこへ行くの」と聞いたら「東京」と答えたので住所を聞いてみると埼玉梶寄居町と書いてありました。結婚紹介所の人の斡旋で話が決まったそうですが、大ざっぱな話のまま日本に送り出している様子がよくわかります。彼女はその後どうしているのか時々思い出します。

杜文軍さんという三〇代の弁護士さんが日本へ留学したいということで相談にきました。知り合いの静岡日本語教育センターの石原康彦先生がフフホトへ来てくれて面接をして「OK」になり、静岡へ来ました。日本で法科大学院を設立しようという時期だったので静岡の法科大学院の設立準備に中国人弁護士立場で協力したということもありました。

私の日常生活

当初、包頭に来たばかりのころは学生食堂で食事をしていました。厨房の青年やウエイトレスさん達と仲

良しになり、おかずをおまけしてもらったり、中国語の宿題を教えてもらったり、なにかとお世話になりました。そのうち電気釜を買って自炊をするようになりました。

食材は、学校の近くの路上のお店や、大きな青空市場などで買いました。顔見知りになると、私を見つけて、手招きして「今日はこれを買え」とか「あれを買え」とか勧めます。豚・牛などの肉は「頭丸ごと吊るしてあり、どの部分を何キロ欲しいかと聞き、切りそいで売ります。餃子の国ですから挽肉にしてくれますが、ほとんどはかたまりのまま買ってきます。家に持ち帰って一番にすることは肉を水道水でよく洗うこと。市場には蝇が多いですから。市場の隅に牛の頭が転がっていたのを見たときにはさすがに「キヤー！」と叫んでしまいました。

野菜・果物・穀類・鶏卵・調味料・香辛料など、食材は大変豊富で、市場の中はいつも人がごった返していました。トウモロコシの粉とか粟・稗などお粥の材

料なども見かけました。さすが食の国の台所です。商品はバックに入っているものはほとんどなく、客の求めに応じ、秤ではかって売買します。

鶏は、網で囲った柵の中で飼われていて、客が品定めして買います。首をはねてドラム缶の熱湯の中へつけ、手作りの脱水機の中へ入れて羽を抜き、あつと言う間に丸裸の鶏が一羽できあがりです。新鮮なものですからきつとおいしいでしょう。生きたまま買って自転車のハンドルに結び付けて帰宅する人も見かけます。

珍しいと思ったものは乾燥した葉タバコが売られていたことです。自分で刻んで紙に巻いて吸うそうです。市場には衣料・布団・鍋・釜など何でもあります。

私がひとりで買い物に行くので弁公室の朱麗さんが心配して、衣料や電化製品など高いものを買うときは必ず私といっしょに行きましようと言ってくれました。

外国人である私をごまかされて高く買わされているにちがいないと思つたようです。実際、そうだったかも

しれません。彼女の値切りっぷりは実にみごとで、ケシカをしてしているようですが、帰りは双方ともニコニコ。私もだんだん心得て来て、「とりあえず定価の半額から」交渉できるようになりました。

髪の毛は学生が連れて行つてくれたお店でカットしシャンプー付きで一五円。毎日でもいいような気分になりました。

ミネラルウォーターはどこで、お米はあの店で、クリーニングはここで、ビールはどこそここと馴染みの店ができ、みんなが親切に付き合ってくれました。店主は隣の店の人に私を紹介したりしてくれました。

五 包頭に静岡村？ 出現

寧夏回族自治区銀川市のこと

静岡市駿河区の岩崎勝行さんは元静岡市内の中学校の国語の先生でしたが、五〇歳で退職し自由な生活を楽しんでいました。私が中国語の勉強に包頭に来ないかと誘つたら、半年ほど考えた末、来ることに決めま

した。二〇〇一年夏休みに私が一時帰国し、包頭にもどる時に、すでに退職していた夫と岩崎さんの二人は私と一緒に来ることになりました。

夫のことをちよつと記しますと、静岡市内の中学校に勤務していた五五歳のとき、静岡日本語教育センターが開設した「日本語教師養成講座」の第一期生として入学し、夜間週二回、二年間日本語の教え方など全般を勉強しました。学費・費やす時間・覚えなければならぬことなど楽ではない二年間でしたが、受講生同士励ましあつて学び続け、全員何とか卒業しました。定年後外国で日本語の教師をしようなどと言う考えがあつてのことではありませんでしたが、結果こんなことになりました。

包頭に来てからは私と一緒に日本語を教えています。紹介してくれる人があつて二〇〇二年九月から寧夏回族自治区の区都銀川市の寧夏大学東洋語言学院日本語科で四年生を受け持つことになりました。夫は全く中国語がわかりませんが、事前に二人で下見に

行った時、日本語学科の学生たちはかなり日本語が達者だったので、私はこれなら単身赴任でも大丈夫と思えました。案の定、学生たちは親身になって「先生の世話をしてくれました。

銀川は包頭から南に四〇〇キロほどのところであり、包頭から蘭州へ行く包蘭鉄道の夜行列車で八時間かかります。

寧夏回族自治区は人口五三〇万人。回族（イスラム教を生活の中心としている人々）が三〇パーセントを占めています。

一一世紀に西夏王国を建設した李元昊ら歴代王の陵墓「西夏王陵」が銀川郊外にあります。この西夏王国は独自の西夏文字をもっていました。敦煌莫高窟の第一七窟から一九〇〇年に偶然西夏文字の経典が見つかり世界中に知れ渡りました。井上靖の小説『敦煌』に詳しく書かれています。お読みになった方もいらつしやるでしょう。映画にもなりましたね。

学校とは一年の契約でしたが、悪いことにその時期

中国全土を襲ったサーズのために大学では学生を二月早く「切り上げ卒業」させたので、夫は六月に包頭に帰ってきました。

夫の寧夏大学での生活は、本人の長い教師生活の中で一番充実した一年だったと言っています。

岩崎さんより一年遅れて静岡市駿河区の原川弘子さん（五〇代の家庭の主婦）が一年の予定で留学にやってきました。一時期には包頭師範学院の外国人棟に静岡人が四人住んでいました。

その後、岩崎さんは包頭鋼鉄学院の日本語の先生になり、原川さんは杭州大学へ移りました。私たち夫婦は英語科の学生の第二外国語である日本語を受け持しました。給料は初めのころは月二万円くらいでしたが、帰国のころは月五万円に上がりました。

六 サーズに遭遇

七上八下の学生たち

二〇〇三年春、中国国内でサーズが猛威をふるい、

学院内は大パニックとなりました。

サーズのことを中国では非典型肺炎（略称フェイデン）と言います。

内モンゴルは初期のころから発病者・死亡者共に全国第四位にランクされ、日本外務省は内モンゴルへの渡航に「十分注意」の勧告を出しました。

当初は「換気を頻繁に、室内の消毒を、体力作りをしよう」に始まり、次第に「外食禁止、タクシーに乗らない、知らない人との交流はダメ」から、とうとう「学生のいつさいの外出は禁止」されました。学校前の道路にバリケードを張り、外部と遮断しました。学院は全寮制ですので、仮に家が隣にあっても帰ることは許されません。私たちや職員・教員たちは学院が発行した出入証を持っていますから、バリケードの一角から出入りすることができました。

学生は一部屋八人で住んでいますが、同室者が違反すると連帯責任を負わされるということで、罰則が張り出されましたが、処分は外出禁止だけにとどまら

ず、バリケードを壊したとか、流言飛語を流した者などいくつかありました。すべて除籍処分にするという厳しいものでした。

一部屋に一個の体温計が配られ、随時検温するよう指示されました。一部屋四人で住んでいる高級宿舍もあります、ここは各部屋にテレビがあり、通常は夜七時半には電源が切られるのですが、この時は九時一五分まで延長されて、予防の知識などをよく見るように通達が出されました。

学生たちは、楽しみにしていた五月のゴールデンウィークの休暇も中止となり、意気消沈していました。

「七上八下（チーシャン パーシア）」は「気が動転して落ち着かない」状態を表す中国語ですが、大多数の学生は明日にも死ぬかも知れないと思い込み「恐怖で勉強が手につかない」状態でした。日本語の女性教師の高禊さんも「気がそぞろで、日本語がうまくしゃべれなくなっちゃった」と言っていました。

私たち外国人は当時六人いましたが、イギリス人の

おばあちゃん先生は、家族が心配しているからと早々に帰国しました。

私たち日本人は話し合って、「北京まで行って、その後飛行機に乗って帰るよりも、隔離された大学の中にいた方がむしろ安全だろう」ということになり、帰国するのをやめました。

サーズが病院内で感染した例が多いと発表されましたが、私にはなるほどと思うところがありました。

以前、目まいがして病院へ行った時のことです。医者さんが私を診察しているというのに、次の患者さんと数人の付添いさんがドヤドヤと入ってきて、みんな私を囲んで見ていました。胸を出していようがお構いなし。病人一人で来ているのは滅多になく、必ず付添い人が数人来ています

サーズは、学校関係者や知り合いなどに罹患した人はなく、大騒ぎのうちに七月ごろには下火になりました。

唾を吐く、手鼻をかむ、立小便をする、など衛生事

情がまだまだよくない土地柄ですから、今回のサーズを教訓にして、国家を上げて衛生問題に取り組んでほしいと切実に思いました。

七 新入生と卒業生

新入生の軍事訓練

九月の新学期になると、学生は内モンゴルの各地からやってきます。南京袋のような大きな飼料袋に衣類や生活用品を詰め込んで、ロシア国境近くから三日がかりで学校に到着する学生もいます。遠方の人は、年一度、春節（旧暦の正月）にだけ故郷へ帰ります。

新入生には一カ月の軍事訓練が義務づけられています。早朝六時から夕方七時まで、人民解放軍の教官の指導でひたすら行進の練習です。以前は校外へ出て実弾の射撃訓練もあったそうですが、今はだいぶ簡略化されたそうです。

学校は全寮制で、昼休みが三時間あるので、その間みんな死んだように昼寝をしています。昼寝の習慣は

学生だけでなく、子どもから大人まで一般的に中国人は昼寝をします。

学生に訓練の感想を聞いてみたら、「過酷な訓練を経て、困難に打ち勝つ自信が芽生えた」と言っていました。

どのクラスが美しく行進できたか競い合って、新入生のクラスの団結を強める意味もあるようです。

訓練終了の日、学生たちは教官にいろいろなプレゼントを渡したり、一緒に記念撮影をしたりして、お互いの労をねぎらっていました。

新入生たちは、



新入生の軍事訓練（2004年9月10日）

心も身体も充実し、希望に胸ふくらませて、さあやるぞ！ と気合が入っています。

大学は出たけれど

私が初めて学校に来た二〇〇〇年には学生寮は一樣に八人同室でしたが、帰国した〇五年にはテレビ付き四人部屋が出現し、金持ち組と貧困学生組で宿舍に差が付きました。

内モンゴルの大学生の三分の二は貧困学生といわれますが、自治区政府や学校からの奨学金が年々減額され、苦しい生活を強いられています。学生食堂で饅頭まんとうと漬物だけで食事を済ませる学生も見かけます。

一九八〇年代までは大学は国が許可した人だけ入学ができ、学費が免除されしかも少額ながら小遣いも支給されていて、就職も国が分配していました。今は自由で大学に入学ができるようになりましたが、学費は自前で調達しなければならず、大学生が増えたため、就職難の時代になりました。

ここは師範学院ですから文字通り学校の先生になるための学校ですが、学校の先生になるには自分で学校を捜し、その学校の幹部に賄賂を支払うそうです。私はクラスメートにお金を貸してあげたことがあります。初任給の一年分に匹敵する額でした。実際には学校へ就職しなかつたのでお金は不要になりました。学生たちは、つてを求めて少しでも良い条件の職場を捜し、ふるさとへ帰って行きました。

八 帰国

ビザの更新ができない

二〇〇四年三月、静岡市葵区の萩山三男さんが、静岡市日中友好協会の桂林旅行団の一行と共に中国に来て、そのまま包頭師範学院に、留学にやってきました。彼は一九九七年ごろ内モンゴルの首都フフホトに中国語の勉強に来ていたことがあり、いわば私の先輩にあたります。私と一緒に張金梅先生の中国語の授業を一時期受けました。彼はモンゴル語の歌が得意です。

私たちの滞在ビザは中国国家教育局発行のもので、
專家証という証書付きでした。

二〇〇五年七月、夏休みに一時日本へ帰国するにつ
いて、次年度のビザを発給してもらってから帰国した
いと考えて、許可の出るのを待っていました。が、な
なか返事が出ません。管轄地のフフホトに問い合わせ
てみたら、夫が七〇歳という高齢なので、今回は無理
という理由がわかりました。なるほどそれもそうです
ね。中国人にとって七〇歳はもうかなりの老齢です。
政府としては心配だということでしょう。

私たちはもつと長く包頭にいたいという思いはあり
ましたが、その時ちょうど清水から遊びに来ていた友
人の横山さんの帰国と併せて萩山さん共々、急遽帰国
することになりました。

五年間の滞在の間に、年に何回か日本へ帰国し、そ
の折に中国へ持って帰った本などは、かなりの量に
なっていました。

包頭市で知り合った日本語の通訳や日本語の教師、

日本語の学習者たちに声をかけ、ほしいものがあつた
ら持つていくように言いました。自転車・パソコン・
プリンターなども古いものはあげてきました。

ウイスキーが余っちゃった

夫は大のウイスキー党なので、日本の何人かの友人
たちに頼んで、定期的に四割のペットボトル入りのウ
イスキーを郵便局の船便で送ってもらっていました。

いつもウイスキーに囲まれていないと安心できない性
質ですが、悪いことに中国には中国製のウイスキーは
皆無の状態で、あるのは高級デパートで売っている
ジョニーウォーカーとかオールドパーとか高価な輸入
品ばかりです。彼の酒量からいって四日で一本終わっ
てしまいます。ですから万一日本からの荷物が遅れて
も困らないように、あの人この人に頼んであつて、こ
の時点で八本在庫がありました。

白酒（コウリヤンを主原料とした蒸留酒で中国を代
表するお酒）はアルコール度が五〇度以上で、ウイス

キーのように強いお酒ですが、趣味に合わないのか飲みませんでした。

中国人でウイスキーを日常飲む人はまずいないようです。捨てて帰るのももつたいないと思ひ、処分を弁公室の朱麗さんにまかせました。あのウイスキーはどうなったでしょうか。

さようなら包頭

英文科の四年生は、四月ころからもう授業はなく、就職活動のために故郷へ帰ってしまった人がほとんどでしたが、包頭市に残っていた人たちが、私たちの帰国を知って、いろいろとお土産を持ってお別れに来てくれました。

親しくしていた人たちも食事に誘ってくれ、連日さよならパーティが続きました。乾杯、乾杯とみんな涙を流して、さよならと言ってくれました。

もうおそらくこの世では会えないでしょうとお互いに思っていますから。

そんな中で、私の知人のそのまた知人で初めて会った方が、乾杯の盃をあげて「このような辺鄙な地で、中国人青年のために日本語を教えてくださいありがとうございます」と言いました」と誠に感動的な挨拶をしてくれました。彼は教育者でもなく、ごく平凡な市民です。

中国人のふところの深さを改めて感じました。

包頭市に滞在中、私がまわりのみんなからよくほめられたことは「六〇歳にもなって中国に来て、中国語を学習しようとする日本人の勤勉さはすばらしい」ということです。

私は、中国に対する好奇心から、またちよつとした気まぐれから来てみただけと思っていましたから、こんなほめられて面映ゆかったです。日本人として一つの役割を果たすことができたようで、ある種快感でもありました。

五年間過ごした包頭とあつけない別れとなりましたが、私はこの街で戦前・戦中の日本軍の侵略の事実を知ることになりました。

包頭市の東河地区には「小島司令部」という日本軍の駐屯地跡があります。これは当時の山西省軍閥の閻錫山の司令部を日本軍が接収して使用していたものです。駐屯地跡地が保存されていて石碑が建ててあり説明がついています。ここを通る人は否応なくこれを見ることとなります。

当時、日本軍が建てた劇場が今でも使われています。案内してくれた知人は、日本人が作った道路を指して、日本人は技術が高いと言っただけではありませんが、他に言いようがなかったからでしょう。

『内蒙古革命歴史書』を街の書店で見つけたので立ち読みをしていたら、「包頭の隣町薩拉齊さらかちというところにひとりの抗日ゲリラがいて、日本軍は彼に手を焼いていた。懸賞金をかけて村民に密告を促したが、誰一人これに応じる人はいなかった。しかしある日彼は捕えられ殺されてしまった。日本軍は彼の首を城壁の上にならし、村民への見せしめにした。村民はみな彼のために涙を流した」と書いてありました。

私はまったく偶然にこの事実を知りましたが、おそらく中国全土いたるところにこのような現実があったことでしょう。

また食堂で知り合ったひとりの学生は「先生とぼくが親しく話しているけど、こんなことは珍しいことですよ。ぼくらはみんな日本人は怖いと思っているんだから。今でも自分の家の子どもが困らせたりすると『日本人が来るぞ』と言うんです」と言いました。

市民のみなさんは、こんな事実を百も承知で、包頭での私の生活を支えてくれました。

まさに過去の歴史に顔をそむけることなく、事実を事実として正しく認識し、双方の草の根の市民同士が未来に向かって共に友好関係を発展させなければと思いつつ、包頭を後にしました。

この考え方や生活態度を生きている限り持ち続け、また若い人たちに伝え続けて行くつもりです。

私のつたない中国語が人々との交流に役立つことは予想以上の成果でした。

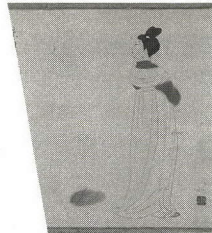
第三章 研究ノート

しずおかの女たち
第五集



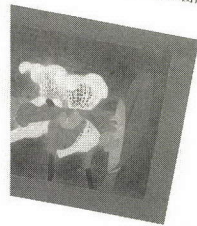
静岡女性史研究会

しずおかの女たち
第六集
特集 占領下の静岡



女性史研究会

しずおかの女たち
第七集
特集 戦後の静岡の女性団体



女性史研究会

記録 谷津カトリック教会

はじめに

静岡市葵区の安西橋を西に真つすぐ進み、新東名のガードを潜ると小さな集落がある。その谷津の山麓に、絵本の中に出てくる「おとぎの国の家」のような小さな教会があった。カトリックの信徒だけではなく、近隣の地域の人たちからも愛されていた寶石のような教会であった。教会の裏山には、教会と共に年輪を刻んできた杉と檜が聳えている。私は教会の前に立つと魂が洗われるような気持ちになり、教会の前のボードに書かれている言葉に救われていた。信者ではないけれど、ここに教会があることが嬉しく誇らしかった。

しかしこの教会が、二〇一二年五月二四日午前〇時

二五分頃、放火により全焼してしまった。

焼失したその昼間、焼け跡に黒焦げになったまま立っている柱を見た時は痛ましく何ともいえなかった。その後、焼けた残骸は綺麗に片付けられ空き地になってしまった。藁科川の堤防が決壊して谷津が水害に遭った時、教会は床上浸水に



谷津カトリック教会

尾崎 朝子

もならず無傷であった。約百年近く風雪に耐えてきた

教会であったのに。谷津地域の敬虔なクリスチャンたちが、心の抛りどころとして長い間守ってきたかかげのない教会であったことであろう。信者さんたちには、以前PTAや町内の役員でお世話になった方々も多い。同じ学区内の住民として、教会があったことを何か残さなくていいのだろうかという思いにずっと駆られていた。それに、義兄が新教の牧師であったことを考えると他人ごとではなかった。

時の経つのは早い。風化されてしまったら……。 「谷津にこのような教会があった、このような神父がいた、……人がいた」ということを残しておきたい。どんな小さなことでも、何か記録を残さなくてはと思いついた。

これは、女性史的に云々というよりも、約百年前に建てられた谷津カトリック教会（教会の文化庁への正式届出名称）のことを、教会を守ってこられた地元の人々の聞き書きなどを通して、事実を記録として残

そうとするものである。

一、教会が焼けてしまった

二〇一二年九月一六日の暑い日、谷津カトリック教会のことについて、信者である谷津の皆さんに、焼けた教会跡地でお話を伺った。教会跡地の敷地の一角には、ミサの時に使う雨よけのブルーシートや脚立が置かれてあった。

「焼けた日の前日と、その前日二日間、服織中学校の一年生が学区探訪で、五、六人のグループになりここに来たのです。全員で一三〇人くらいだったかしら。私たちはこの教会についての歴史など生徒たちに話したのです」

「焼けたときにはびっくりして……。涙がでてきましたね」

「炎が立って……。手のつけようがなくて……。悪夢を思い出したように話される。」

信者の皆さんは、第一と第三の日曜日にこの谷津カトリック教会ですつと神父様によりミサを続けてきた。今もこの場所で続けているという。

「私たちは、焼けた後も、建物のない更地のここで、日曜日の朝七時からミサに与るあずかんです」

「雨が降っていても、シートで雨をしのいだり傘を差したりして……やっています」

ブルーシートなどの隅を槓の木と脚立に縛りつけ屋根にしてその下でミサをするのだ。

「それぞれの家で持ち回りでミサをしてもいい、という話も出たのですが」

「やっぱりここがいいのよね」

三人は口を揃えた。

「焼けてしまうまで私たちはずうっと、皆で草取りをしたり、花を植えたり。男の人たちは外回りの木を切つて整えたりしていました。マリア様の周りを掃除した

り花を飾つたり。

教会の中を掃除機をかけたたり御聖堂を拭いたり……。

私たち信者は皆で力を合わせてずつと守つてきたんです」

「なにしろ、ここは私たちの心の拠り所だったので」

二、谷津カトリック教会の歴史

「百年のお祝いの記念行事を、どういう形でやるか皆でいろいろ考えていたところだったので」

地元の信者さんは話す。この教会は、あと七年で百年になるという教会であった。



谷津の皆さんとマリア像 (2012年9月)

焼け残ったというより、建物とは離れていて庭にあるので洞窟のルルドの MARIA 様は助かった。この洞窟は、一九九〇（平成二）年に地元の信者たちが葦科川から石や砂利を運んできて造ったものである。教会の裏の山際を静岡市ががけ崩れ防止の工事をしてくれることになり場所を移動することになったのだ。

「その時は、信者ではないけれど、西内さんは土台の基礎の部分を一生懸命に手伝ってくれました。MARIA 像本体は大切に移動されました。それが今の場所にある洞窟と MARIA 様です」この洞窟は同年一月八日に完成した。

移動する以前は、ルルドの MARIA 像の洞窟は山際にあった。それは一九三二年（昭和七）年



洞窟と MARIA 像（1932 年完成）

に完成している。『宣教再開百年誌』によると、昭和七年八月にホーリネス教会布教師であった東京の田名綱春蔵という人がカトリック教に帰正したいと願い、東海道筋の各教会を訪ねつつ静岡教会で帰正の目的を達し、谷津カトリック教会に居住しながら布教に従事していた。信者たちのかねてからの願いである洞窟構築の話聞いた彼は、庭園造築に心得があつたことから昭和七年八月に造築にかかり、神父をはじめ多くの人々の支援でようやく完成させたという。

この小さな教会「谷津カトリック教会」は一九一九（大正八）年に建てられたものである。

木造平屋建てで、正面の会堂（御聖堂）と玄関の、二段切妻作りになっていた。道路側から見える棟の、正面の高い方（二段目）の切り妻部分の屋根の先端には十字架がつけられていた。

外壁は柱形付南京下見という板張りになっていて、使用されている杉は風雨に晒され年輪が浮き出てい

た。窓枠は木製で引き違いになっており、ガラスがはめ込まれている窓であった。この窓ガラスは手作りのため歪んで見えた。建物の内部の天井は化粧ボードで、壁は化粧合板だ。御聖堂には畳が敷かれ広さは一七畳半である。その正面は板張りになっていて、奥の正面には一段高く祭壇が置かれていた。右手には香部屋等がある。御聖堂には戦争中に城内の静岡教会から疎開させた足踏みオルガンが現役で活躍していた。

郊外にこのような洋風の教会があるのは大変貴重である。「国土の歴史的景観に寄与している」として、この教会を国は一九九七（平成九）年、静岡県下で三番目の「登録有形文化財」として認定した。

(1) ドラエ神父と谷津カトリック教会

谷津カトリック教会は、ドラエ神父の尽力によって建てられた。ヘル・ドラエ神父は、信仰に固く神と人の前に正しく而も人間的な神父、これが四〇年の間、静岡県で働いた宣教師であり牧者である」と、ポーデユ

神父が著書『静岡県宣教師』のなかで語っているように、ドラエ神父の静岡県での活動は、枚挙にいとまがない。

ドラエ神父は、一八八四（明治一七）年九月二八日、フランスのブローニュに生まれた。一九〇九（明治四二）年九月二六日、司祭に叙階される。日本に来たのは叙階後間もなくの明治四二年四月三〇日、二五歳の時であった。ドラエ神父が東京八王子でメイラン司祭の助任司祭をしていた時、静岡の谷津出身の内野作蔵神父に出会っている。

その後群馬県の前橋教会に派遣された。そのころ胃癌のため病床にあったクレマン神父の看病とその代理を



ドラエ神父

務めるために、一九一四（大正三）年七月、静岡にやってきました。しかしクレマン神父は介護のかいもなく亡くなった。クレマン神父の後任にドラエ神父が任命されたため、ドラエ神父はそれまでの任地であった前橋に戻り、荷物を纏めて静岡に着任した。ドラエ神父は三〇歳の青年司祭であった。静岡教会は、ル・マレシャル神父、バレー神父、クレマン神父と、わずか二年余りの間に三人の主任司祭を病気により失った。静岡教会の信者たちは、神父の相次ぐ交代を経験したので若いドラエ神父の着任を非常に喜んだ。

ドラエ神父は、静岡教会の司祭をしながらパリ外国宣教会静岡地区長として、静岡を中心に浜松、藤枝、沼津の四教会を巡回し、短期間ではあるが神山復生病院長も兼任した。更にサンモール静岡修道院付司祭の役、他、不二高等女学校の女学生たちの要理指導の勤めもあった。着任直後のドラエ神父は、信者の信仰を強め共同体としての繋がりや強めてからでないと不信者への福音宣教に本格的に取り組むことはできないと

考え、まず活動のすべてを信者の方に向けた。その後、ドラエ神父は谷津に通い始めた。一九一七（大正六）年頃のことであった。

なぜドラエ神父は谷津にきたのだろうか？

前述したが、ドラエ神父は、八王子で谷津出身の内野作蔵神父と出会い、そこで内野神父の実家のある静岡谷津地区の改宗を依頼されていた。内野神父は以前八王子で一緒だったクレマン神父に、もし静岡に赴いたならばその時は、自分の故郷の谷津の一族の改宗のために尽力してほしいと頼んだのであったが、クレマン神父の病死などでそのことは実を結ばなかった。ドラエ神父は、友人の内野神父に頼まれたことを忘れずに、静岡の駅から谷津の村に足を運んだ。谷津村にいる内野神父の家族を訪問したときは快く迎えられた。内野神父の老いた母親、内野きみは非常に正直な人で、沢山な母親であったという。三男の内野神父のように、内野家の人々は家族全員が信頼と親愛の情を人々に与

える人たちであった。ドラエ神父は谷津で布教を始めた。

なかなか改宗しない谷津の人々

内野家の人々は（本当の日本人であり本当の百姓）であつたと、ポーデユ神父は書いている。ドラエ神父は静岡教会から二里半の道を、徒歩または自転車一年以上谷津まで通つて布教していた。しかしなかなか谷津地域の人々は改宗せず何の進展もないままであつた。そこでドラエ神父は、時々神父のところを訪問し、受洗を希望しているように見えた谷津の望月久次郎に強い口調で言つた。

「谷津はもう、うんざりしたよ、久次郎さん。あんたは信者になるといつてから一年以上にもなるじゃないか。いざ研究しようとなると決心がくずれてしまうのだ。今日から何日か以内に要理の研究会の日をきめなければ、私はもう貴方がたに会わんと皆に告げてくれ！ 若しあんたの方が自分を救おうとしないなら、私

は何もできないんだから」

望月久次郎はこのことを谷津の皆に告げた。神父の言葉に谷津の人々は決心を固め、洗礼を希望する人たちは一週間ごとに夜、要理研究の会合をもつことを希望した。森田伝教士も要理研究のための会合に谷津に来てくれることになつた。こうして要理研究は二年間続いた。中には読み書きの不得意な人たちもおり、森田伝教士は谷津に出かけるたびに夜遅く帰つてくることが多かつた。

一九一九（大正八）年二月、ドラエ神父の努力の甲斐があつて、皆は無事試験に通過することができた。

教会の土地は平の家の物？

神父はまた久次郎に話しかけた。

「素敵だ、お目出とう。……私が教会を建てるのを喜んで手伝つてくれますか？ 土地を私に探してくれな
いか？ 建築のほうは私が引き受けるから」

ドラエ神父は、試験に通過した彼らの信仰をより強

いものとするために、谷津に教会を建てることを提案し土地を探してくれるよう久次郎たちに求めた。律儀な久次郎たちを、これほど嬉しがらせることはなかった。彼らは神父の求めた土地を手に入れた。

※このとき望月久次郎さんは、谷津の地元の人に相談したのでしょね。現在の教会の隣に住む内野さんの「平の家」(今では山の上から降りて住んでおられる)は、教会の周り一帯の土地をもっていたのよね。だから、平の家が寄付したんでしょね。教会の土地はL字型になっているけど……。 「平の家」の一部が教会になってね。教会の隣のこの「平の家」が、内野作蔵神父様の出た家なのよ。谷津の村人が、お金を集めて土地代を内野家に支払ったのかそのところはわからないけど。内野徳次郎さんの弟がパウロ内野(作蔵)神父様。そして徳次郎さんの息子が内野銀一さんで、その娘さんが今九四歳でご健在の石上雪江さん(当時、内野雪江)なの。

当時、この教会の裏の山の上に三軒家があつて(今の内野剛宅と西内浩之宅とあと一軒は消息不明)、今でもこの教会の裏の山側の上つてゆく道があるんですよ。(二〇一三年・望月さん談)

小さな聖堂「勸善聖母教会」・谷津教会

ドラエ神父の求めに応じて谷津の人々が入手した「平の家」の土地に、彼は小さな聖堂を建てた。そして「勸善聖母教会」と名付けた。聖堂が完成した一九一九(大正八)年四月二〇



完成した谷津教会 (大正8年)

日に、谷津の人々三二名は静岡教会で受洗した。このとき神父は幼児にも数名洗礼を授けた。

※このとき、内野作蔵神父を叔父にもつ望月あき（当時、内野あき）さんは八歳で、石上雪江（当時、内野雪江）さんは、生後八カ月で受洗している。雪江さんの両親内野銀一・よし夫婦が長女の雪江さんをも受洗させたのだろう。『宣教再開百年誌』の「写真で見ると静岡教会のあゆみ」一七頁の写真に、ドラエ神父に抱かれて写っている赤ちゃんがいる。雪江さんの娘の石上博子さんは言う。「あきおばさんが八歳の時、母は八か月だったというので、抱かれているのは母だと思います」

谷津には三二名の信者が出来た。この年の一月十五日にはこの聖堂の献堂式がレイ大司教の手によって行われ、同時に信者たちは堅信式を受けた。

ドラエ神父清水教会へ

ドラエ神父はこの田舎の谷津カトリック教会を、若い神父さんたちを大勢育てる場ともした。萩間の若い神学生は子どもたちの面倒を見ながら休暇を谷津で過ごしている。ドラエ神父は、一九三一（昭和六）年、ジロディア神父に、三三（昭和八）年にはリビング神父にその次にはウタン神父に谷津を依頼した。

一九三三（昭和八）年からドラエ神父は清水教会主任司祭となり、戦時中は清水教会にいた。

昭和一六年、ドラエ神父は、東京・三河島で五〇人を越える養護施設の子供たちの命を案じ、疎開先を求め奔走しているレテツィア・ベリアッティに「狭い所です。良ければ子供たちのために開放しましょう」と、清水教会の信者たちが集会所に用いている部屋を提供した。

戦時中のことは、『静岡県宣教史』の第三章、「第一次大戦から第二次大戦まで」に書かれていて、一九四四（昭和一九）年、ボーデユ神父が見た静岡大

火の当時の様子や、体が丈夫でなかったドラエ神父のことなど次のように書かれている。(一五四・一五五頁)

クリスマスの翌日神父は尿毒症の病に倒れた。獄を出たウタン神父やサン・モールの長、サンユー・ヂエーヌの見舞いを受けたり、デヴィス神父に一週間の看病を受けたりした。復活祭が来たが神父は起きられなかった。間もなく東京から全ヨーロッパ人をより嚴重に監視せよとの命令が来た。ウタン、ドラエ両神父は岐阜県の多治見に還送されることになった。ドラエ神父は、健康上の理由で神山(御殿場)に送られることを希望して、多治見への取り消し命令を待っていた。だが、アメリカ空軍は、静岡は一五時間以内に廃滅させると布告した。六月二〇日静岡の町が藁のように燃え上がるのを見た。静岡の次は清水。夜中から翌朝の三時にかけて焼夷弾の雨が降った。

その頃谷津教会は、市民に開放され静岡の町で被災した人々が寝起きする場所として提供されていた。

それから谷津教会にはデヴィス神父が来て、そしてまた若い神父たちが谷津に派遣された。ソービオン、ボーデュ、ボドーの若い神父たちはみなこの僻地(谷津)に赴くのを楽しみにしていたという。

通行料を取った安西橋、ドラエ神父が奔走し無料に

後述するが、九五歳の石上雪江さんが、静岡教会への行き来するとき「安西橋で(ハシバ)を渡したような……」と話された。

『宣教再開百年誌』の中に、昭和五八年六月一日、カトリック静岡教会信者会館にて行われた(ドラエ神父様・ウタン神父様時代)の思い出を語る座談会の様子が掲載されている(四三九頁)。そこで、山内八重子さんは次のように話されている。

ドラエ神父様は晩年、神父様がお建てになった

と聞く谷津教会にお移りになりました。私の家は安倍川の土手の傍で、私は胸の病気で離れにひとりでしたのですが、時々寄つて下さいました。谷津から安西橋を渡つていらつしやるんです。昔安西橋は木の橋で、お金をとつて渡す橋だったんですが神父様は、当時三崎さん（宮崎・尾崎・野崎）と言われていた市の有力者の方達に頼んで廻つて、現今のような橋になったと話して下さいました。神父様は静岡市にとつても、そういう方面まで素晴らしいことをして下さいました。

当時、森田伝教士（カテキスタ）の働きがあつてその谷津カトリック教会である。そのカトリック教会に尽力した森田伝教士の息子さんの森田氏も座談会でそのことに言及している。

はじめてね、あの橋を無料にさせたんです。谷津の人たちは静岡に出てくるのにお金をとられ

る。それを熱心にかけ合つて無料にさせたんで、その事が谷津に教会を建てるとき、大きな力になつたんです。ドラエ神父様は事業家のところもおありでしたね。

大正三年発行の『安倍郡誌』（六六二頁）には、安西橋は藁科橋とあり、橋銭を徴収していた。谷津地区の人々は静岡の教会に行くたびに往復徴収されていたのである。『安倍郡誌』には、その額は記載されていないので金額は解らない。

『静岡県宣教史』によるとドラエ神父は「谷津の人々が貧しいことを知っているので、行政に掛け合つた」というのだつた。

ある日ドラエ神父は、森田伝教士と親交のあつた石原氏（佐々木）という県の役人に「通行税を廃止して安倍川に丈夫な橋を一本架けたら」と言うだろうと言つた。役人の石原氏は、ドラエ神父の名を先に明記して請願書を作成し、これを知事に届けて県の予算で橋を架けようと

いうのである。安西橋で橋銭を徴収している会社の社長は県会議員でボーイスカウトの長をしている寛大な人であった。そこで橋銭を廃止してくれた。しかし橋は、木の橋でたびたび流されていたので、今度は鉄筋コンクリートの橋をと、もう一度ドラエ神父の名を先頭に立て、再度請願運動を起こした。橋は最初、火急を要する修繕だけであったが、二年目には橋の半分が鉄筋で固められた。橋はあとになって完成したと『静岡県宣教史』（二三八頁）にある。

ドラエ神父のお蔭で、橋が立派になり川の西側の地域も発展することができ、谷津の信者たちも経済的に助かった訳である。

因みに南藁科の「牧ヶ谷橋」は私設の銭とり橋で、昭和一二年まで往復で金一銭を取っていた。産女の牧野そでさんが賃取の仕事をしていた記録もある。^(注3)

(注1) 『静岡県宣教史』

(注2) 役人石原氏とは、『静岡県宣教史』によると、磊落な資産家で社会福祉に興味を寄せていて、キ

リスト教徒になりたい人であった。後にドラエ神父が清水教会にいた時、死の数週間前にドラエ神父から受洗した人である。県の役人で石原氏とあるので、県知事の石原健三氏かと調べたが、明治四三年に就任、四四年転任しているので違う。ドラエ神父が清水教会に赴任していた一九三三年から一九五五年までの間の受信台帳で石原氏を調べると解るだろうか。ドラエ神父とともに安西橋の無料化に尽力してくださった奇特な石原氏。

(注3) 『日本地理風俗体系』新光社。掲載されている写真から牧野そでさんと解った。

ドラエ神父の眠る、カトリック静岡霊園（谷津）

ドラエ神父は、一九五〇（昭和二五）年四月より伊東教会に赴任した。健康を害していた七一歳のドラエ神父は、一九五五（昭和三〇）年からパリ外国宣教会静岡支部で静養する。その後谷津に行く。

静岡県下で四〇年にわたり、宣教などの仕事に不屈の精神で大きな功績を残されたドラエ神父は、

一九五七（昭和三二）年二月八日、谷津教会で帰天された。最後の時は、谷津の信者さんたち一人／＼皆と握手をして亡くなられたという。行年七三であった。（ドラエ神父の谷津での最後の様子は後頁で、地元の人々からの聞き書きなどで記す）

大正初期から昭和の動乱期にかけて、静岡県下の教会を司牧し、宣教に身を捧げ尽くしたドラエ神父を悼み、静岡教会では一月一〇日に葬儀ミサと告別式を行なった。



晩年のドラエ神父
（谷津教会にて）

谷津教会で亡くなったドラエ神父の墓地は、谷津教

会の裏山の丘陵にある。そこは、藁科川や小瀬戸の山々や「木枯らしの森」方面を望める

広々したところで、墓碑は南に向けて建立されている。ここは、それまでであった沓谷霊園が手狭になり、信者たちから新しいカトリック墓地の開設をしてほしいとの要望があり造られた墓地である。『宣教再開百年誌』によると、墓地の件について昭和五五年二月二三日の教会委員会で、ルノー神父より説明があり、谷津カトリック教会の裏山の土地を入手し墓地に造成するということで

地主や市役所との交渉が始められていた。昭和五七年七月に用地が購入され、谷津墓地準備委員会（委員長・太田資秋、副委員長・鈴木



ドラエ神父の墓（谷津・2013年5月）

木茂、会計・小沢幸至）が発足した。そして昭和五八年一月一〇日、起工式が行われ、四月二四日、祝別式が行われた。

(2) パウロ・内野作蔵神父のこと

カトリックの良寛さん（一八七六〜一九六〇）

谷津カトリック教会を語るときに、絶対外せない神父は、前述したフランス人のドラエ神父と地元谷津の「平」出身で、主に関東地方で活躍した内野作蔵神父である。この二人がいなかったら谷津の教会はなかったのではないだろうか。利他の精神で活躍された内野作蔵神父のことを調べてみた。（谷津教会は村越氏と森田氏の非聖職者の使徒的貢献にも多くを負っているが……）

内野作蔵神父は、活躍の場が県外であったせいか、静岡には資料もなく解らないことが多かった。休暇の時に谷津に帰ってきたことぐらいである。

『日本人物情報体系』（二〇〇二年）には、内野神父

が二〇歳で役場の助役になったとも記されていて興味深い。ここに多く書かれているのでその中の「内野師の項」（五六七頁・五六八頁）を抜粋して次に記す。

（前文略）東京大森教会の主任司祭の志村辰彌師が内野作蔵神父のことを「内野師のその生活と容貌を見れば、極めて厳しい隠修士のように思われるが、膝つき合わせて話してみると、まことに愛情とユーモアに富んだ好々爺であった。それで誰かが「カトリックの良寛さん」と呼んだ」と描いている。

内野教区長は、村の神童と呼ばれるくらい利口な子であったので早くから禅寺に預けられてそこで読み書きを習った。その寺子屋を卒業すると村役場に勤め、二〇歳で助役になった。

その後間もなく上京、八王子教会でメイラン神父と会って、カトリックを知ったのが三〇歳の時であった。その頃は出版事業に従事し、八王子を

中心に松本、上田方面にまで出張して、かなりの生活をしていた。

メイラン神父についてカトリック要理を学んだが、仏教とキリスト教の人生観などについて、夜中までメイラン神父と議論していた。一年後、同神父から洗礼を受けてパウロと名付けられた。そしてすぐに司祭になりたいと申し出たが、メイラン神父は内野青年が年を取りすぎていることや、世間でぜいたくな生活をしていたことを案じて、しばらく自分の下において様子を見ることにした。内野青年は深い謙遜をもって一年間奴隷のようには教会の雑務に動き回り、ようやく許されて築地の神学校に入学した。

内野神学生は毎年クリスマスに郷里のミカンをつるまうことにしていた。しかしある年のクリスマスのこと、どうしたわけか、ご馳走の仕度も整って、一同が食卓についたばかりになっただけでも荷物がない。まかないのじいさんはもうあきらめ

て「今年はミカンなしでがまんしてもらいましょう」と言った。しかし内野神学生はどうしても承知できない。「あれほど神さまにお願いしたのだから聞き届けられない筈はない」と、他の神学生と二人で暗くなつてからも門に立ち続けていた。すると、食事の鐘が鳴る少し前、荷物が無事に着いて、みんなに喜ばれたという。

こうして、ラテン語、フランス語、哲学、神学を勉強すること一二年、司祭になつたのが大正一〇年六月二十九日、満四五歳の時であつた。

大正一二年、師は前橋教会の主任司祭となつた。当時の前橋教会は古い民家であり、その一室に聖堂があつた。師はさつそく、教会のまわりに塀をつくろうと計画し、その費用は一〇カ月間、ご飯に塩をかけて食べることによつて出たという。こうしてさらに一〇年後には、今日見るようなゴシック式のりっぱな聖堂が完成した。

神父はあまり体が丈夫でなかつたので、心身を

鍛えるため、毎朝水を浴びたり、朝晩室内体操をしたりした。これは師の晩年まで続いた。また内臓を強めるために背中じゅうに灸をしていた。

(中略)

昭和一五年、初代浦和教区長ルブラン師の後を継いで教区長に就任し、昭和三二年辞任するまでの一七年間、浦和教区へフランシスコ会、パリエ国宣教会、イエズス・マリアの聖心会、マリアの宣教者フランシスコ修道女会、ベタニア邦人姉妹会、お告げの聖フランシスコ会、トラピスト修道



内野作蔵神父

女会などを迎えて教区の発展に力を尽くした。

(中略)

師は年をとつてからも人のために役立とうという夢を持ち続けた。「人間はたえず夢を持たなくちゃいかん」とよく人に言っていた。戦後、埼玉県の東松山にある空軍基地の払い下げを受けて、そこに戦争被害者や引き上げ家族を入植させて、カトリックの開拓村を建設しようとした。この事業は順調に進んでいたが、適当な協力者がいなかったのいろいろな困難が出て来て、理想を実現することができなかった。

晩年には平和な社会を建設しようと三V運動を起こした。三Vとは、ラテン語のVita(生活) Veritas(真実) Virtus(徳)の頭文字を取ったものである。平和な社会をつくるには生活の安定を確保し、真実と徳を身につけなければならないという意味である。師はこの理想の実現のため、有名な実業家や政治家の協力を得て、会員をつく

り、資金を集め、まず事業の手はじめとして、生活に困っている人びとを助けるようにした。

ところが昭和三二年、師が病気で倒れて浦和司教を辞任してからは、その運動も自然立ち消えになった。そのほか師にはカトリック総合大学、文化センター、修道院を中心とする文化村などの開設など、たくさんの夢があつたが、いずれも計画性のある協力者を得ずにその夢は実現しなかつた。

師は多忙の中にも和歌をよみ俳句をつくつて自分を「狂駆長」と自称した。それは人や金の問題で、気狂いのように走り回らねばならぬ自分の任務をもじつたことばであつた。

昭和三二年、師が教区長を辞任する正月に友人から「今年はおいくつになられました？」と尋ねられると「ちようど一八になつたところです」とまじめな顔で答えた。それは八一をさかさまに読んだ数である。こうしたシャレを交えて「ぼくは

万年青年だよ」と心は若さに溢れていた。(中略)

そして昭和三五年(一九六〇年)一月一六日の正午過ぎ脳溢血のため八四歳で小金井の桜町病院で逝去した。

内野作蔵神父は、一八七六(明治九)年、「安倍郡富厚里村外六ヶ村大字小瀬戸小字谷津」(現、静岡市葵区谷津)に生まれる。

三〇歳でカトリックを知り、八王子でメイラン神父から受洗する。八王子では八歳年下のドラエ神父と出会っている。その後神学校に入る。

一九二一(大正一〇)年六月二九日、四五歳で司祭に叙階。一九二三年(大正一二)年、前橋教会に赴任し、境町に二カ月に一度くらい巡回ミサに行く。

一九二七(昭和二)年、出版社の社長をしていて『カトリック思想史』を二〇月五日に出版する。

一九二八(昭和三)年に前橋教会を創設する。そして東京教区設立に伴い一九三八(昭和一三)年一月、

三二年間主任司祭であったシエレル師が保土ヶ谷教会に転任した後、後任として初めての邦人司祭として神田教会の第七代主任司祭に着任。

一九四〇（昭和一五）年一〇月、A・ルブラン師の辞任により第二代浦和教区（知牧区）長に就任した。五四歳。（※戦前・戦中の時期、キリスト教と欧米人に対する厳しさが増し、外国人司教が教区長を続けられない事情の中で、教区長となった日本人司祭が複数おられ、内野師もその一人です。林神父談）

一九四五年八月二二日、一八日に横浜市の保土ヶ谷教会で射殺された聖職者戸田帯刀の葬儀を浦和教区長として営む。

一九五七（昭和三二）年、教区長を辞任、七一歳。

その後文化放送理事などを務めた。

教区長在任中は、栃木、鹿沼、鳥山、日光、佐野、下館、土浦、川口、高崎、矢板、行田などに教会を設立した。また、宣教活動のため、イエズス・マリアの聖心会（茨城地区）、フランシスコ会（群馬地区）、パ

リ外国宣教会を同教区に誘致している。

一九六〇（昭和三五）年一月一六日、東京都小金井市桜町病院にて死去。浦和教会にて葬儀が行われた。

墓地は、埼玉

玉県川越市

の川越教会

より一五分

位のところ

のカトリック

とプロテ

スタント共同の霊園にある。



内野作蔵神父の墓（川越市・2006年）青島祥介氏撮影

三、聞き取り・記述など

「谷津には聖者がいた」と、ドラエ神父が言った！

二〇一三年六月一六日の朝、ミサに参加させていた。信者さんに「教会が焼けてからちようど一年後の五月二四日に、小さなプレハブ住宅を建てていたのだ」と伺っていた。その薄鼠色のプレハブは小雨

の降る中に建っていた。朝七時前、信者の男性たちが雨に濡れながら、水が溜まっている入り口の前に、四角い重い石を運び足場を整えていた。ミサの後、森川征夫ゆきおさんにお話を伺えた。森川さんは、以前小学校のPTA会長を務めた方だ。

「私の先祖は、当時から信者として森川家は代々続いています。昔の資料にも『森川』のことが出ていますよ」

数時間後、この日は県知事選挙でもあったので、小学校に選挙にきたその足で森川征夫さんは私の家に寄ってくださった。書物のコピーと谷津カトリック教会の写真や平成九年に谷津カトリック教会が国の文化財に登録されたときの文献などを持参してくださった。「ここですよ」と森川さんが提示したのは『Missions-Étrangères de Paris 静岡県宣教史』（創造社、一九六五）のコピー一三七頁であり「森川さん」のことが次のように掲載されていた。

ドラエ神父自身が一生を終る為に谷津に赴いたが、彼は彼の善良な子供達から自分の伝えた信仰にいつまでも忠実でいてくれるとの約束を得ることが出来た。漸次谷津は熱意を取り戻した。即ち男たちは妻を改宗させ、結婚は秩序を回復した。

一七〇名から一八〇名のこの小村には五〇名ばかりのクリスト教徒がいたが、信者の子供たちは殆ど男子で彼等はよくがんばっていた。ドラエ神父は彼の追想の中で谷津には聖者がいたと感動をこめて語った。森川氏（注一）のことを、一般の人は若し信者が皆彼のようなならば自分たちも改宗せねばならないだろうと言った。早くみまかった森川氏の妹も、又望月久治郎（注二）とその息子も立派だった。神父は決して嘘をいつたのではない。（傍線筆者）

森川征夫さんは話されました。

「祖父は森川孝平で、子どもは大正三年生まれの長男

祐次と次男^{しゅくろう}叔郎で私は叔郎の子です。おじいさんの孝平は熱心な信者だったので、大祝日にはリヤカーを引いて谷津の皆を乗せて、安西橋を渡って静岡教会に行っていました」

(注1) この「森川氏」というのは、私(森川征夫さん)の祖父です。おじいさんは一生懸命まじめにやっていたんでしょね。

(注2) 望月忠雄さんの曾祖父で、その息子は孝太郎。久治郎は久次郎。

谷津カトリック教会のこと

森川 征夫さん

谷津カトリック教会は、平成二四年五月二四日未明不審火により全焼しました。

思い起こせば、私が小学校の時に初めて親に連れられて行ったような記憶があります。まだ小学校の低学年の時ですから教会は非常に大きく感じました。小学校時代は、ソービオン神父様が毎週土曜日に教会に来

て日曜日の朝ミサをして、各家庭を順番に回り朝食を食べ談笑することにより信者との親交を深めました。神父様は、私たち子どもを集めて色々の遊びをして下さいました。

当時、外国人(フランス人)は珍しく、興味深く子どもが集まってきました。特に神父様は二八インチの大きな自転車で谷津まで来ました。子どもを自転車のハンドルの上、荷台の上はもちろん肩にまで乗せて走ってくれました。神父様はまだ日本に来たばかりで日本語をよく話せませんでした。子どもたちは方言で話すので谷津の方言を使うことが多くなりました。

信者の家庭の子どもたちは、神父様と一緒に来ていた神学校の学生さんが要理(神の教え)をスライド写真を使って私たち信者の子どもに判るように教えてくれました。たぶん小学校の高学年と思いますが要理の成果を確認する口答試験に勉強の甲斐あつて合格し受洗しました。

その当時は、フランス人の神父様は静岡市内のパリ

ミッション会において各地に配属される間、谷津の教会にミサを授けるために土曜日から日曜日来ていまし



パリミッション会司祭 (1953年)。前列左よりボドー、ラネール、ボーデュ、スパルフィル、J・ジャック、シャプイー、マラン、クリエ。後列左よりグラング、ランドル、バルビー、ボンブレッド、アンシェン、デヴィス、ラード、ジャシェ、A・ジャック、フォール、プレス、スワールの各神父

た。大勢の神父様が谷津に見えられました。たしか、私が小学校の五年か六年生の頃だったと思います。一二月のクリスマスMASの贈り物を何かしようと皆で話し合いました。当時は昭和二五年〜二六年頃で日本も終戦後の復興の最中で何もない時でしたので薪を拾って町の人に使って貰うことになり、山でリヤカー一杯の薪を拾って神父様に連れられて町の方に使っていただけ感謝された思い出があります。

信者の家に嫁にきた、若い奥さん方も神について学ぶ要理勉強のために月二、三回は夜教会に行っていました。勉強の成果を試す口答試験に合格し受洗したのが母親であり私と同世代の母親たちです。どの家庭も熱心なカトリック信者でその子どもたちも毎週教会に行つてミサに授かりました。

信者の心の拠り所である教会は、今から約百年前ドラエ神父様が建てたものです。神父様が八王子で助任司祭をされていた時に、谷津出身の内野作蔵という神学生に出会ったのが始まりです。内野作蔵青年は学校

の休暇には谷津に帰って一族の人たちに布教を始めました。静岡教会の事情もあり布教は進みませんでした。やがて、静岡教会に着任したドラエ神父様は八王子時代より友人である内野青年の家を谷津に訪問し快く迎えられる布教を始めました。

大正の初め頃の谷津は寒村でカトリックとは無縁の土地であったので、布教は大正六年から八年まで二年間続きました。布教活動として毎週、夜に要理研究を行い、森田伝教士の努力が報われ、大正八年二月に試験が行われ全員（三二名）が合格しました。

ドラエ神父様は谷津の人たちの信仰をより強いものとするため、谷津に教会を建てることを決心しました。谷津に小さな聖堂を建て「勸善聖母教会」と名付け、完成しました。大正八年四月二〇日に谷津の人々三二名は静岡教会で受洗しました。この年の十一月一日に聖堂の献堂式がレイ大司教の手で行われました。その後、昭和八年にルルドのマリアと洞窟が完成しました。

以来、谷津カトリック教会は信者の心のよりどころとして信仰を強めてきました。戦前戦後を通して一時、神父への制限もあり、谷津カトリック教会も厳しい時代がありました。が、デヴィス神父様が静岡教会に着任したことにより再び復興しました。当時子どもだった人たちが子どもの親となり教会の中心的な役割を担い信仰が高まりました。

昭和二三年頃は私が小学校に入学した年で何も判らず教会に行つたことを思い出します。

昭和三〇年頃、谷津カトリック教会を建設したドラエ神父様が、教会の脇にあった施設で静養を始めました。直接ドラエ神父様にお会いしたのはこの頃だと思います。白い髭の神父様で神々しい神父様だと感じました。約二年間静養し、情熱をかけて谷津の人たちをカトリック信者に導きました。この地をこよなく愛して帰天したことは本望だったと思います。昭和三二年一月一日にドラエ神父様のミサを行い谷津カトリック教会墓地に埋葬されました。昭和五二年二月

一二日に、ドラエ神父様の追悼ミサ（死後二〇年）が行われ新しい墓地に遺骨を移す作業に立ち会いました。その時、頭髮・メガネ等の遺留品が出てきました。それらを綺麗に洗って係の人に渡しました。

その後、昭和五八年四月二四日、カトリック静岡霊園が谷津の地に完成しました。その一角にドラエ神父様の墓地がありいつも花が手向けられ静かに眠っています。

ドラエ神父様の建てた谷津カトリック教会は、平成九年三月二一日に国の文化財保護審議会において全国で五二件（累計二三六件）の文化財建造物の登録について文部大臣に答申が行われ静岡県で登録されました。

名称 日本カトリック教会谷津巡回教会

年代 大正年間

形式 木造平屋建 棧瓦葺 面積八〇㎡

概要 丘陵の麓に建つ小規模な教会 カトリック

の地方伝道を知る上で注目される教会

谷津地区は中山間地区で人口も減少して、信者数も

減り、毎月第一日曜と第三日曜に静岡教会から神父様がミサを授けにきております。藁科地区ではどなたでも谷津カトリック教会のことは知っております。毎年、服織中学校の新一年生は、施設見学に来ていました。

皆に愛されていた谷津カトリック教会が昨年の五月に全焼しました。本当に貴重な建造物で残念です。谷津信者一同は、教会は焼失しても信仰は強く持ち続けてまいります。今年六月に教会（聖堂）が完成しました。これも皆様方のご協力のおかげです。本当にありがとうございます。（二〇一三年七月）

戦地の夫の無事を毎日祈り……

石上雪江さん（大正七年九月一五日生）

石上雪江さんは『宣教再開百年誌』に〈思い出〉というタイトルで次のように書かれている。（四〇七頁、四〇八頁）

教会の百年祭という大切な行事に、私の小さい



大正8年。ドラエ神父に抱かれている赤ちゃんが石上雪江さん（8ヶ月）。

頃の思い出を綴らせていただきます。私は信者と
は名のみのはしくれでございますが、洗礼は幼児
洗礼でございます。大正八年四月二十日（御復活）
に、当事の谷津信者全員と一緒に、ドライエー神
父様から洗礼を授けていただいたと聞かされてお
ります。当時私は生後八カ月で、その時のひとり
でございます。長いおひげでイエズス様によく似

た神父様な
に、田舎の子
供の私は、怖
くて仕方があ
りませんでした。
た。神父様は
谷津の教会
で、信者一人
一人に最後の
お別れの握手
をなさって、

永眠なさいました。そして今も教会の墓地で皆様
を見守って下さることを信じます。また、私達が
小学校の頃は、要理の勉強に追手町教会から谷津
教会まで、約十キロのこぼこ道を泊りがけで
通つてくださった森田東一郎先生を忘れることは
できません。男女七人位の子供たちでした。日曜
日の朝は、信者が集まるのを待つて、集まった時
点で朝の祈りが始まるのでした。森田先生の歯切
れの良い口調と、きれいなお声の先読みに、また
お話にと聞き入ったものでございます。今はお亡
くなりになれましたが、森田先生には大変お世
話になったものでございます。（後略）

石上雪江さんと娘さんの博士さんのお宅は谷津教会
から上の方へ数軒行ったところであり、教会に近いと
ころであった。石上雪江さんがデイサービスに行かな
い日にお話をしていただいた。

祖父は内野徳次郎で、パウロ内野作蔵神父の兄です。

父は内野銀一で霊名はヤコブ。一八七九年生まれになりますか。父が三三歳の時に私が生まれ、父の入信と同時に私も八ヶ月で洗礼を受けたということになりますね。霊名はマルタです。父は次男です。本当は菓屋をやりたいかったですけど、長男の兄が身体が弱かったので内野家を継ぎ農家をやりました。父は昭和二七年二月に七三歳で亡くなりました。母は佐藤よしで、大原の富厚里から嫁ぎました。母は、畑で採れた野菜をリヤカーに積んで静岡の町まで売りに行つて、その帰りに魚を買つて帰り、魚の好きな義父の内野徳次郎さんに料理して出してあげると喜ばれたと話したこともありました。

私たち女衆は、ミサの前に、教会の庭や外回りの草取りをしたり、ルルドのマリア様に花をあげたりしました。ミサのときには侍者として、神父様のお手伝いをしました。森川さん系も熱心な信者でしたよ。今の森川さんのお父さんの親が、ことに熱心だったですね。

当時、教会の裏山の山の上には家が三軒ありました。

私の実家はそのうちの二軒です。私はそこで育つたのですが向敷地に嫁ぎました。戦時中はひどかった。昭和一六年、夫は妊娠中の私を残し戦地に行きました。出産して一人で娘を育てました。空襲に遭い安倍川橋は真っ赤に燃えているし、防空壕の入口にいた男の人は焼夷弾が当たつて死んでしまい、その横を通つて逃げました。私は娘をおんぶしたまま、熱いので農業用の細い川に飛び込みじつと耐えてました。戦地の夫の無事と早く帰つてくることを、ただただ毎日／＼祈り続けていましたね。

結局、夫が戦地に行つている時に、戦災で焼け出されてしまったのです。娘を連れて実家に戻りました。その後、夫も復員してきて親子三人、この谷津の実家で生活するようになりました。

金曜日晩には、お夕飯を食べて、子供を連れて教会まで下りてゆきました。教会にある十字架の道行を一四留までお祈りして、それから山の上の家まで帰る



石上雪江さん (2012年11月)

とくたびれてしまいましたね。

子どもの頃、クリスマスの時には、静岡の教会まで出かけていきました。リヤカーに乗せてもらっていくときもありました。一二時のミサまでやって、それから谷津まで歩いて帰ることもありました。そんなときはやっぱ大変だもんで、三番町の親戚に泊まることも多かったですね。安西橋を通るときは「ハ・シ・バ」を親が渡したようなことを思い出します。

ドラエ神父様は、すらりとしたきれいな方でした。怖くはなかった、やさしかったです。お元気なときは、

よく香部屋に
いましたね。
お祈りをして
いたんですよ
うね。昔の人
は外人だろう
と日本人だろ
うと忍耐強

かった。

ドラエ神父様の最後は、主におよしおばあさんが看病していました。天野さんの奥さんも看ていることもありました。食事の用意や洗濯や、もう最後には皆で看っていましたね。

今の、望月忠雄さんの家のもう少し行った辺り、今は茶畑になっていくけど。そこに内科の天野医院がありました。怪我なんかも診てくれました。その天野さんが医者なので、ドラエ神父様を診ながら、奥さんも食事の用意や洗濯もしてくれたりしていたのです。

ドラエ神父様は結局、この教会で亡くなったのですが、ご自分が建てた教会なので愛着があつたのでしょ。うね。臨終のとき一人ひとり皆に握手をして、そしてお亡くなりになりました。それは悲しかったですね。

谷津カトリック教会は、その後も静岡教会の神父様が巡回してくださりミサが続けられてきたのです。

私は今九五歳です。お祈りをしてから九十年……：教会の信者で良かった。

ドラエ神父様から受洗

石上博子さん

(昭和一七年生・石上雪江さんの娘さん)

私は駿河区の向敷地で生まれました。小さい時は向敷地に住んでいたということですが、五歳の頃、戦争に行つた父がインドネシアのハルマヘラ島から帰つてきました。父母と私は谷津に住むようになりました。戦争中は、世の中が騒々しく、谷津の教会はしばらくの間止まつてしまいました。静岡市街で焼け出された人たちが教会に寝泊りしていたのです。ミサはできませんでした。

その後、教会は近いので私はよく行くようになりました。教会の御聖堂には、十字架の道行を絵に表した額が掛けられていました。後年、ルノー神父様が日本のものが好きだということで漆のものに変えられました。だけど額も素敵だったし昔の絵の方が好きでした。以前お見えになつたソービオン神父様は、ことに谷津が好きだということよく来てくださいました。ドラエ神父様は、フランスでの信者さんたちの様子が

映っている幻燈を上映してくれました。言葉は解らなけれど、いい感じでした。

母は幼児洗礼だったので、私は高校一年生のと き洗礼を受けました。霊名はユリアナです。ドラエ神父様に名付けていただきました。女性は女の聖人の名をいただくのです。ユリアナさんという女性のことを調べましたら、なぜか、私と同じような性格でしかも考え方も似ていて、嬉しくなりました。

ドラエ神父様は、けっこう厳しかったという印象がありますね。

ドラエ神父様が亡くなる前頃かしら、体調が良くないとき「身体が熱い。今、煉獄で裁かれているんだ……」とおっしゃっていたと聞きました。私の祖母、およしおばあさんも、ドラエ神父様を夜通し看病していました。あきおばさんもいました。

今は、第一と第三日曜日のミサには必ず、(教会の) 焼け跡に行つています。

結婚後一五年位で洗礼

望月悦子さん 霊名モニカ（昭和二〇年生）

私は静岡市内から谷津にお嫁にきました。夫は、望月忠雄さんや石上博子さんとはいとこ同士です。実家は仏教でしたが、嫁ぎ先がカトリックの信者でしたから、いずれ私も信者になるということは自覚していました。結婚と同時に、結婚後、一五年くらいたつてから静岡教会で、洗礼を受けました。私は、信仰を授かって信じあえる友達を得たのです。

親は内野作蔵神父の姪

望月忠雄さん（昭和一三年生）

望月愛子さん（昭和一七年生） 御夫妻

望月忠雄さんのお母様（望月あき）は内野作蔵神父の姪で、『宣教再開百年誌』の〈百年祭によせて〉のコーナーに「想えば」というタイトルで次のように文を書き遺している方です。（四〇三頁、四〇四頁）

今から六〇余年前、ル・ドライエー神父様によって、谷津に小さな教会が建てられました。夏は夜蛍がいっぱい舞い、山からはこわいキツネの鳴き声が聞こえるという山里でしたので、西洋館風の建物は、その頃では大変珍しい建物でした。

その翌年の大正八年、谷津の親戚の人たちが一緒に城内教会で、ドライエー神父様から洗礼を授けていただくことになりました。その時、私は八歳でした。両親に連れられて、長い道のりを歩いて行ったことを覚えております。

谷津の人たちの心に強く焼き付いているドライエー神父様は、いつもにこにこ私たちに接してくださいました。海を知らない子供たちを海水浴に連れて行って下さったり、よく一緒になって遊んでいただきました。そのような遊びを通して、イエズス様の愛の教えを私たちに植え付けてくださいました。また、神父様は大変厳格な方で、賛美歌の練習や要理のテストの時など、一字でも

間違うとすぐお叱りを受けました。そのようなこともありましたが、「私は谷津の荒野で終わるんだ」とおっしゃって、晩年はこの田舎で静かに過ごしてました。今はその谷津の山からいつも見守ってくださっていると思います。

また、心に残る方で、森田東一郎先生がいらっしゃいます。先生は私たちの要理の勉強を教えて下さる為に、一〇キロもあるところを自転車でお出で下さいました。そして子供たちには解りやすく、紙芝居にして楽しく教えて下さいました。

先生は時にはご帰宅が夜中になったこともあったと母から聞いて、本当に頭の下がる思いでした。

また、谷津では叔父が初めてカトリックを学んだようです。神学生の頃、夏休みで帰ると、いつも勉強し、時々お茶の機械を手伝っていました。

城内教会まで両親と歩いて行った楽しいクリスマス、レー大司教様より授けられた堅振式、古希を過ぎた私も、あの当時のことは、昨日のことの

ように次から次へと思い出されます。私たちの谷津教会も大勢の神父様方、先生方のお陰様で現在に続いているものと深く感謝致しております。

(後略)

〈愛子〉

義母は熱心な信者でした。キリストの精神で生きていた人でした。教会には休むことなく必ず行っていました。教会をしつかり守っていました。義母は「おじさん(内野作蔵神父)は、休暇で帰ってきた時など、山の上の自分の家の表で、歩きながら行ったり来たりして聖務日祷をしていた」と話してくれました。

義父は、私が嫁ぐ前に他界していました。義母は義父のことを、「賛美歌をよく口ずさんでいた」と話したことがあります。義父も熱心な信者だったのだな—と思えましたよ。

私の清水の実家は仏教でしたが、「星美」出身だった関係で谷津に来ました。こちらに来てから受洗しま

した。結婚した後、公教要理の勉強をする時はデヴィス神父様が家まで来てくださり、義母と二人で勉強させてもらいました。子どもたちは生まれて間もなく幼児洗礼を授かりました。

〈忠雄〉

焼ける前の谷津教会の玄関には、七五年くらい前の茶色になったような大きな写真が飾ってあつて……。それも燃えてしまったのです。焼けた教会の白いカーテンのしてあるあの部屋に、教会のことが解る資料がいっぱいあつたのですがみんな燃えてしまいました。

ドラエ神父様は、目が青くて、綺麗な神父様だなど思いました。けどよく怒られた記憶があります。鐘の合図とともに御ミサが始まりましたがミサをサボると、この私のうちまできて叱られました。

弟たちは教会によく行き、ミサでは神父様の侍者をよく務めていましたよ。

この村へ嫁がひとり来ると信者は増えるんですが、

子どもが生まれても女の子だと嫁に行つてしまつてなかなか増えないのです。

〈愛子〉

でも私たちに孫たちも生まれて……これから洗礼を授けていただく予定なのですよ。

次のことは、望月愛子さんが三岡さん、保住さん、朝岡さん、戸加里さん、久保田さんにお聞きした話です。

ドラエ神父様は亡くなられる前、藁のベッドがいいと言つていたので信者みんなよく藁をトントン叩いて、藁のベッドを作りました。

昭和三〇年か三三年頃のことです。静岡大学フランス語講師のボデュー神父が、静岡大学教育学部、文理学部、法経短期大学部、県立女子短期大学の学生さんから男女合わせて一五人位を連れてきて、聖書研究を指導してくれたこともありました。

何年頃だったか？ 夏休みは谷津の教会で林間学校

が開かれました。生徒は一五、六人でした。八幡教会日曜学校の子どもたちも来りました。谷津からは信者ではない村の子どもたちも来て一緒に遊びました。大学生と一般の女性が子どもたちを指導してくれるのです。絵を見せてもらいながら聖書の勉強をしたり、花火をやったり……麦茶をコーヒーだと子供たちは喜んでいました。林間学校の最後の日は、村人が神父様とみんなのために、鮎の追い上げをしてくれました。

夜になり神父様は香部屋に寝ます。その時、御聖堂の畳はギシギシしていましたが、男子学生と子どもたちは御聖堂へ、女性三、四人は、教会と内野さんの家の間にあつた離れに寝ました。内野さんのおばあさんが付き添いで離れに泊まってくれました。男女五人くらいは望月忠雄さんの家に行き、お風呂に入れてもらったりご飯を頂いたりしました。

☆歴代谷津カトリック教会主任司祭は次の方たちです。

〈初代主任司祭〉ドラエ神父、〈第二代〉ジロディアス神父、〈第三代〉ピリング神父、〈第四代〉ウタン神父、〈第五代〉デヴィス神父、〈第六代〉パウロ・ルノー神父、〈第七代〉松井和人神父、〈第八代〉高橋慎一神父、〈第九代〉ミシエル・ゴーチエ神父、〈第一〇代〉林健久神父

谷津で一番古いのは私

望月勝司さん（大正六年八月三日生）

二〇一三年六月二六日は雨が降っていた。天気がいよいよにはいつも畑で働いているという望月勝司さん。「三度三度しつかりご飯は食べて、目も耳も関係ねえよ、新聞でもなんでも読めるし。家のごみ出しと風呂は自分がずつとやっている」というお元氣な勝司さん。教会建立に尽力された望月久次郎さんの親戚筋。勝司さんは信者ではありませんがお話を伺った。

「この谷津で生まれ育つて、谷津で一番古いのは自分だ。私が生まれたころは八月一日がお盆で、その送り盆の三日に生まれただけで」

望月厚司さんの親戚筋になる、現在九七歳の望月勝司さんは元気な声で話される。

「この私の家は、今の平成天皇さんが天皇になった年ここにへ来た。その前までは、谷津の部落は今の第二東名の真下に一〇軒あつて。あとの三軒は『たいら』の山に三軒、谷津は全部で二三軒だった。『たいら』には、内野さん（内野神父さんの実家）と、西内さんとあと一軒あつた。あとの一軒は今は消息は解んねえなあ」

「内野作蔵神父さんの長兄の徳次郎さんは跡取りで、その下の兄は西ヶ谷に婿に行つただよ。内野作蔵さんはその兄について西ヶ谷に行き、兄の家に同居させてもらつて、美和村の役場に勤めていたつてことだったよ。その兄が亡くなつたもので、それから神父になる学校に行つたということだよ」

「谷津の教会では大勢子供が集まつてよく遊ばかいてもらつたもんだ。遊んでいても私ら子どもにも信者になれつて一回も言われたことはなかつたね。教会の中にはご飯食べたりするところがあつたけが、中はせば（狭）くて一〇人か一五人入れればいっぱいになつてしまつた。今の庭のところは木が沢山植わつていて教会に庭はなかつたけよ」

キリスト教だということで、学校の先生にそのことで怒られた子もいたそうだけど、子ども同士でキリスト教に入つている子をいじめるとかなかつたですか。「そんなこたあ、なかつたよな。自分の家は教会の信者じゃないけど、村の衆は教会に遊びに行くな、なんてそんな意地の悪いこたあ言われなかつたよ」

「自分らが学校にあがる時分に西の方から医者が来て……天野さんという医者だった。住田さんの山の向こう側。その天野さんに写真を撮つてもらつたこともあつた。

それから『平』にお寺があつた。お寺そのものは見

たことはないが。もう一つの寺は、今のこの藁科川の向こう側の小瀬戸に徳願寺の末寺があった。イタヤ島に近い方に。その末寺は当時は南藁科の小瀬戸の入りっ口にあつて、その跡地は今お茶の木が植わつてい
るよ。よくお寺が二つもあつて仏教が広まつているとこへ、カトリックが入つてきたもんだね」

「自分が一〇歳になるかならない頃かな、自分の父親は（静岡の）町のほうへ人糞を貰いにリヤカーに肥え桶を乗つけて行つていただよ。当時手伝いで付いて
いったことがあつた。その帰り、休暇なんかで東京から帰つたという内野神父さんと偶然会つて。安西橋を越えてずうつと谷津まで、肥え桶に一杯人糞を入れて
た重いリヤカーの後ろを一緒に押して押してくれて……。谷津まで一緒に帰つたことがあつたけよ。親父
は内野神父さんを知っているからね。私はこのとき初めて会つて、この人が神父になつたという人なんだ
なーとしみじみ思つたけよ。着ているものつていえば、いつも教会に詰めているとき着ていると思うような格

好で、黒っぽい長い洋服で胸には十字架がブラ下がつて
いったけよ」

「子どもの頃、自分ちが教会で遊んでいると、外人の教会の神父さんが『この山越えて、今から行くだよ』つて川根の方へ行つたよ。昔の衆は良く歩いたね」

「自分は一六歳から一九歳まで、中国に行つてましたね。静岡三四連隊ではなく、愛知県連隊で簡単な講習を受け四年間衛生兵として南の島に行かされた。そりやひでえもんだつた」

「望月久次郎さんのカミさんは小瀬戸から来た女で、
「とら」という名前だつたよ」

「自分の家は望月厚司さん家から分かれて四代目だ。望月久次郎さんの代のその上の分かれかな。この家の一番終いの娘が小瀬戸から婿をもらつて。婿をもらつて別れるつてことで隠居やだね」

「自分の家は信者じゃないときさつきも言つたけど。望月久次郎さん―望月孝次郎―望月厚司さん系列のキリスト教の信者の家の分かれだつていうのに、キリスト

教に入信しろってよく言われなかったもんだね。久次郎さんが自分ちの名家でありながら、どうしてキリスト教に入らなかつたのかと思うよ」

おわりに

当時、谷津の人々はなかなか改宗しなかったという。谷津には寺が「大龍寺」と「養源寺」と二つあり、それでなかなか改宗できないのだと思つたが、大正六年ドラエ神父が谷津に来たころにはそこはもう廃寺になつていた。

「本家は長男が寺の檀家として支えるかもしれないが、二男三男は割合自由であつたのですね。あの時代、殊に谷津は、公にキリスト教活動もできたのでしょね」と歴史研究家の黒澤脩氏は語る。NHKの「八重の桜」では、新島襄は地元から耶穌教だと嫌われ迫害を受けている。時代は少し違ふがドラエ神父は谷津地域から虐めを受けたのだらうか。郷土史研究家の花村幸治氏は「明治になつてからは、クリスチャンは法律

的にも認められていて嫌がらせのようなことはなかつた」と話された。しかし、明治の封建制度を引きずつていゝる大正初期、山間僻地の谷津では改宗は大変だつたのではないだらうか。

それから、内野作蔵神父が助役になつたと、望月勝司さんも話されたり『日本人物情報大系』にも書かれていたが、『美和村沿革誌』、『服織村誌』、『南蘆村誌』の村長・助役・書記の項を調べたが、なぜか名前はなかつた。

谷津カトリック教会は、若い神父さんを大勢育てたり、戦争中は教会を開放し静岡の町で被災した人々が寝起きできる場所として提供していた。社会に貢献してきた谷津カトリック教会。放火され焼失してしまい、本当に表現できないほどの気持ち信者の皆さんはお持ちだと思ふのに、それでも「放火した少年の未来が希望ある明るいものであるように願つてゐる……」と語る望月忠雄さん御夫妻。「信者一同、教会は無くなつても信仰は強く持ち続けてまいります」との森川征夫

さんの言葉。約百年前に詩かれたものは、脈々と信者の末裔たちに引き継がれている。以前同人誌「蓂」と「エプシロン」で大変お世話になった井浦直美さん、『宣教再開百年誌』の四一四頁に「蓮実邸の思い出」を書いておられる。今は体調を崩されてしまったが敬虔な信者さんで、殊の外、谷津の教会を誇りに思っていた方であつたので焼失を知れば残念がる事であろう。

谷津カトリック教会の、百年の記念行事を拝見したかった。教会焼失後、新たな歴史を切り拓いてゆく皆さまにエールを送りたい。青島祥介氏の「サンライフわらしな」は、ありがたかった。まだまだとても書き足りないし不十分ではあるが、紙幅が尽きたので後に続けたい。

《協力者》（敬称略・順不同）

林神父・石上雪江・望月忠雄・森川征夫・石上博子・望月愛子・望月悦子・望月勝司・黒澤脩・花村幸治・

朝岡知久・久保田ふみ・戸加里羊子・保住静男・三岡房子・青島祥介

《写真提供》

林神父・望月忠雄・青島祥介

《参考資料》

「サンライフわらしな」静岡中央新聞販売（株）羽鳥支店

<http://www.shimizucatholic.jp/osirase.html>

<http://www.catholiccandachurch.org/hm>

『静岡新聞』二〇一一年一〇月一九日・

二〇一二年五月一四日

《参考文献》

『静岡県宣教史』P・ボーデュ神父著、後藤平訳、創造社、一九六五

『宣教再開百年誌』カトリック静岡教会、一八八四

『宣教再開125周年記念誌』静岡カトリック教会、

二〇〇九

『聖アンナ教会百年史』聖アンナカトリック藤枝教会、

一九八七

『五〇年の歩み』カトリック清水教会、昭和六〇

- 『こがんことがあつたばい』光安一美、平成二三
『道を拓いた女たち 第二集』しずおか女性の会、
二〇〇〇
『浜松カトリック教会創立百周年記念誌』一九七八
『カトリック沼津教会百年のあゆみ』カトリック沼津
教会百年祭実行委員会発行、昭和五〇
『女性解放とキリスト教』キャロル・クライスト
／ジユデス・ブラスカウ編、奥田暁子／岩田澄江共
訳、新教出版社、一九八二
『明治文化史六 宗教』岸本英夫編、原書房、昭和五四
『新カトリック大事典第一巻』新カトリック大事典編
纂委員会、一九九六
『日本人物情報大系 宗教編』第九七巻「人物による日
本カトリック教会史」皓星社、二〇〇二
『人物による日本カトリック教会史聖職者および信徒
75名伝』池田敏雄、中央出版社、一九六八
『静岡縣安倍郡誌』安倍郡時報社発行、大正三
『新版郷土史辞典』大塚史学会編、朝倉書店、
昭和四四
『百周年記念誌しんま』服織西小学校創立百周年記念
事業実行委員会、昭和五〇

『日本地理風俗大系』新光社
『安倍郡美和村沿革誌』大正元年



『婦人教師』1集、2集、4集

戦後の女教師たちの思いを綴った『婦人教師』を今読みなおす

勝又 千代子



一九五五（昭和三〇）年、静岡県教職員組合婦人部に、初めて専従の婦人部長土屋鼎が誕生し、その土屋鼎が編集長となつて『婦人教師』五集を刊行した。戦後一〇年、戦争と敗戦という未だ経験したことのない事態の中で、徐々に力を付けてきた女性たちが、自分たちで編集し、職場、家庭で差別に苦しみ、悩み、迷い、考え、戦い、希望を求め前へ進もうと、思いの丈を書きつづつた冊子であつた。どのような道筋を経て作られたのだろうか。そして五集まで刊行して終刊してしまつたのはどうしてなのだろう。

二〇〇五年、女性史研究会の発刊した『しずおかの女たち』第七集で、私は「静岡県の初期母親運動の記

録」を調べて書いた。資料を探している中で、母親運動に女教師たちの参加と協力が大きな力となったことが分かった。特に第一回大会では、県教組の婦人部長土屋鼎の活動が、みんなをまとめたこと、土屋のもとで『婦人教師』が発行されたことを知った。

それから行方の分からない土屋さんと『婦人教師』探しが始まった。多くの人の力添えがあり、県立図書館の増田さんのネットワークで、土屋さんが伊豆の稲梓にいらつしやることが分かり、稲梓を訪ねた。お元気な土屋さんから当時の話を伺い、しずおか女性の会発行の『道を拓いた女たち―静岡県女性先駆者の歩み―』第三集に、土屋鼎さんの聞き書きを書かせていただいた。その折『婦人教師』全五冊のうちお手元にあった一集、二集、四集を頂いた。三集は掛川の小林幸子さんにお借りし、五集は県教組にあったのをコピーした。そしてこの冊子は忘れられた存在で、殆ど現物は失われ図書館にも無いことが分り、昭和三〇年代の貴重な記録として残しておきたいと、ずっと気にかかっ

ていた。土屋さんに託されたとの思いがあったからだった。

女たちの胎動 静岡でも

一九四五年八月一五日、天皇の終戦の詔勅でやっと戦争は終結した。直前の広島、長崎の悲劇を受けた後の、遅すぎた決断であった。

全てを戦争遂行に注がれ、庶民たちの生きるための、生活するための算段や物資は、殆ど皆無であった。日本全国の都市部は、アメリカ軍の無差別攻撃で破壊しつくされ、衣食住すべてを無くした人たちがあふれていた。

敗戦の混乱の中で女性たちはいち早く立ち上がり、市川房枝を中心に「新日本婦人同盟」（十一月三日発足、後に「日本婦人有権者同盟」と改称）が結成され、翌年二月には自主的、民主的的女性団体として「婦人民主クラブ」が誕生している。一九四六年四月一〇日、戦後初の第二二回総選挙が行われた。静岡県の山崎（藤

原)道子は、一九万余票を獲得して当選、同時に三九名の女性代議士が誕生した。

四六年一〇月に静岡県の婦人連盟が発足し、事務局は県庁の文化部に置かれた。戦後、早い時期に婦人団体が結成されたのは、自主的で民主的な団体というより、役所や地域の有力者の要請があり、戦前の加入者を含めての再生の集まりの色が濃かった。四九年には静岡県婦人団体連絡会と改称し、学習活動として夏季婦人大学講座を三日間にわたり開催。その他奉仕、援護活動、県出身の戦犯の助命、減刑釈放の署名運動、結婚改善運動、地方では生活改善、母親学級等と活発な活動を広げていた。

同じく四六年六月九日に県教職員組合(県教組)が結成された。全国的に労組の結成があいつぎ、婦人部が作られた。最も早く婦人部が作られたのが、東京の教職員組合であった。しかし婦人部を作ることに關しては、無用論も盛んで「女のくせに生意氣だ」「自らの差別を作ることだ」「男の代表が女の分まで代表す

る」と言われたりした。四六年、都教組は第一七回メーデー(復活第一回)の翌日、準備会を開き五月一七日、婦人部結成大会を開き「男女差別の撤回、生理休暇の実施、母子の施設、学校給食の実施」等を決議している。これが四七年七月に日教組婦人部が結成される基礎となった。

民主化と逆コース

戦後の混乱と物資不足は続き、三回目の正月を迎えても主食の遅配は続き、主食として砂糖や中毒を起こすような大豆粉が配給されていた。電球が一所帯一個配給、翌年、マッチが自由販売となったという有り様であった。戦中、出征した男性に代わり職場に進出していた女性たちは、男性の復員や引揚げにより大量に首を切られた。賃金も男性の半分にも満たない状態であったから、すさまじいインフレの中で労働争議は頻発していた。例えば女性教員の給料が四五年一二月に五〇円が四六年一二月には四二〇円、四七年一二月は

六二〇円と増えていったが物価上昇には追いつかなかった。特に官公労働者の賃金は民間産業労働者に比べ、平均四五割という格差が生じた。このような状態を打ち破ろうと、大同団結して「全官公庁共同闘争委員会」を結成した。この中で教組の婦人部は先進的な役割を果たした。しかし二月一日、マッカーサーの命令でゼネラルストライキは中止させられてしまった。

戦後政策として、男女平等、女性解放の一環として、今まで女性校長など考えられなかったが、県下で七人の女性が校長代理に任命された。しかし上からの改革のもろさで、わずか二年でこの制度は終わり、四八年、小学校に加藤とよを初めとして三人の女性校長が誕生した。また、県下には新制高校六五校、私立高校二九校が開校した。

このころより世界中で社会主義革命が起こり、東西の冷戦が本格化していき、それにつれアメリカの日本への民主化政策も後退し、弾圧を強化してきた。四七年、トルーマン大統領の共産主義の封じ込め政策の発

表により、政策の転換がはっきりと示された。方針は保守勢力を奨励し、「日本を軍事基地化」して米国の盾として「防共の砦」とする、経済力を強化して米国のための「極東の工場化」するとの、占領政策の転換を図った。総司令部のリベラル派は失望して帰国してしまった。

一九四九年七月、国鉄の大量の人員整理が始まり、その夏「日本の黒い霧」と言われた下山、三鷹、松川事件が起きた。一九五〇年六月二五日、朝鮮戦争が始まり、マッカーサーは吉田内閣に命令し、警察予備隊を創設、海上保安庁を増員させた。七月下旬からGHQによる勧告でレッド・ページ（赤色分子の職場追放）が全国に吹き荒れ、あらゆる職場からのページが行われた。静岡でも県教委は六七名の教員に、レッドページを通告した。

朝鮮戦争により日本は出撃、補給の基地となった。日本に七〇〇あると言われた米軍基地から、連日、朝鮮に向けて軍隊が出動し、軍需産業や物資の補給によ

り、日本の産業は息を吹き返した。しかし劣勢に追い込まれた国連軍は、トルーマン大統領の「原爆の使用を考えている」との言明で、世界は核戦争の恐怖におののいた。世界中で抗議が湧き上がり、アメリカは孤立原爆の使用はできなくなった。

母たちの目覚め

その中で日教組は一九五一年一月、第一八回中央委員会において、戦争に反対し子供たちの命と環境を守ろうと「教え子を再び戦場に送るな」のスローガンを宣言、全国民に訴えた。

一九四七年、GHQの指導で全国の小、中、高校にPTAが作られ、今まで家に閉じ込められていた女性たちが、子供の母親という立場と名目で、社会に出ていくことを許され、少しずつではあったが人前で話しをしたり、自分の意見を言うようになっていった。家の中ばかりではなく社会への目も開かれていった。

しかしその一方、戦後一〇年近くたっても、農山村

地帯では戦前からの封建制、因習にしばられ、特に嫁の立場にある女性たちは、毎日の重圧に苦しんでいた。御前崎近くの池新田西小学校（当時）の校長の後藤敏夫が、一九五四（昭和二九）年に出版した『手を結ぶ母と教師』に寄せられた母たちの作文には、母の苦しみが書かれている。

「朝は家人より一、二時間早く、夜も最後に床に入る。一日中、家事、農事、子供の世話に追われ、一時も休む間もない。あるとき子供がむずかるので、添い寝をされていてとうとうと少しの間眠ってしまった。姑に見られ手をつけて謝ったが、昼日中、親の前でよく寝られたものと言われ、三日もしないうちに近所中に知れ渡ってしまった」

「風邪気味で具合が悪く富山の薬売りの薬を飲んで、やっとの体で田の草取りをしていて、とうとう気を失ってしまった」

「産後の肥立ちが悪く姑がお金をくれないので、主人からお金をもらって医者にかかっていた。姑に金ほど

うしたと聞かれ、主人に出してもらったと言ったら、おらあ亭主に一銭の金をもらったことはない。みんな在所（実家）からもらってきただと言われた」

子供を産んだとき「嫁はお粥に梅干しでたくさんだ。卵や魚を食べる嫁がどこにいるだ」と言われた。

赤ん坊を亡くした母親は「子供がいればおっぱいを与える間は、誰にも文句を言われずに休めたのに」と子どもを失った悲しみより、自分の休む時間が無くなったことを嘆いた。

教師の誘いも最初はなかなか理解されなかったが、粘り強い説得や誘いに、徐々にではあるが学校の場合に母たちが顔を出すようになっていった。

一九五〇年代になると、地域婦人団体、婦人学級、サークルや同好団体、教師の手助けによる学習グループ、労組や政党の影響のあるサークル等、今までの官制のものから自主的なものが全国的に生まれ、農山漁村部にも広がって行った。全国規模の団体（婦人民主クラブ、大学婦人協会、草の実会、キリスト教婦人矯

風会、日本婦人平和協会等々）もでき、都道府県に支部があつて活発に活動していた。

婦人教師の活躍（婦教研の開催）と

母親との連帯

一九五一年、日教組の第一回「全国教育研究大会」が日光で開かれた。女教師の参加者はわずか一〇余人と少なく、婦人部は「婦人の直面する問題が取り上げられていない」として、独自の大会を開催することを決議した。翌年三月、第一回「全国婦人教員研究協議会」（以下、婦教研）が大阪で開催され、様々な問題を抱えた女教師たちが三千人も集まり、主催者を驚かせた。自分たちが置かれている立場、父母たちの封建制、女教師に対する差別、早期退職勧奨の問題等々が話し合われた。

この前後、全国的に女教師に対して退職勧告が強硬に行われていた。女教師の地位は低く、どう見ても男

女同等とはいえない職場環境であった。中学では女性のクラス担任は難しく、ましてや中三の担任はもつての外が当たり前の職場であった。

四〇歳前後になると一人く、教育事務所と呼ばれ

「一七年勤めて恩給があるでしょうから、やめたらどうですか」等と何回も何回も迫られる。当時は未だ女性自身も働く者としての権利意識も低く、組合などの組織の力で解決する方法もあつたが、力は弱かつた。泣く泣く退職に追い込まれるか、拒否すれば山村僻地の通えないような学校に転勤させられた。三〇代では男女同数であるのに、四〇代になると急減している。定年まで勤められる例は少なかった。

「第二回婦教研」は千葉県鴨川市で開催され二千人が参加した。東富士演習場を持つ静岡県東部では米軍基地があり、売春宿や米兵の暴行が横行し、子供たちは日常的にそれらの中にいることで、深刻な影響を受けていた。母親たちも教師たちも見過ごすことのできない大問題で、基地反対闘争も全国的に広がり、日教

組も子供を守るために積極的に参加した。静岡からは一四名が参加し、「米軍基地問題」の報告をした。

第三回婦教研 最後の集会となる

「第三回婦教研」は一九五四（昭和二九）年一月二二、二三日、旧静岡市公会堂で開かれた。県下からは一三四五名、全国から千人が、立錫の余地もないほどこに集まり、熱気に包まれた。

「基本的人権をどう守りぬくか」「平和確保のための実践をどう進めていくか」「婦人の解放をめざして」の三つのテーマで討論された。全大会の議長は静岡県教組婦人部長の山崎光子が選出され、静岡からの問題として「退職勧奨の実態」が報告された。

そして最後に「お母さんに訴える」のアピールを全国に向けて発信した。「日本の子どもを守りましょう。お母さんの体を守りましょう。憲法を変えさせないようにししましょう。手をつないで立ち上がりましょう」と呼びかけた。そして「母親と女教師の会」の組織化

を決め、女教師と母親と手をつなぎましょうと、各地で話し合いを進めることが決議された。

しかしこの集会は三回目であるとともに、最後の集會となつてしまつた。本部からの提案で、「全国教育研究大会（全教研）」と婦教研と二回開くことは、日教組としては負担である」との理由であつた。ほかにも理由はあつたであろうがそう主張した。集まつた全国の婦人部長はこぞつて反対の意思表明をしたが、押し切られてしまつた。

どうして婦教研が独自に開催されたのか。男性教師に比べ女性教師の色々な面の遅れを取り戻し、内外の障害を取り除き、いい教師になりたい、そのための勉強の場が欲しいとの切なる願望により、産み出された集會であつた。だが土屋鼎のいう「第四次全教研に三分の一の婦人正会員を確保し、各県は婦人教師を多数参加させる」ことを付帯条件として、全教研への参加が決められた。しかし結果はむしろ逆で何分の一も出られなかつた。婦教研に結集したあのエネルギーを考

えると、どんなにか残念であつただろうかと推測する。

女教師の思いを綴ろう

この静岡での大会は静岡県教組婦人部にとつて、飛躍の転換点のきつかけの一つとなつた。全国からの参加者の婦人部長の殆どは専従で、静岡ではまだ専従はいなかつた。沼津市立大岡小学校の教師の土屋鼎が、初の専従の婦人部長に選出された。土屋は教師の夫と結婚し旧満洲で教えていたが、戦後引き揚げたのち夫とともに教壇に立つていた。四一歳の働き盛りであつた。

静岡県の教育界は、全国に比べて保守性の強い県として知られていた。女性が結婚し出産しそして働き続けることは、現在でも多くの困難があるが、当時はなおさらの環境であつた。女教師の地位向上を願う教師たちにとつて、婦人部長の誕生は曙光であつた。

一九五五（昭和三〇）年七月、一年二か月の必死の運動が実り、やっと産休補助教員設置法が成立した。

今までは、妊娠しても産休もままならず、産むその日まで教壇に立つこともあり、産後の休暇も気兼ねしながらという中で、体調を崩す教員も多かった。生まれ後も保育所も少なかったから、見てくれる人がいれば続けることができたが、お手伝いを頼んだり、やむなく学校へ連れてこざるを得ない教員もいた。この制度ができ不十分ながら補助教員が派遣されて、休む事ができるようになった。同年、長野市で行われた第四次全教研は、七千人の空前の規模であったが、県からは七人の正会員教師を送り出すことができた。

そのような中で婦人部委員会では、県下の女教師たちの結束を強め、民主化と解放への自覚を高めるため、文集の発刊が提案された。婦人部長の土屋鼎が中心となり四人の編集委員（山本ちづ、山本は□□^{（不明）}、山崎光子）が選出された。素人ばかりであったから出版文化会の協力を得ながら、教師たちに原稿の寄稿をお願いした。教師自身慣れないことであったから、かなり困難なことだった。

『婦人教師』第一集発刊される

一九五五（昭和三〇）年、苦労を重ねて一〇四ページの文集が出来上がった。定価一〇〇円（当時から三〇円前後）。関係者たちの喜びは大きく、同じ女教師たちから寄せられた様々な問題点や苦しみ、悩みが、慣れない筆致ではあるが訥々と綴られていた。

巻頭言に静教組委員長の松永忠二が婦人教師たちの活動について「日本の民主主義を推し進め、女性の解放と地位向上に果たす役割は大きい」と述べている。表紙は清水の教師、金子洋子が描き、その裏には「静岡県教職員組合歌」裏表紙には「原爆許すまじ」が楽譜付きで載っているのも、当時の様子を彷彿させられる。

二支部からの報告、五〇数名の寄稿。新憲法によって女性解放へと前進する新しい胎動と、封建制の中でもがき悩み苦しむ女教師たちの、両面が浮き彫りにされている。新しい時代を築く意欲と、意欲はあっても



「母と女教師の会」と書かれている。
(小林幸子さん提供)

「女のくせに」「女だから」といつも特別な目でみられる女教師の実情、職場での封建制、家庭との両立の大変さ、出産育児の難しさ、組合員意識の低さ等々、遠慮がちな言い回しに堂々と主張しきれない立場の弱さも浮き出ている。

この当時、女教師たちは積極的にお母さんたちとの結びつきを強めようと、「母と女教師の会」や話し合

いの場を広げていき、各地で様々なお母さんたちのグループが、続々と誕生していった。教師たちの指導を受けながら徐々に自主的なグループ、

サークルへと発展し、活発な話し合いの会が生まれた。県下での「静岡県母のつどい連絡会」には四〇数団体が登録されていた。「母親大会」「静岡母親の会」と各教組の支部では「母と女教師の会」として活発に活動がされ、この二つは名前は違っても母と女教師が手を結び、教育、生活、平和を守る運動を広げていった。

理想に燃えた若き教師たちがいた 子供たちに良い教育を（実例）

掛川の小林幸子は、一九四九年、一九歳の若さで池新田西小学校に赴任し、四年後に後藤敏夫が三六歳で校長に着任した。後藤の新しい発想や指導力で、教師たちも生き生きと活動を広げていった。父母との結びつきを深めようとの方針で、小林は学級通信以外にも、母親に個人通信を書いて結びつきを深めた。その中から集いをもちたいとの声が上がリ「ぞうきん」グ

ループができた。次第に成長し第五次の全国教研集会（松山市）には、県代表として「父母との提携」分科会に母親たちが参加している。

またクラスで「暮らしの時間」を設けて、子供たちが自由に発言する、校歌や子供会の歌を作る（歌詞は小林に任された）、全教師の実践記録をまとめて「砂丘の足跡」を発刊するというように、教師たちの自主的で創意工夫をこらした授業が行われていた。教師、子どもたち、父母との信頼関係が深く結びついている様子が分かる。

またその頃、若者たちの間にも青年団が続出し、学習とともに歌声や演劇運動が全国的にわきあがった。

ビキニ事件の衝撃と

原水禁大会・母親大会へ

一九五四（昭和二九）年三月一日、アメリカによるビキニ環礁での水爆実験の衝撃的なニュースが流れ

た。焼津のまぐる漁船「第五福竜丸」他多数の漁船が被爆し、一四日焼津に帰港した福竜丸の二三人の乗組員の様子を報道した新聞、ニュースは、日本中はもとより世界中を恐怖におののかせた。

続いて原爆マグロ、放射能雨と、魚類は食べられず、雨の降る日は表にも出られない、というパニック状態が起き大騒ぎとなった。食料も水も空気も汚染され、生命と生活が脅かされた。

三月二七日には焼津市議会が原水爆禁止の決議をしたのを皮切りに、東京の杉並区より始まった原水爆禁止署名の運動は、水が吸い込まれるように全国に広がり、翌年八月には広島、長崎、東京で「原水爆禁止世界大会」が開かれた。

それと同時期、「母親大会」も開催された。国際民主婦人連盟（民婦連）の副会長であった平塚らいてうと五人の評議委員が、全世界の女性たちにこの運動を知らせようと、ベルリンで開かれる国際民婦連執行局会議と、各国の女性団体に「原水爆禁止のための訴え」

を送った。執行局会議は全会一致で支持し、「母と子供が安心して住める世の中をつくるために、お母さんの力を結集しましょう。全世界で母親大会を開きましよう」と決議された。

そして原水禁大会の前、六月には「日本母親大会」が東京で開かれた。静岡では東京に先立ち、五月二十九日に静岡市安東小学校で五〇〇人が参加して開かれている。

母親大会を開催するについては、婦人民主クラブ、静教組婦人部の努力が大きかった。県教組、市教組、各町内の婦人会、母の集いに集まった各グループ、生協、職場、事業所、あらゆる層に呼びかけ、今まで運動に参加したことのない人たちが、下駄ばきエプロン掛けで準備会に参集した。

今まで一般の女性たちは自分たちの手で、大会を開くことなど考えられなかった。しかし世界を覆った原水爆の恐怖と危険性は、子どもの未来を背負う母親たちを突き動かした。準備も手探りで資金の調達も皆の

知恵を集めて、必死に取り組んだ。

県教組婦人部長の土屋鼎の議長、婦人連絡会の石上きみ、服織婦人会会長の鈴木すずの司会ですすめられた。この大会に第五福竜丸の乗組員久保山愛吉さんの妻、すずさんが参加し夫の言葉を伝えている。

第二集発行

二集（一九五六年）には一集に力を得て励まされ、共感を覚えた女教師たちにより投稿が増え、二一八ページ、倍の厚さのものとなった。

教師たちの文章とともに、各地にできた母親たちのグループの作文、報告も多く綴られている。教師たちもさらに前進し、職場や家庭との葛藤を冷静に書き、第五次教研全国集会の報告、手を結ぶ母と女教師の様子、今では考えられないほど教師と母親たちが深い信頼関係で結ばれているを感じる。

中でも夫の死により多額な弔慰金を受けたすずさんに対する、焼津市民の妬みや中傷により、何倍もの苦

しみを背負ったずさんを、さらに苦しめる様子を記した文章は胸が痛む。ずさんは「夫の生命をかえして」の文章を寄稿し、広島での原水禁大会にも、多くの人たちの願いと支援に支えられて出席している。母親の代表も参加しその様子が生き生きと報告されている。

第三集発行

一九五七（昭和三二）年は、さらに充実して三一〇ページの厚さになった。「言いたいことが山ほどある」という思いが全編から伝わり、どれを取り上げてよいのか迷うほどである。項目だけをあげても「女教師の組合活動」「教室の記録」「家庭での女教師」「母の記録」その他短歌から俳句まで幅広い。

「組合活動」の中では、やはり産休のことが大きな話題であり、産休補助教員の側からの苦渋も書かれている。不安定な身分で短期間にあちらこちらの学校を回り、その度に神経をすり減らし、しかし正規の教員に

はなれない立場。また保育園の必要性を痛感し、増設を切に願う訴え。今も待機児童が大勢いる状態を考えると、政治の在り方を何とかしてもらいたいとの思いが募る。

「母の記録」には家庭の中で少しずつではあるが、嫁の立場の改善や、物を言えるようになった喜び、いい嫁よりいい母になりたいと控えめに書いている。反面、編集委員が述べているが、二集での生々しい生活記録にくらべて、お母さん方の筆が達者になったせいか、論文調や随想風が増え訴える力が弱いとの感想もある。

中でも「第二回全国、静岡の母親大会」の記録は、母親大会の初期の記録や資料がほとんどないなかで、貴重な存在となっている。静岡大会の詳しい内容、磐田、沼津の大会も紹介している。「静岡県母親大会」の名で「母親と教師と手を結んで民主教育を守りましょう」「平和と婦人のために現憲法を守りましょう」「原水爆の実験や製造は一切やめてもらいましょう」

の決議を出している。

社会情勢の変化と

教育を取り巻く環境の悪化

戦後の教育は、一九四七（昭和二二）年、教育基本法、学校教育法により、今までの軍国主義的、超国家主義的な教育が否定され、男女共学、教育の機会の均等がはかられ、民主化がすすめられた。一九四八年には地方ごとに教育委員の公選制が成立し、中央集権的な教育からの統制が打ち破られた。

しかし教育のための予算は、一九五九年度では全体の一分という低い状態で、校舎も教師も不足し一クラス五人以上というすしづめ教室は、全国で三分の一以上と言われた。五六年から「母と女教師の会」は県下を東、中、西の三ブロックにわけて大会を開き、五九年、六〇年と中学校の増設、高校増設、特殊学級新設等の要求が出されている。運動が「母と女教師の

会」や「母親大会」でも大きな問題となり、半月で四万人の署名を集め、教育委員に陳情活動が活発に行われた。結果、一九六一（昭和三六）年度には県立工業高校が開校された。

しかしこのような学校現場は放置されたまま、一九五六年に政府は教育委員を任命制にし、教員に対しては勤務評定を実施しようとした。教育内容についても社会科としていたものを、道徳科（もとの修身）の時間にして内容を後退させようと図った。進学組と就職組に分け、女子には家庭科を必修にさせるといふ、男女差別教育を打ち出してきた。

「静岡母親の会」では一年間、道徳教育の勉強会を開催。「古い道徳と新しい道徳」「愛国心と親孝行」等々熱心に勉強会を実施して、道徳科の反対を表明している。教委の任命制についても、勉強会に市内外の女性団体に呼びかけ、反対決議には二四の団体が署名している。

教育委員任命制に対しては、教員組合はもとより教

育委員、教育関係の諸団体、民主団体、母親たちにより全国的に激しい反対運動が行われたが、参院本会議場に警官五〇〇人を導入し、その中で強引に成立させてしまった。

一九五五（昭和三〇）年前後、東西の冷戦構造のものと逆コースと言われるが、戦後の民主化が後退し反動化にひた走っていったときであった。一九五六年、愛媛県に始まった「勤評闘争」は教員の勤務状態を五段階の等級に分ける勤務評定により、上の者から昇格させるという通達であった。愛媛県教組や日教組も支援して、激しい反対運動が戦われたが、脅迫や軟禁、いやがらせの攻撃が執拗に行われ、ついに敗北に終わった。

五七年末、政府は翌年に全国で勤評を実施する旨を発表した。日教組は「非常事態」として全組織を上げて反対運動に取り組んだ。運動はあらゆる層の広範な人々を巻き込んで行われたが、第四回母親大会（一九五八年）でも大問題として、大きく取り上げら

れ、都教委や文部省に反対声明を提出した。これに対して東京都に続き各県の教育委員会は、母親大会の後援打ち切りや会場貸与の拒否、アカ呼ばわり等、教師や母親大会参加者に、様々ないやがらせを始めた。

同年秋、警察官の権限をより強化する警察官職務執行法中一部改正法が国会に提出された。戦前を思い出すこの法案には、やはり全国的な反対の声が上がり廃案となった。五九年は皇太子（現天皇）の結婚による、ミッチーブームが起きた年でもあった。

小児まひワクチン輸入運動

一九五九（昭和三四）年、青森県八戸周辺で小児マヒが集団発生した。日本では未だ手持ちのワクチンがなく、母親たちはわが子が病気になるたらどうしようと、全国で大騒ぎとなった。当時、ソ連にはすでに生ワクチンがあり、それを輸入するよう要請したが、「鉄のカーテン」のあなたのソ連製は、赤い国のワクチンとして許可しなかった。六〇年にかけて小児マヒは猛烈

な勢いで全国に流行し、たまりかねた母親たちは必死に署名活動や請願運動を展開した。母親連絡会はもとより母親のグループ、医療関係、県総評等、日ごとに運動は高まり、ついに政府も緊急処置として一九六一年、ソ連から一千万人分の生ワクチンボンボンを、カナダから三〇〇万人分の液状ワクチンの輸入を決めた。

このように母親たちは自分の子どもだけの問題ばかりではなく、いい環境を作るといふ視点から、社会の出来事、政治の動きが子供の幸せと切り離せないことを学んでいった。母親大会や母と女教師の会が活発になり、女性たちが運動の大きな担い手となるにつれ、妨害運動が様々な手段で、陰に陽に露骨にやられるようになった。何かにつけてアカと言われ本人や家族、親せきにまで誹謗中傷がされるようになった。母親連絡会や女教師の会に参集している人たちに対しても、子どもの就職や、人事、転勤などの形で、活動を妨げようとしてきた。

政府は母親たちの運動に対抗するように、新生活運動として食生活改善、台所改善などと銘を打ち、社会教育の場として婦人会を意図的に育成していった。教育委員会は文部省の委託事業として、婦人会への事業予算を年々増やし、静岡県が全国のトップを占めていた。このような働きかけは教師間においても不信や対立を生じ、亀裂が深まり分裂が生まれていった。母親たちの活動が活発になるといふことは喜ばしいことではあったが、学校現場でも忙しい教師たちにとっては、相당한負担でもあったのではと思う。

第四集発行

一九五八（昭和三三）年、四集は出されたが、ページ数は一二四ページと激減している。土屋鼎に代わり編集長は水野シズに交代している。発行に寄せての県教組執行委員長、木村愛一の言葉に、「教育予算は削減される一方、再軍備や軍人恩給の増額、校長のみ七割の管理手当の復活、勤務評定等、アメリカの日本の

位置づけによる反動化は一層進んでいる。……婦人教師の内部の力を培ってほしい」とあり、当時の教育情勢の厳しさを想像させる。

五人の編集委員もあとがきで「勤評、道徳教育をはじめとする逆コースに教師は委縮してきてはいないか」「非常に立派な論文的なものが多く、一分のすきもない文章が多い。こんなにも緊張し続けていなければならぬのか。もつとありのままの未完成な稚拙さを出してもいいのでは」「今までは集まった原稿を無制限に受け入れ、生活記録、作文が多かったので、面白いものにした」と新編集方針を出したが、伝わらなかった」との意見を書いている。

内容は「女教師の一生」として新卒教師の喜怒哀楽から、妊娠出産について、学校での問題点、退職勧告をされた苦しみ等、それぞれの立場で県下の各地の教師が、実態を書いている。

愛媛の僻遠の地「一本松村」の勤評闘争の記録は、校長を拉致、軟禁までした教育委員会と教師たちとの

激しい闘いの手記である。日教組、全国の教師たち、地元の労働者たちとの共闘体制の中で行われ、教師たちの不屈な抵抗を目のあたりに見た愛媛県当局、県教委、自民党県連幹部は、ついに「全校長が評定書を提出し、みなさんに大変なご迷惑をおかけしたことをお詫びする」「今後もみなさんと一緒に頑張って行きたい」の二条件を受け入れ譲歩したことが記されている。

その他、教師を題材とした石川達三原作『人間の壁』についての座談会。映画『喜びも悲しみも幾年月』『純愛物語』『美徳のよろめき』『挽歌』と、当時話題となった作品の感想会。教師たちにもさまざまなタイプがあると「腰掛タイプ」「立身出世タイプ」「組合タイプ」等、七つに分類して少々揶揄的に紹介している紙面もある。

最後に「一九五八年度静岡県教職組合婦人部運動方針」は①婦人運動の前進として、様々なグループの誕生や、中国訪問や、母親大会での国際的交流、国連への代表派遣と進んだことは認めている。②婦人教師の

置かれている立場については、雑務に追われる実態、不当転退職の厳しき、産休法の不徹底等々、権利の実現にほど遠い職場と言える。

これらに対して権利を守り獲得するために闘おう。子どもの教育を守る運動を推進しよう、と呼びかけている。

第五集発行 終刊号

五集は間が空き、三年後の一九六一（昭和三六）年に発行されている。この空白はなんだっただろうか。前年には安保反対闘争が、かつてないほどの盛り上がりを見せ、全国津々浦々で反対デモが行われていた。しかし取り上げられてはいない。

「女教師母体保護運動の歴史」「お産と育児」「父母と手をつなぐ」「婦人教師大会の報告」等が載っている。

この五集で『婦人教師』は終刊となった。一九五五（昭和三〇）年から、一九六五年の一〇年間は文部省と日教組との対立が最も激しく、様々な闘争が繰り返

された時期であった。高校の女子家庭科必修、道德教育の推進、勤務評定の全国実施、学力テスト反対、警職法の提出、教科書の批判、安保闘争の広がり等、組合として取り組む課題が次々と起こっていた。

静岡の市教組の例を見ても、補習全廃運動、校長に毎週出す指導案の不提出運動、一月一日の儀式廃止運動、平日の日直廃止運動、超過勤務手当要求運動、勤評闘争、安保闘争と連なっている。教研集会にも休暇を取って参加という形になっていった。

当然当局の切り崩しも激しく、一九五八年には第二組合も作られている。学校内での団結も希薄となり、教師同士の間には不信感や、競争、猜疑心が起こり、組合を離脱したり属さない教師も出ていた。露骨な配置転換や転勤が目に見える形で行われた。

女教師たちの間でも様々な問題や資金面のことなど等混乱もあり、もはや独自の文集を作る余裕や力も失われていったのではないかと推測する。

編集後記に水野シヅは「前略…… 戦後一五年の組

合運動はかつてない婦人の自覚と自信によって、着実な教育実践が積み重ねられ、働く婦人の先進的な役割を果たしている力づよさもひしひしと感ぜられます。

この雑誌が幾年か後の職場で再び読み返されたとき、婦人教師の歴史の一つの資料ともなろうかと考えて、資料編にも相当なスペースを取りました」と記して一応の締めくくりをし、関係者に謝辞を述べている。

確実なことはつかめなかったが、終わるべくして終わったのだらうと思える。私の子どもたちが小学校に通った一九六五年代、父母たちの噂話に「先生方の中に第一組合と第二組合と、青空というどこにも属さない人たちがいて、第一の先生は学校の中には一人か二人しかいないんですって」と囁かれていた。しかし「教育を語る会」という集まりがあり、校外で教師と自由に話し合いが行われていたことも事実だった。

今現在、教育の現場は教師たちにとって、楽しく希望に満ちた職場になっているだろうか。五〇数年たち

社会はめまぐるしく変化していったが、学校現場ではむしろ以前にもまして複雑な問題も多発し、教師の悩みと多忙は増えている。「教員残業、月九五時間。土日出勤が増加」（静岡新聞二〇一三年一〇月一七日）にあるように自宅にまで仕事を持ち帰り、様々な研修に追われ、子どもと向き合う時間を失わされている。非正規の教師は八割もいると言われる。教師も子供も学校が楽しくて心から和める場所であってほしいと切に願っている。

戦後の激動の一五年間、話が前後したり重複して分かり難いので、どんな情勢であったか年表で整理してみる。

一九四六（昭和二一）年五月、東京都教員組合女教員大会
開催

一九四七（昭和二二）年 日教組婦人部結成

一九四八（昭和二三）年 教育の民主化として「教育委員公選制」、PTA第一回全国協議会開

- 一九四九（昭和二四）年 朝鮮民主主義人民共和国成立
中華人民共和国成立、ベトナム解放戦争、国鉄人員整理、レッドパー
ジ全国規模で始まる、下山、三鷹、
松川事件、アメリカの支配強まる
- 一九五二（昭和二七）年 第一回婦教研催、対日平和、安
保条約発効、血のメーデー事件、
破壊活動防止法公布、基地反対闘
争高まる、石川さつき村八分事件、
朝日新聞ひととき欄はじまる、「日
本子供を守る会」結成
- 一九五三（昭和二八）年 第二回婦教研催、警職法改定案
反対運動激しく廃案に
- 一九五四（昭和二九）年 第三回婦教研催で開催（後、土
屋鼎専従の婦人部長となる）、「母
と女教師の会」組織化決定、ピキ
ニ事件、教育二法案（教員の政治
活動を禁止）
- 一九五五（昭和三〇）年 『婦人教師』第一集発行、第一回母
親大会、原水禁大会、産休補助教
員法成立、保育所つくり運動、物
- 一九五六（昭和三一）年 「教育委員公選制」が「任命制」に
逆戻りする、『婦人教師』第二集、
高校女子家庭科必修、道徳科新設、
教職員の人員削減問題、愛媛より
勤評開始、佐賀県の抵抗闘争をモ
デルに『人間の壁』石川達三作大
反響を呼ぶ
- 一九五七（昭和三二）年 『婦人教師』第三集、文部省全国に
勤評実施を通過、日教組反対運動
- 一九五八（昭和三三）年 『婦人教師』第四集、警職法改正案
国会提出、勤評実施で日教組は激
しい反対闘争を起こし、解雇、休
職、停職と大打撃を受ける、市教
組第二組合が作られる
- 一九五九（昭和三四）年 安保改定阻止運動始まる、皇太子
結婚
- 一九六〇（昭和三五）年 安保改定承認、国会デモで樺美智

子死亡、消費ブーム、浅沼社会党

委員長刺殺される

一九六一（昭和三十六）年『婦人教師』第五集、生ワクチン緊

急輸入決定、高校全入運動、保育

所要求運動

ご協力いただいた方々（敬称略）

小林幸子 田中真理子 山田綾子 鈴木孝子

蒔田平八

参考文献

『しずおかの女たち』静岡女性史研究会、二〇〇五

『愛の風を吹かせよう』土屋鼎、伊豆新聞本社、

二〇〇七

『婦人のあゆみ百年』日本婦人団体連合会、一九七八

『戦後史と女性の解放』絲屋寿雄・江刺昭子、合同出版、

一九七七

『日教組婦人部三十年史』日教組婦人部、一九七七

『静教組三〇年史』静岡教職員組合、一九七八

『天には星 地には花 人には愛』鈴木達正追悼記念

誌、静岡教育文化センター

『われら生涯ヒラ教員』西沢紀夫、太郎次郎社、

一九七九

『われらガリ版先生』伊東巖、太郎次郎社、一九八一